國立臺灣大學文學院日本語文學研究所

碩士論文

Department of Japanese Language and Literature
College of Liberal Arts
National Taiwan University

Master Thesis

日本語における上下方向を表す
複合動詞後項に対する意味分析
―中国語における方向補語との比較研究を中心に―

日語中表示上下方向的複合動詞後項之語意分析
-以與中文的趨向補語的比較爲中心-

研究生：陳奕廷　撰
學號：R95127001

指導教授：　謝豐地正枝　教授

中華民國 98 年 1 月

Jan, 2009

謝辭

能夠完成這篇論文，我要誠心感謝每一位支持並鼓勵我的人，在此獻上最大的謝意。

首先我要感謝我的指導教授謝豐地老師，沒有老師的指導與鞭策我是無法完成這篇論文的，老師在百忙中還是抽出時間來細心地對我指導，指出許多我所忽略的問題點，而在我遇到瓶頸時，老師總會提供我另一種看法，而使我豁然開朗。在我鬆懈的時候，老師也不斷地督策我，使我能堅持下去，老師也鼓勵我到外校去發表論文，讓我有了寶貴的經驗。最重要的是，老師教導了我做學問所需要的嚴謹態度，於公於私，老師的指導都對我受益良多，在此以這篇論文的完成做爲我對老師的報答。

接下來我要答謝的是林慧君老師，上了老師的課，讓我有了更多元的視點，雖然我不是老師的指導學生，但老師卻還是熱心地提供我許多寶貴的意見及參考資料，在此答謝老師的支持。

在這裡我也要感謝審查論文的賴錦雀老師與陳伯陶老師，賴老師提供了我許多珍貴的建言，使這篇論文的內容更加豐富，陳老師告訴我許多做人處世的道理，我都銘記在心，萬分感激兩位老師對我的指導。

最後我要感謝我的家人，當我在人生的低潮時，不斷地鼓勵我，讓我能重新站起來，有你們的協助與支持，我才能無後顧之憂地撰寫論文，謝謝你們支持我去追求自己的夢想。

日語中表示上下方向的複合動詞後項之語意分析
—以與中文的趨向補語的比較爲中心—

陳奕廷

摘要

上下方向是人類的空間認知概念中特別重要的概念，我們人類藉由空間中的上下方向之概念來理解時間或地位等抽象的概念。本論文的目的在於透過對表示上下方向之日文的複合動詞後項及中文的趨向補語進行語意分析來探究其多義之衍生程序及多義構造，並根據此語意分析的結果來作中日的對比分析，以探討中日兩種語言在空間認知上的差異。本論文藉由採用認知語言學的研究方法進行語意分析，闡明了多義之衍生程序及多義構造，而對比分析後的結果整理如下：

1.日文中表示上升方向之後項動詞可分爲把焦點放在位置變化上的與把焦點放在路徑上的，而中文並無此區別。

2.日文中表示下降方向之後項動詞因焦點的不同有個別的動詞，而從這些不同的動詞所衍生出的意義也十分多樣化，並構成複雜的體系。相反地，中文並沒有如日文一樣複雜的區別，只用「V 下」這單一的趨向補語，其意義也比日文少。

3.中文的 V 上從「上升」這基本義擴張成「前進」這衍生義，這是因爲人類的視覺機制之一的「深度知覺」所衍生的，但是在日文中表示上升方向的後項動詞之中並沒有「前進」這樣的意義，這很可能是因爲在日文中存有「SUSUMU」這個表示前進的動詞。日文中表示下降方向之後項動詞中「—SAGARU」可表示「後退」，這也是因爲人類的視覺機制之一的「深度知覺」所造成的，相反地在中文的 V 下的意義中並沒有「後退」這樣的意義存在，這應該是因爲與 V 下連接的處所名詞除了像「海、河、水、井、陷阱」這些少數的場所之外皆爲「起點」，也因爲這樣而不符合「深度知覺」這視覺機制。

關鍵詞：語意分析，語義延伸，多義構造，複合動詞，趨向補語

Semantic Analysis of V2 in Japanese V1+V2 Compound Verbs that Express Vertical Direction: A Comparison with Chinese Directional Complements

Chen Yi-Ting

Abstract

The vertical direction is an especially important concept in human spatial cognition. We humans understand abstract concepts such as time and the positions by utilizing the concept of a spatial vertical direction. The purpose of this thesis is to perform semantic analysis to elucidate the semantic extension process and the polysemy structure of V2 in Japanese V1+V2 compound verbs and Chinese directional complements that express vertical direction. And then analyze the result of semantic analysis in order to investigate the difference of the spatial cognition of both languages. Based on the approach of cognitive linguistics, this thesis clarified the semantic extension mechanism and the polysemy structure. And the results of the contrastive analysis are summarized as follows:

1. Japanese V2 that express the direction of rise are divided into the one that the focus was put on a positional change and the one that the focus was put on the path. On the other hand, Chinese does not have such a distinction.
2. By focusing on different aspects, Japanese V2 that express the direction of descent vary. Meanings extended from each verb are various, and formed a complicated system. On the other hand, Chinese does not have such a complex distinction like Japanese. Chinese uses a single direction complement “V-sia”, and its meanings are less than Japanese.
3. Chinese “V-shang” is extended from the basic meaning “Rise” to metaphorical meaning “Advancement”. This is due to “Perception of the depth” which is one of the mechanisms of man's sight. However, the meaning "Advancement" is not included in the meanings of Japanese V2 that express the direction of rise. It appears that it is because the verb "SUSUMU" which express “Advancement” in Japanese exists.

“-SAGARU” has the meaning “Move Backwards” in Japanese V2 that express the direction of descent. This is due to the mechanism “Perception of the depth”. On the contrary, the meaning “Move Backwards” is not included in the meanings of Chinese “V-sia”. It appears it is because place noun related to “V-sia” expresses “SOURCE” excluding the limited places such as “Sea, river, water, well, and trap”. Therefore, it is against the mechanism "Perception of the depth".

Keywords: Semantic analysis, Semantic extension, Polysemy Structure,
Compound Verb, directional complement

日本語における上下方向を表わす複合動詞後項に対する意味分析
―中国語における方向補語との比較研究を中心に―

陳奕廷

要旨

上下方向は人間の空間認知の中でも特に重要な概念であり、我々人間は空間的な上下方向の概念を用いることで、時間や地位などの抽象的な概念を理解している。本稿の目的は、上下方向を表わす日本語の複合動詞後項と中国語の方向補語について意味分析し、その多義的別義の派生プロセスおよび多義構造を明らかにすることである。その上で、日本語と中国語の意味分析の結果について対照分析し、両言語の空間認知の違いについて考察する。本稿は認知言語学のアプローチに基づいて意味分析を行うことにより、多義的別義の派生メカニズムと多義構造を明らかにした。そして、対照分析の結果は以下のように示される。

1. 日本語の上昇方向を表す後項動詞は焦点を位置変化に置いたものと、焦点を経路に置いたものに分けられる。一方、中国語にはその区別がない。
2. 日本語の下降方向を表す後項動詞は異なる焦点の当て方により別々の動詞を持ち、それぞれの動詞から派生した意味も多様で、複雑な体系をなしている。一方、中国語は日本語のような複雑な区別はなく、「V 下」という単一の方向補語を用いる。その意味も日本語に比べると少ない。
3. 中国語のV上は、「上昇」という基本義から、「前進」という派生義に拡張する。これは人間の視覚のメカニズムの一つである「奥行きの知覚」によるものである。しかし、日本語の上昇を表す複合動詞後項の中に「前進」という意味は含まれていない。これは、日本語に「進む」という前進を表す動詞が存在するためだと思われる。日本語の下降方向を表す複合動詞後項の中で「～さがる」は「後退」という意味を持つが、これも「奥行きの知覚」という視覚のメカニズムによるものである。一方、中国語の V 下の意味の中には「後退」という意味は含まれていない。これはV下に

後接する場所名詞が「海、河、水、井、陥阱」などの限られた場所を除いて、「起点」となるため、「奥行きの知覚」というメカニズムに反し、矛盾が生じるからだと思われる。

キーワード：意味分析、意味拡張、多義構造、複合動詞、方向補語

目次

口試委員會審定書……i
謝辭……ii
中文摘要……iii
英文摘要……iv
日文摘要……vi
目次……viii
図目次……xiii
表目次……xv
第一章　序論……1
1.1 研究動機と研究目的……1
1.2 先行研究とその問題点……2
1.3 研究範囲と研究方法……6
1.4 本論文の構成……9
第二章　メタファーとメトニミーに対する考察……10
2.1 メタファーに対する考察……10
2.2 メトニミーに対する考察……14
第三章　上昇方向を表す日本語の複合動詞後項及び中国語の方向補語の意味分析……17
3.1 日本語の上昇方向を表す複合動詞後項の意味分析……17
3.1.1 先行研究……17
3.1.2「～あがる」の意味分析……21
3.1.2.1「～あがる」の基本義……21
3.1.2.2「～あがる」の多義的別義－〔2〕……22
3.1.2.3「～あがる」の多義的別義－〔3〕……23

3.1.2.4「～あがる」の多義的別義－〔4〕……23
3.1.2.5「～あがる」の多義的別義－〔5〕……24
3.1.2.6「～あがる」の多義的別義－〔6〕……27
3.1.2.7「～あがる」の多義的別義－〔7〕……29
3.1.2.8「～あがる」の多義的別義－〔8〕……30
3.1.2.9「～あがる」の多義構造……31
3.1.3「～あげる」の意味分析……32
3.1.3.1「～あげる」の基本義……32
3.1.3.2「～あげる」の多義的別義－〔2〕……35
3.1.3.3「～あげる」の多義的別義－〔3〕……36
3.1.3.4「～あげる」の多義的別義－〔4〕……36
3.1.3.5「～あげる」の多義的別義－〔5〕……37
3.1.3.6「～あげる」の多義的別義－〔6〕……38
3.1.3.7「～あげる」の多義的別義－〔7〕……38
3.1.3.8「～あげる」の多義的別義－〔8〕……39
3.1.3.9「～あげる」の多義的別義－〔9〕……40
3.1.3.10「～あげる」の多義構造……40
3.1.4「～のぼる」の意味分析……41
3.1.4.1「～のぼる」の基本義……41
3.1.4.2「～のぼる」の多義的別義－〔2〕……42
3.1.4.3「～のぼる」の多義構造……43
3.2 中国語の上昇方向を表す方向補語の意味分析……44
3.2.1 先行研究……44
3.2.2 中国語の「～上」の意味分析……47
3.2.2.1「～上」の基本義……47
3.2.2.2「～上」の多義的別義－〔2〕……49
3.2.2.3「～上」の多義的別義－〔3〕……50
3.2.2.4「～上」の多義的別義－〔4〕……51

3.2.2.5「～上」の多義的別義ー〔5〕……..53
3.2.2.6「～上」の多義的別義ー〔6〕...……...54
3.2.2.7「～上」の多義的別義ー〔7〕……..55
3.2.2.8「～上」の多義的別義ー〔8〕……..57
3.2.2.9「～上」の多義的別義ー〔9〕……..58
3.2.2.10「～上」の多義構造……...59
3.3 上昇方向を表す日本語の複合動詞後項と
中国語の方向補語の対照分析…...……... 60

第四章　下降方向を表す日本語の複合動詞後項及び中国語の方向
補語の意味分析……..…….....63
4.1 日本語の下降方向を表す複合動詞後項の意味分析……..63
4.1.1 先行研究……...……...63
4.1.2「～さがる」の意味分析……...66
4.1.2.1「～さがる」の基本義‐1……...67
4.1.2.2「～さがる」の基本義‐2……...75
4.1.2.3「～さがる」の基本義‐3……...76
4.1.2.4「～さがる」の多義構造……..…...78
4.1.3「～さげる」の意味分析……...79
4.1.3.1「～さげる」の基本義‐1……...79
4.1.3.2「～さげる」の基本義‐2……...80
4.1.3.3「～さげる」の基本義‐3……...80
4.1.3.4「～さげる」の多義的別義ー〔2〕……81
4.1.3.5「～さげる」の多義的別義ー〔3〕……82
4.1.3.6「～さげる」の多義的別義ー〔4〕……83
4.1.3.7「～さげる」の多義的別義ー〔5〕……83
4.1.3.8「～さげる」の多義構造……..……...84
4.1.4「～おりる」の意味分析……...85

4.1.5「～おろす」の意味分析……...86
4.1.5.1「～おろす」の基本義……...86
4.1.5.2「～おろす」の多義的別義－〔2〕……87
4.1.5.3「～おろす」の多義的別義－〔3〕……88
4.1.5.4「～おろす」の多義的別義－〔4〕……88
4.1.5.5「～おろす」の多義的別義－〔5〕……89
4.1.5.6「～おろす」の多義構造……...91
4.1.6「～くだる」の意味分析……...92
4.1.6.1「～くだる」の基本義……...92
4.1.6.2「～くだる」の多義的別義－〔2〕……92
4.1.6.3「～くだる」の多義的別義－〔3〕……93
4.1.6.4「～くだる」の多義構造……...94
4.1.7「～くだす」の意味分析……...94
4.1.7.1「～くだす」の基本義……...94
4.1.7.2「～くだす」の多義的別義－〔2〕……95
4.1.7.3「～くだす」の多義的別義－〔3〕……95
4.1.7.4「～くだす」の多義構造……...96
4.1.8「～おちる」の意味分析……...97
4.1.8.1「～おちる」の基本義……...97
4.1.8.2「～おちる」の多義的別義－〔2〕……99
4.1.8.3「～おちる」の多義構造……...100
4.1.9「～おとす」の意味分析……...101
4.1.9.1「～おとす」の基本義……...101
4.1.9.2「～おとす」の多義的別義－〔2〕……102
4.1.9.3「～おとす」の多義的別義－〔3〕……103
4.1.9.4「～おとす」の多義的別義－〔4〕……104
4.1.9.5「～おとす」の多義的別義－〔5〕……106
4.1.9.6「～おとす」の多義的別義－〔6〕……107

4.1.9.7「～おとす」の多義構造……...114
4.2 中国語の下降方向を表す方向補語の意味分析……...……115
4.2.1 先行研究…….…...115
4.2.2 中国語の「V 下」における「～下」の意味分析……120
4.2.2.1「～下」の基本義……...120
4.2.2.2「～下」の多義的別義－〔2〕……...121
4.2.2.3「～下」の多義的別義－〔3〕……...122
4.2.2.4「～下」の多義的別義－〔4〕……...123
4.2.2.5「～下」の多義的別義－〔5〕……...124
4.2.2.6「～下」の多義的別義－〔6〕……..125
4.2.2.7「～下」の多義的別義－〔7〕……..……126
4.2.2.8「～下」の多義的別義－〔8〕……..……126
4.2.2.9「～下」の多義構造……...127
4.3 下降方向を表す日本語の複合動詞後項と
中国語の方向補語の対照分析……...128

第五章　結論と今後の課題……...134
5.1 結論……....134
5.2 今後の課題……...…...136

参考文獻…….……..137

図目次

図 2-1　メタファー<人生は旅である>……11
図 2-2　方向的次元と「経験的基盤(experiential base)」……13
図 2-3　メトニミー<傘＞雨天>……15
図 2-4　メトニミーを支える意味関係図……16
図 3-1 「土が盛り上がる」……25
図 3-2 「形の伸長」によって認知される上昇の動き……25
図 3-3 「指が膨れ上がった」……25
図 3-4　基底部の上方移動に伴う「形の縮小」……26
図 3-5　周辺部が中心に向かって移動するのに伴う「形の縮小」……26
図 3-6 「～あがる」の多義構造……32
図 3-7 「～あげる」の多義構造……41
図 3-8 「～のぼる」の多義構造……43
図 3-9 「～上」のイメージスキーマ……47
図 3-10　動作の着点がプロファイルされた経路表現のイメージスキーマ……48
図 3-11　中間経路がプロファイルされた経路表現のイメージスキーマ……48
図 3-12　奥行きの知覚……51
図 3-13 「上昇」の一部がプロファイルされ「動作の到達」を表す……52
図 3-14　平面上の上下……56
図 3-15　目に触れる外側が「上」……56
図 3-16 「上乗せする」のイメージスキーマ……59
図 3-17 「～上」の多義構造……60
図 4-1 「枝が垂れさがっている」……70
図 4-2 「風鈴がつりさがっている」……70
図 4-3 「看板がぶらさがっている」……70
図 4-4 「枝が折れさがっている」……70
図 4-5 「つららが軒からさがっている」……70
図 4-6 「あがる／さがる」と「あがる／おりる」……77

図 4-7　「～さがる」の多義構造……79
図 4-8　「～さげる」の多義構造……85
図 4-9　「構想を実現化する」という意味を表す「～おろす」……90
図 4-10　「～おろす」の多義構造……91
図 4-11　「～くだる」の多義構造……94
図 4-12　「～くだす」の多義構造……97
図 4-13　「～おちる」の多義構造……101
図 4-14「対象を自分の支配領域へ移行させる」という意味を表す「～おとす」..104
図 4-15　「～おとす」の多義構造……114
図 4-16　于康による「V 下」における「下」の意味拡張のプロセス……119
図 4-17　「～下」のイメージスキーマ……120
図 4-18　離脱を表す「～下」の多義的別義〔4〕のイメージスキーマ……124
図 4-19　≪入れ物≫のプロトタイプのイメージスキーマ……125
図 4-20　「～下」の多義構造……128

表目次

表 3-1　姫野による後項動詞「～あがる」の意味分析結果……18
表 3-2　姫野による後項動詞「～あげる」の意味分析結果……19
表 3-3　「～あがる」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…..22
表 3-4　「～あがる」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…22
表 3-5　「～あがる」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…23
表 3-6　「～あがる」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…24
表 3-7　「～あがる」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…27
表 3-8　「～あがる」の別義〔6〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…29
表 3-9　「～あがる」の別義〔7〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…30
表 3-10　「～あがる」の別義〔8〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…31
表 3-11　「～あげる」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…35
表 3-12　「～あげる」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…36
表 3-13　「～あげる」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…36
表 3-14　「～あげる」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…37
表 3-15　「～あげる」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…37
表 3-16　「～あげる」の別義〔6〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…38
表 3-17　「～あげる」の別義〔7〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…39
表 3-18　「～あげる」の別義〔8〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…39
表 3-19　「～あげる」の別義〔9〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…40
表 3-20　「～のぼる」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…42
表 3-21　「～のぼる」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…43
表 3-22　「～上」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……49
表 3-23　「～上」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……50
表 3-24　「～上」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……51
表 3-25　「～上」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……53
表 3-26　「～上」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……54
表 3-27　「～上」の別義〔6〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……55

表 3-28 「～上」の別義〔7〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……57
表 3-29 「～上」の別義〔8〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……58
表 3-30 「～上」の別義〔9〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……59
表 3-31 上昇方向を表す日本語の複合動詞後項の意味分析結果……61
表 3-32 上昇方向を表す中国語の方向補語の意味分析結果……..……62
表 4-1 姫野による下降方向を表す後項動詞の意味分析結果……..…64
表 4-2 「～さげる」の基本義‐1を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…80
表 4-3 「～さげる」の基本義‐2を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…80
表 4-4 「～さげる」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…82
表 4-5 「～さげる」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…82
表 4-6 「～さげる」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…83
表 4-7 「～さげる」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…84
表 4-8 「～おりる」を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……86
表 4-9 「～おろす」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……87
表 4-10 「～おろす」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…88
表 4-11 「～おろす」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…88
表 4-12 「～おろす」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…89
表 4-13 「～おろす」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…90
表 4-14 「～くだる」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…92
表 4-15 「～くだる」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…93
表 4-16 「～くだる」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…94
表 4-17 「～くだす」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…95
表 4-18 「～くだす」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…95
表 4-19 「～くだす」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…96
表 4-20 「～おちる」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…99
表 4-21 「～おちる」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…100
表 4-22 「～おとす」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…102
表 4-23 「～おとす」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…103

表 4-24　「～おとす」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…104
表 4-25　「～おとす」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…106
表 4-26　「～おとす」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…107
表 4-27　情報の欠落を表す後項と情報の伝達を表す前項の結合状況……112
表 4-28　「～おとす」の別義〔6〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト…114
表 4-29　于康による「V 下」における「下」の意味特徴……118
表 4-30　「～下」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……121
表 4-31　「～下」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……122
表 4-32　「～下」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……123
表 4-33　「～下」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……124
表 4-34　「～下」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……125
表 4-35　「～下」の別義〔6〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……126
表 4-36　「～下」の別義〔7〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……126
表 4-37　「～下」の別義〔8〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト……127
表 4-38　下降方向を表す日本語の複合動詞後項の意味分析結果…...……129
表 4-39　下降方向を表す中国語の方向補語の意味分析結果……..……131

日本語における上下方向を表す複合動詞後項に対する意味分析
—中国語における方向補語との比較研究を中心に—

第一章　序論

1.1 研究動機と研究目的

近年、認知言語学によって、空間表現の研究が盛んに行われている。認知言語学においては言語が人間の身体的経験や知覚経験に深く根ざしていると考え、言葉を現実世界の反映としてではなく、その現実世界の中で生活する人間という認知主体が、ある「捉え方(construal)」をもとに把握した結果を反映したものであるという視点に基づいて諸理論が提唱されている。人は空間の中で生活しているため、具体的で把握しやすい空間概念を用いることで、時間などの捉えにくい抽象的な概念を理解している。この空間概念において、「上」と「下」という二つの対立する概念は、空間認知における最も重要な概念の一つであり、その概念を表す言語表現にも人間の認知のあり方が色濃く反映されている。上下という空間軸には人間の認知や知覚、さらには文化的な面が深く関わっているものと考えられる。そして、この上下の概念が、日本語と中国語においてどのように表現されているかを比較研究すれば、その上下の概念に対する日本語母語話者と中国語母語話者の認識のあり方に差異があるか、どうか、また、両言語による表現法の差異があるとすれば、その差異を生じせしめる根拠とは何か、また、日本語母語話者と中国語母語話者による認識のあり方には相違があるか、どうか、さらには思考や文化の違いが表現法の差異にどの程度の影響を与えているのか、などの諸問題を明らかにする一つの糸口になるものと考えられる。

日本語の複合動詞は外国人の日本語学習者にとって習得が難しいとされている[1]。同じように、中国語の方向補語も中国語学習者にとっては意味が複雑で困

[1] 松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して』 ひつじ書房 p.1-p.5

難であると指摘されている[2]。特に、日本語の複合動詞の派生的な用法は上級者になっても使いこなすのは難しい。習得が困難である理由としては、学習者がその複雑な意味体系を把握できていないのも一原因かも知れないと考えられる。また、日本語と中国語による複合動詞は形態的に似ているため、例えば、日本語母語話者は中国語を学習する際に、中国語の複合動詞を母語の日本語の複合動詞の枠に当てはめて考えてしまいがちであろう。同じように、中国語母語話者は日本語を学ぶ時に、日本語の複合動詞を母語の中国語の複合動詞の枠に当てはめて、理解しようと試みるであろう。日本語における複合動詞後項と中国語における方向補語の意味体系は、いずれも複雑であり難解である。しかし、それぞれの言語の学習者は、日本語における複合動詞、特に、複合動詞後項の表す意味と派生プロセス、及び、それらの複合動詞後項に対応する中国語の方向補語の表す意味と派生プロセス、などを把握すれば、日中言語間において意味的に対応する複合動詞と複合動詞後項との間に存在する意味的な相互関係を理解しやすくなると思われるのである。

以上を踏まえて、本研究の目的としては、（1）日本語における上下方向を表す複合動詞後項と、それらの複合動詞に対応する中国語における方向補語を意味的に分析・考察して比較研究し、従来の研究において明らかにされていない両言語による対応関係を明示すること、そして、（2）両言語による表現法の差異を明らかにして指摘すること、さらには、（3）この研究の結果、もし、両言語の空間認知のあり方に差異が認められたならば、その差異とその差異を生じせしめる根拠・原因について考察した上で指摘すること、の三点にある。複合動詞に対するこのような意味的な視点に基づいた日中言語の比較対照研究は、日本語学習者にとっても、中国語学習者にとっても、意義があると考えられるのである。

1.2 先行研究とその問題点

次に、上下方向を表す複合動詞後項と方向補語に関する先行研究のうちから代表的なものを取り上げ、その成果および問題点について述べる。

---

[2] 呉麗君(2005)『中国語の誤用分析―日本人学習者の場合―』西川和男編訳　関西大学出版部 p.118-p.136

日本語における複合動詞後項の意味に関する研究は、姫野(1999[3])が最も代表的である。姫野(1999)では複合動詞の後項動詞の中で、様々な自他対応関係や反義、類義関係にあるものを取り上げて分析されている。例えば、上下方向を表すものとしては第三章の「～あがる」、「～あげる」および下降を表す複合動詞類に対する分析が示される。姫野(1999)による研究の手法としては、最初に意味用法を分類した一覧表を掲げ、それに基づいて各用法ごとに説明を加える。そして、類義形式や反義形式がある場合はそれについても同様に分析し、最後に自他動詞形や類義、反義形式との意味用法の対応についてまとめている。姫野(1999)の複合動詞の意味についての研究は先駆的なものであり、後の複合動詞研究にも大きな影響を与えたものと認められる。

しかしながら、上述の姫野(1999)による分析に対しては、いくつかの問題点を挙げることが出来よう。第一に、後項動詞の基本義とそれから派生した多義的別義との関連性について充分に論じられていない点である。第二に、姫野(1999)によって分析された複数の下降方向を表す動詞の基本義が曖昧であり、それぞれの意味的差異がはっきりしていない点を指摘することができる。その例として、姫野(1999)は、「～おりる」と「～くだる」に同じ＜降下＞という意味特徴を与えているが、これでは両者の相違は明確ではない。この点に関しては、認知意味論の視点に基づいた意味拡張のプロセスや基本義と多義的別義との関連性を考慮に入れることによって、「～おりる」と「～くだる」の表すそれぞれの概念を支える適切な意味特徴を特定することができると考えられるのである。

関連して、中国語の上下方向を表す方向補語については多くの先行研究があるが、意味についての研究は『現代漢語八百詞[4]』と『現代中国語文法総覧(下)[5]』の分析が代表的なものである。

『現代漢語八百詞』は中国語の虚詞を中心に解説した辞典で、方向補語の意味について、まず文型によって分類し、次に個々の意味を列挙し、用例を短い例文という形で提示している。例文の例示は学習者の助けになるが、用例が少

---

[3] 姫野昌子(1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房
[4] 呂叔湘主編(1983) 『現代漢語八百詞』 商務印書館
[5] 劉月華他(1991) 『現代中国語文法総覧(下)』 相原茂監訳 くろしお出版

ないのが問題点である。学習者は辞典にのっていない用例に関しては、果たしてどの意味に属するのかがわからないという可能性があるからである。

一方、『現代中国語文法総覧(下)』は中国語の文法を各章ごとに説明したもので、第 5 章で補語を取り上げ、その第 2 節において方向補語を分析している。その分析の手法は、まず基本義を示し、そして派生的用法を挙げている。また、図を使って説明していることも特徴的である。このような分析方法は認知言語学による意味分析方法と似ていることが認められる。ただし、問題点としては、『現代漢語八百詞』と同じように、用例が少ないことが挙げられる。また、長い例文を示しているが、「V＋方向補語」の具体例が少なく、学習者は自分で意味を判断するしかない場合が多いのが難点であろう。

認知言語学のアプローチから、上下方向を表す中国語の方向補語について研究したものに、于康(2006a[6])(2006b[7])がある。于康は認知言語学の概念を応用して、中国語の方向補語である「V＋上」における「～上」と「V＋下」における「～下」の意味拡張のプロセスを説明している。于康(2006a)における、「～上」についての研究の手法としては、その意味が動詞の「上」の意味から来ていると考え、まず「上」という動詞を意味分析し、その意味拡張のプロセスを説明した上で、「上」と「～上」の意味の間にある相互関係を比較することによって、「～上」の意味拡張のプロセスを説明した。次に、于康(2006b)は「～下」について、「どの成分が下方に移動するか、またどのように移動するか」という基準により、「V＋下」における「下」の表す概念を分析した。また、「～下」の意味拡張のメカニズムは「家族的類似性」による意味拡張原理に基づくものであると主張した。

「家族的類似性」とは、ウィトゲンシュタインが唱えた概念で、カテゴリーの成員はカテゴリーを定義する共通属性を全ての成員が持たなくても互いに関連付けられることがあるという考え方である[8]。古典的なカテゴリー観においては、カテゴリーとは明確な境界を有しており、そして、ある共通の属性によっ

---

6 于康(2006a) 「“V 上”中“上”的語義分類與語義擴展機制」 『言語と文化』9 関西学院大学 p.19-p.35

7 于康(2006b) 「“V 下”的語義擴展機制與結果義」 『中国語の補語』 白帝社 p.209-p.231

8 Lakoff,G.(1993) 『認知意味論』 池上嘉彦・河上誓作他訳 紀伊国屋書店 p.13

て定義されるものと見なす。このカテゴリーに対する古典理論の欠陥をウィトゲンシュタインは「ゲーム」を例に取り指摘した。すなわち、全てのゲームに共有される共通属性は存在しないため、ゲームというカテゴリーは古典的なカテゴリーによってはうまく説明できないのである。「椅子取りゲーム」のような勝ち負けに拘らないものもあれば、勝ち負けこそが全てである「ギャンブル」のようなものもある。また、思考と技術がものをいう「チェス」のようなものもあれば、運任せの「ジャンケン」もある。このように、全てのゲームに共通する属性がないのにも拘らず、なぜゲームというカテゴリーが成立するのだろうか。この問題を解決する方法として、ウィトゲンシュタインはゲームというカテゴリーは「家族的類似性」という特性によって統合されていると主張した。ある家族の成員は、お互いに似ているが、その似方は様々である。同じ体格、顔立ち、髪の色、目の色など、彼らが共有しているものは様々である。しかし、家族の全ての成員に共有されるただ一つの共通属性が必要とされるわけではない。ゲームも同様である。「チェス」と「囲碁」は共に思考力と技術を要し、「ポーカー」と「ばば抜き」は共にトランプ・ゲームである。要するに、ゲームは家族の成員のように様々な形でお互いに似ているのである。このような類似がゲームを一個のカテゴリーに仕立てているのである[9]。

于康によるこのような上下方向を表す方向補語の意味拡張のプロセスを説明したものは従来の研究にはなく、中国語の複合動詞に対する研究の価値ある成果を示したものであると言えよう。しかし、于康(2006a)(2006b)による分析方法は分類が大まかすぎるという問題点がある。例えば、前述の于康(2006a)の「～上」に対する分析では、「心理的上昇」という意味を表す「V＋上」の例として、「走上、跑上、送上、呈上、獻上、寄上、交上、奉上、遞上」が挙げられている。そして、「走上前線(前線に赴く)」、「跑上前(走って前に進む)」は心理的な上方への移動を示しており、「前方に進む」と同じであると見なして、「献上禮物(贈り物を献上する)」、「交上考卷(答案を提出する)」と同じ「心理的上昇」という意味に属するという[10]。しかし、これらは異なる認知のメカニズムによって意味拡張したものであり、別の意味として区別するのが妥当だと思われるのである。

---

[9] Lakoff,G.(1993) 前掲書 p.17-p.18

[10] 于康(2006a) 前掲書 p.31-p.32

以上のような先行研究による不十分な点を指摘しながら、本論文の論旨を進めていくものである。

1.3 研究範囲と研究方法

本研究は共時的な研究で、対象は現代の日本語と中国語である。なお、本稿での分析対象としての中国語は中国の北方方言に基づく現代の共通語(標準語)として、台湾で使われている「国語[11]」のことを指す。また、本研究で行う意味分析の対象としては、方向性を表す日本語複合動詞の後項動詞の中で、上昇方向を表す日本語の「～あがる、～あげる、～のぼる」の三種の後項動詞、および中国語の「V＋上」における方向補語である「～上」を取り上げる。また、下降方向を表す日本語複合動詞の後項を成す「～さがる、～さげる、～おりる、～おろす、～くだる、～くだす、～おちる、～おとす」の八種類の後項動詞、並びに中国語の「V＋下」における方向補語である「～下」を取り上げる。

研究方法としては、本稿は前述の日本語複合動詞の後項動詞を成す十一種類の動詞及び中国語の方向補語である「～上」「～下」の表す概念に対して、主に認知言語学の諸理論に基づいて認知意味論的なアプローチにより意味分析を行う。まず、日本語における複合動詞後項の部分が上下の概念を表す複合動詞の内、意味的な側面が似通っている概念を示すものを意味別に分類する。次に、それぞれの意味の個々のカテゴリーに属している複合動詞後項のリストの中から例を取り出して、その複合動詞後項を含んだ文例を示しながら、複合動詞後項の表す概念に対して意味分析を進めていく。その場合、複合動詞の表す基本義の抽出に関しては、従来からの日本語の文法論による複合動詞に対する意味を含めた上で、もし、基本義から意味的に拡張しているものが認められた場合には、その意味的な拡張プロセスと、結果として得られる多義的別義の認定を認知意味論に基づいて進めていく。さらに、複合動詞後項の示す基本義から意味的な拡張によって多義的別義が派生したと認められた場合には、それらの多義的別義の意味を支える意味構造を明らかに示した上で、基本義及び多種の多義的別義の間に見出される意味的な相互関係を図に示す。

---

[11] Christine Lamarre(2002)　「助詞への道—漢語の“了”, “得”, “倒”の諸機能をめぐって」　大堀壽夫編　『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』　東京大学出版会　p.186

複合動詞後項が表す基本義となる意味を認定する際には、その後項が表す概念を構成する意味特徴を抽出し、また、類義表現と比較することによって、その意味的な違いを明らかにする。そして、もし、ある後項の表す概念が基本義から意味的に拡張している場合には、その拡張プロセスに関しては、国広による意味論及び認知言語学の理論に基づいて分析・考察する。国広による意味論によれば、多義性の発生過程には、（1）適用の推移、（2）使用場面の特殊化、（3）比喩的用法、（4）同音異義語の再解釈、（5）外国語の影響、（6）形の似た語の影響、などの過程が含まれる[12]。上記の第（3）の「比喩的用法」に基づく多義性の発生過程に関しては、特に、認知意味論に基づいたメタファー(metaphor)的な意味拡張とメトニミー(metonymy)的な意味拡張に基づいて説明する。

メタファーとは、籾山(2001[13])の定義によると、二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩である。また、大堀(2002[14])によると、メタファーとは、我々が抽象的な概念を理解するための方法の一つであり、それは抽象的な概念と明確な形を持った具体的な概念との間に成り立つ一定の対応関係であると見なす。加えて、メタファー形成のプロセスは具体的で基本となる概念から抽象的な概念へと一連の構造が移されることで理解が成り立つプロセスであり、このような対応関係を写像(mapping)と呼ぶ。さらに、メタファーは比喩的ではあっても、奇抜で「文学的」な装飾だけではなく、日常的に用いられるものも含む。そして、我々人間がメタファーを用いて物事を捉える捉え方は、大堀(2002)によると「抽象概念を容易に把握し、経験の世界を構成するための重要な認知能力である」という[15]。このように、本稿で扱う上下方向という概念は、我々人間にとっては最も具体的で把握しやすい空間的概念であるため、喩えるものと喩えられるものとの間に存在する意味関係がメタファーを形成し、そのメタファー的な対応関係によって、抽象的な概念を理解することができると考えられる。

---

[12] 国広哲弥(1992) 『意味論の方法』 大修館書店 p.97-p.103

[13] 籾山洋介(2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」 山梨正明他編 『認知言語学論考』 No.1 ひつじ書房 p.29-p.58

[14] 大堀壽夫(2002) 『認知言語学』 東京大学出版会

[15] 大堀壽夫(2002) 前掲書 p.74-p.75

また、メトニミー的意味拡張もメタファー的意味拡張と同様に意味拡張のメカニズムの一つである。大堀(2002)は、「メトニミーはメタファーのような異なる概念領域の写像関係とは違い、何らかの概念的近接性に基づいて、同一の概念領域の中でプロファイル(焦点、図)が移行することである」と説明している[16]。メタファーとメトニミーは単なるレトリックの技法のみにとどまらず、人間の事象理解に関わる認知的に重要な方略であると言えよう。この事実を踏まえて、メタファーとメトニミー的な意味関係に基づいて基本義から意味的に拡張した多義的別義を含めた様々な意味拡張のプロセスを分析した上で、これらの複数の意味の相互関係と拡張の方向性を表す統括的な多義構造の相関図を示す。

次に、これらの日本語における上下の方向を示す複合動詞後項が表す意味に対応する中国語の方向補語を対照させて、これらの方向補語に対して意味的に分析・考察して比較研究していく。そして、結果として、もし、表現上の差異が認められれば、それらの一つ、一つの差異を明らかにしていく。その分析・考察をする際に、もし、日本語と中国語において上下の概念に対する認識のあり方に差異が発見されれば、その差異を指摘して明らかにする。そして、その差異を生じせしめている根拠・原因を追求するために日・中両国のそれぞれの文化面に関わる諸要素に対してより一歩深く比較分析し、考察を試みていく。

最後に、総括結論として、日本語における上下の方向を示す複合動詞後項が表す意味を、意味上のカテゴリー別に分類して、例として意味分析の対象になった複合動詞後項の意味を支える意味構造も示す。そして、それらに対応するそれぞれの中国語の方向補語の表す意味を対照的に示す。もし、上下の概念に対して、日本語・中国語の表現を支える認知主体の認識のあり方に差異が発見されたならば、それも併記して明示する。さらに、それらの表現上、認識上の相違を生じせしめる根拠・原因に関して分析・考察した結果、それぞれの言語を生み出した日中両国の歴史的・文化的な諸要素にまで遡る関わりが見出された場合には、それらの根拠・原因も併記して示す。

なお、本稿で用いる日本語の文例は『新潮文庫の 100 冊 CD-ROM 版[17]』と

---

[16] 大堀壽夫(2002)　前掲書　p.76

[17] 『新潮文庫の 100 冊 CD-ROM 版』(1995)　新潮社

「青空文庫[18]」に収録されている文学作品、または「朝日新聞記事データベース2003・2004[19]」に収録されている新聞記事や産経新聞[20]、日本経済新聞[21]といったインターネットニュースサイトで公開されている新聞記事を中心に集めた。中国語の例文に関しては、台湾の中央研究院が開発し、インターネット上にて公開している「中央研究院現代漢語語料庫[22]」から収集した文例を用いる。

1.4 本論文の構成

本論文は、本章を含めて五章から構成される。第一章は序論として、研究の動機と目的、先行研究とその問題点、研究の範囲と方法などについて述べる。第二章では、意味分析を行う際に援用する認知言語学の概念であるメタファーやメトニミーについて検討する。第三章では上昇方向を表す日本語の複合動詞後項及びそれらに対応する中国語の方向補語に対して意味分析を試みる。そして、第四章では下降方向を表す日本語の複合動詞後項とそれらに対応する中国語の方向補語を分析する。その手順としては、まず先行研究について検討し、次に日本語の複合動詞後項の意味分析を行った上で、それらに対応する中国語の方向補語の意味分析をし、最後に分析の結果、明らかにされた事実に基づいて対照分析をする。対照分析の部分では主に日本語と中国語の意味的な対応関係とその差異についてを論じる。最後に、第五章において、まとめとして、本論文の分析によって解明され、明らかにされたこと及び成果を総括し、残された今後の課題について述べる。

---

18 〈http://www.aozora.gr.jp/〉

19 『CD-HIASK 2003 朝日新聞記事データベース』(2004) 紀伊国屋書店
『CD-HIASK 2004 朝日新聞記事データベース』(2005) 紀伊国屋書店

20 MSN 産経ニュース〈http://sankei.jp.msn.com/〉

21 日本経済新聞〈http://www.nikkei.co.jp/〉

22 中央研究院現代漢語標記語料庫 (Academia Sinica Balanced Corpus of Modern Chinese)
〈http://www.sinica.edu.tw/SinicaCorpus/index.html〉

第二章　メタファーとメトニミーに対する考察

本章では、多義語の意味拡張のメカニズムの中で重要視されているメタファー(隠喩)とメトニミー(換喩)という二つの比喩について考察する。認知意味論によるメタファーとメトニミーの研究を比較しながら、それぞれの比喩による意味拡張のメカニズムに対して考察した上で、本論文におけるメタファーとメトニミーの定義を明らかにする。

2.1 メタファーに対する考察

本節では、意味拡張のメカニズムの一つであるメタファーについて考察する。まずは、次のような表現を見てみよう。

a.彼女は職場の花だ。

例 a.のような表現は、美しい人と美しい花の間に＜美しく人目を引くもの＞という共通の意味特徴が存在するため成立するのである。このような物事の類似性に基づく比喩をメタファー（隠喩)という。

籾山(2001[23])によると、メタファーとは以下のように定義される比喩である。

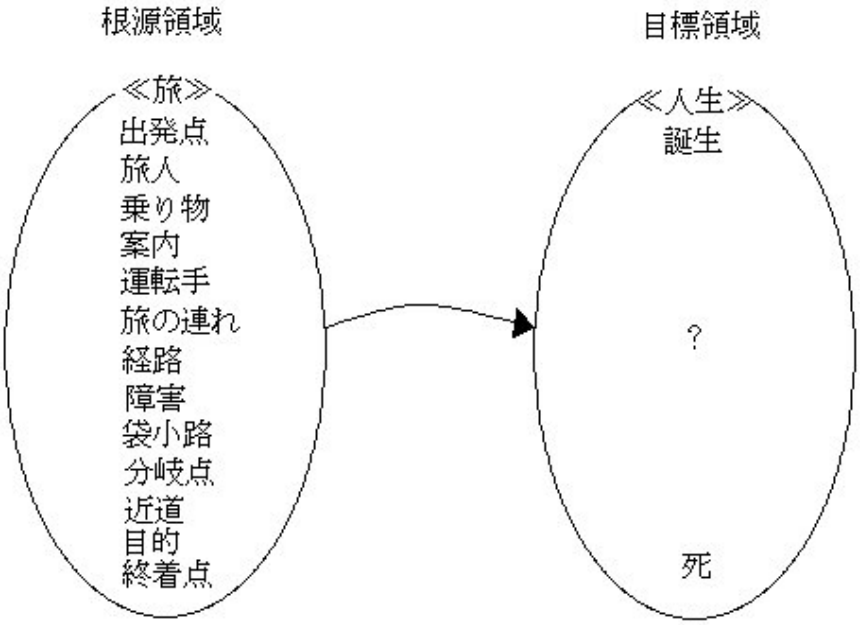
メタファー：二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

さらに、大堀(2002)によると、メタファーとは具体的で基本となる概念から、抽象的な概念へと一連の構造が移されることで理解が成り立つプロセスである。そして、このような対応関係を写像(mapping)と呼ぶことは既に前章において指摘した。例えば、<人生は旅である>というメタファーが構成されているメカニズムを考えてみると、それは「旅」という概念領域から「人生」という概念領域へと写像したものであることが分かる。これを図式すれば、図 2-1 のようになる。「人生」という概念は、それ自体では「誕生」と「死」という要素しかないが、「旅」からの写像によって新たな構造が与えられる。また、例えば、

[23] 籾山洋介(2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明他編『認知言語学論考』No.1　ひつじ書房　p.34

「『分岐点』や『乗り物』のような要素は、メタファーによって『人生』という概念領域の中に新たに作り出され、結果として『人生』における特定の出来事をプロファイルする効果をもつ[24]」という。そして、「旅」のように、より基本的で理解のもととなる概念領域を、認知言語学では、根源領域(source domain)と呼び、そして、「人生」のように、メタファーによる理解の対象となる概念領域を目標領域(target domain)と呼ぶ。

図 2-1　メタファー<人生は旅である>　(大堀 2002：75)



このように、メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することである[25]。

<人生は旅である>のようなメタファーは「構造のメタファー」 (structural metaphors) として定義される。これは、ある概念が他の概念に基づいてメタファーによって構造を与えられているケースである[26]。また、ある概念が他の概念に基づいて構造を与えられているのではなく、概念同士が互いに関係しあって

[24] 大堀壽夫(2002)　前掲書　p.75
[25] Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. Metaphors We Live By. Univ. of Chicago Press.（渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳、（1986）『レトリックと人生』、大修館書店）p.6
[26] Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. 前掲書　p.18

一つの全体的な概念体系を構成しているものを「方向づけのメタファー」(orientational metaphors)という。この「方向づけのメタファー」の中には、本論文の中心でもある「上―下」という空間の方向性に関係があるメタファーが含まれている。また、「上―下」というメタファー以外に、「内―外」、「前―後」、「中心―周辺」などといったメタファーも「方向づけのメタファー」に含まれる。上下、内外、前後などに関する比喩表現は、方位性に関する経験的な基盤を基にしている。そして、この種の方位性は話し手が話す言語を生み出している社会の文化面に深く係わっており、毎日の生活の文脈の中で経験的に決められている。山梨による方位性にもとづく比喩表現の典型例を参考にして下記にその具体例を示す。

（1）－a　今年は給料が上がった。

（1）－b　今年は給料が下がった。

（2）－a　あの料理人は腕が上がった。

（2）－b　あの料理人は腕が落ちた。

（3）－a　林さんは自分の妻を見下している。

（3）－b　この土地は市役所の管理下にある。

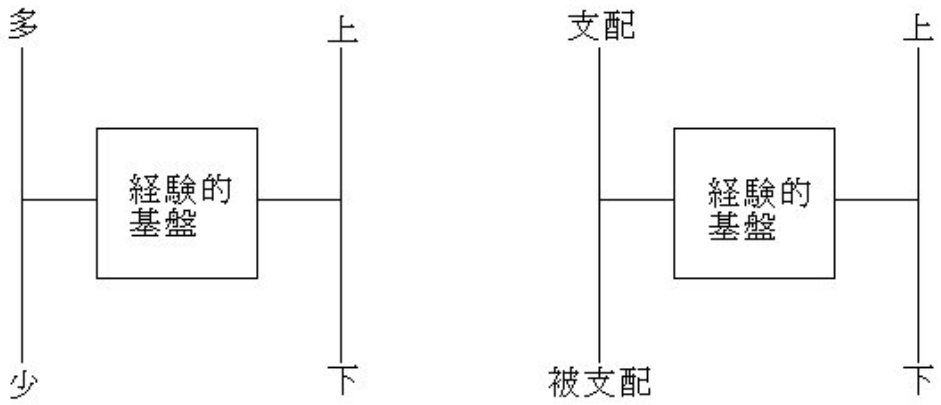
（4）－a　この論文のロジックの部分を上げよう。

（4）－b　この論文の内容はロジックの部分が弱い。

において、「（1）－a」と「（1）－b」は「多―上」の方位性を表し、「（2）－a」と「（2）－b」は「良―上」の方位性を表し、「（3）－a」と「（3）－b」は「支配―上」の方位性を表し、「（4）－a」と「（4）－b」は「理性―上」の方位性を表すと見なされる。このように、我々人間は「多」、「良」、「支配」などの外界のできごとを把握する枠組みとして、上／下、内／外、などの２項対立的な方位性を通して、「良」、「支配」などの抽象的な概念が指示する意味内容を把握して、理解することができるのである。このような方位的な比喩と外界の把握に関する知識の枠組みを、レイコフとジョンソンは「経験的基盤(experiential base)」と呼び、それを図 2-2 で表した[27]。

[27] 山梨正明（1998）『比喩と理解』東京大学出版会 p.51-p.52

図 2-2　方向的次元と「経験的基盤(experiential base)」



こうした空間の方向性というのは、われわれの肉体がそうした方向性を持っているということ、そして、その肉体が物理的環境の中で機能しているという事実から生じている。方向づけのメタファーは、ある概念に空間的方向性を与えるのである。例えば、「HAPPY　IS　UP　<楽しきは上>」というように「楽しい」という概念が「上」と方向付けられる事実がある故に、「今日は上々の気分である」という表現が出てくるのである[28]。我々は悲しいことがあったり、気持ちが沈んでいる時はうなだれた姿勢になり、元気はつらつとしている時はまっすぐな姿勢になるのが普通である[29]。上述のような肉体上の基盤により、「HAPPY　IS　UP <楽しきは上>」というメタファーが生まれたのである。このように、メタファーとして使われるこのような方向性は恣意的なものではなく、それらは我々の肉体的経験と文化的経験に基づいていることが観察できよう。

以上、メタファーについての研究について考察したが、本論文におけるメタファーの定義としては、「二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩表現で、それは具体的で基本となる概念から、抽象的な概念へと一連の構造が移されることで理解が成り立つプロセスである」と定義する。この定義は籾山(2001)と大堀(2002)の定義を合わせて導き出されたものである。

[28] Lakoff, G. and M. Johnson. 1980.　前掲書　p.18-p.19
[29] Lakoff, G. and M. Johnson. 1980.　前掲書　p.20

2.2 メトニミーに対する考察

本節では、意味拡張のもう一つのプロセスを示すメトニミーについて考察する。次の表現を見てみよう。

b.やかんが沸いている。

例 b.における「やかん(容器)」は空間的な隣接関係にある「やかんの中の水(容器の中の中身)」を表す「全体／一部」の意味関係に基づいた比喩で、メトニミー(換喩)と呼ばれる。

Lakoff (1993)によると、メトニミーとは、人間による認知の基本的特徴の一つであり、「あるもののよくわかっている一面、または、すぐに知覚できる一面を取って、それを使って、そのものの全体、または、そのものの他の面や部分を表すということは、人間がごく普通に行うことである[30]」という。また、籾山(2001[31])によるメトニミーの定義は下記の通りである。

メトニミー：二つの事物の外界における隣接性、あるいは二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

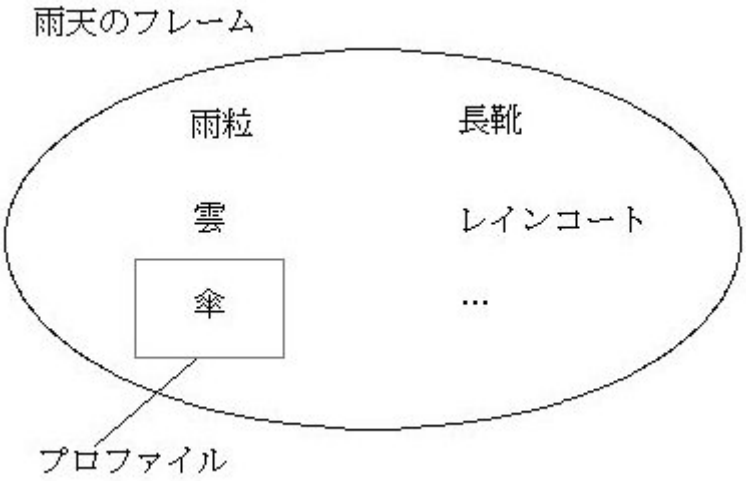
換喩を記号(sign)の一種としてみなせば、換喩は指標(index)と見なすことができる。記号の中でも、図表(icon)は「意味するもの」と「意味されるもの」との関係が最も類縁的であり、「意味するもの」と「意味されるもの」との間に類縁性がみとめられないものはシンボル(symbol)と見なされる。そして、換喩の性質を表す指標（index）は、図表(icon)とシンボル(symbol)の中間に位置づけられる。絵や写真のような図表は最も具象的な記号の一種である。そして、「花」や「flower」という語はシンボルの一種である。指標は、図表ほど具象的ではないが、シンボルほど抽象的ではない。人間は、例えば、「雨雲」を指標として「雨」或いは「雨が降る」ということを推定できる。また、「煙」を見て「火事」を推定することができる。換喩は、このような指標的な記号の機能を有す

[30] Lakoff, G. (1993)　『認知意味論』池上嘉彦・河上誓作他訳　紀伊国屋書店 p.91
[31] 籾山洋介(2001)　前掲書　p.34

るのである[32]。

関連して、大堀(2002)によると、メトニミーとは、単一の概念領域の中で、プロファイルが移行することによって成り立つ捉え方であるという。例えば、「傘」が「雨天」を表す場合は、メトニミーは「天候」という一つの概念領域内での要素間の関係によって成り立っている[33]。そして、これは二つの概念領域間の写像関係であるメタファーとの重要な相違である。「傘」が「雨天」を表すメトニミーは図示すると図 2-3 のようになる。図 2-3 は「雨天」というフレーム[34]の中から、「傘」をプロファイル[35]することにより、「傘」という部分で全体の「雨天」を表すことができることを示す。このような操作を支えるのは、フレーム的知識における「部分―全体」の関係である。「傘」が「雨天」を表す場合には、雨の降る状況で使う用具が傘であるという知識が参照点として機能している。これは概念的な近接関係といえる[36]。

図 2-3　メトニミー<傘＞雨天>　(大堀 2002：77)



[32] 山梨正明(1998)　前掲書　p.92-p.94

[33] 「天候」という概念領域には「傘」や「雨天」以外に「晴天」、「台風」、「雪」、「雲」など、様々な要素が含まれる。

[34] 我々の知識は典型化された日常的な場面をもとに成り立っていることが示されている。このような、出来事を理解する枠となる知識構造をフレーム(frame)と呼ぶ(大堀 2002：36)。　「雨天」という概念要素を理解するためには、「雨の日には傘をさすかレインコートを着る必要がある」、「雨に濡れると風邪を引く」、「雨雲が出ると雨が降る」などの背景知識が必要である。このような背景知識によって構成された知識構造が「雨天」のフレームである。

[35] プロファイルとは対象を認知する際に背景となる知識の中で焦点の当たる部分である(大堀 2002：15)。

[36] 大堀壽夫(2002)　前掲書　p.76-p.77

加えて、謝豊地(2007)によると、メトニミーが形成される基になる意味関係には、「容器―中身」、「全体―部分」、「主―従」、「主体―手段」、「一般的隣接」、「原因―結果」、「特性―対象」などがあるという。そして、「全体―部分」の意味関係に基づいて形成されているカテゴリーには、下位カテゴリーとして、例えば「個物／構成部分」、「活動／活動部分」、「物質／単位」、「組織／構成員」、「地域／地区」などの意味関係を分類することができ、「主―従」の意味関係には「主体／付属物」、「主体／付着物」などの下位カテゴリーが属しているという[37]。このようなメトニミーを支えている意味関係をまとめたものが図 2-4 である。

図 2-4　メトニミーを支える意味関係図　(謝豊地 2007：41)

以上の諸研究を考察の結果、本論文におけるメトニミーとは「二つの事物の外界における隣接性、あるいは二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩表現で、それは単一の概念領域の中で、プロファイルが移行することによって成り立つ捉え方である」と定義する。この定義は籾山(2001)と大堀(2002)による定義を合わせたものである。

[37] 謝豊地正枝(2007) 『多義語に対する認知論的意味分析論考』　凱侖出版社 p.41

第三章　上昇方向を表す日本語の複合動詞後項及び中国語の方向補語の意味分析

3.1 日本語の上昇方向を表す複合動詞後項の意味分析

本節では日本語の上昇を表す複合動詞後項の中から、「～あがる」、「～あげる」、「～のぼる」を取り上げる。まず先行研究を紹介し、その問題点を指摘する。そして、認知言語学的アプローチから意味分析を行い、その意味的拡張・派生のプロセス及び意味構造を明らかにする。

3.1.1 先行研究

姫野(1999[38])は複合動詞の後項動詞の中で、様々な自他対応関係や反義、類義関係にあるものを取り上げて分析している。そして、上昇方向を表す後項動詞として第三章の中で「～あがる」、「～あげる」を取り上げて分析している。その研究の手法としては、最初に意味用法を分類した一覧表を掲げ、それに基づいて各用法ごとに説明を加える。そして、類義形式や反義形式がある場合はそれについても同様に分析し、最後に自他動詞形や類義、反義形式との意味用法の対応についてまとめている。

「～あがる」の意味について姫野が分析した結果をまとめると表 3-1 ようになり、また、「～あげる」の意味についての分析結果をまとめたものを表 3-2 に示す。

[38] 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』　ひつじ書房

表 3-1　姫野による後項動詞「～あがる」の意味分析結果

- (1)上昇
  - 全体的上昇
    - 空間的上昇
      - 例：飛びあがる、舞いあがる。
    - 序列の上昇
      - 例：繰りあがる。
    - 地位の上昇
      - 例：のしあがる、勝ちあがる。
  - 部分的上昇
    - 形の伸長
      - 例：起きあがる、盛りあがる。
    - 形の縮小
      - 例：巻きあがる、縮みあがる。
    - 量の減少による形の縮小
      - 例：抜けあがる。
- (2)完了・完成
  - 作業活動の完了
    - 例：縫いあがる、焼きあがる。
  - 自然現象の完了
    - 例：晴れあがる、干あがる。
- (3)強調　　例：震えあがる、おびえあがる。
- (4)増長　　例：思いあがる、つけあがる。
- (5)尊敬語　　例：召しあがる。

表 3-2　姫野による後項動詞「～あげる」の意味分析結果

(1)上昇
- 全体的上昇
  - 空間的上昇
    - 対象の上昇
      例：打ちあげる、投げあげる。
    - 主体と対象の同時的上昇
      例：運びあげる、担ぎあげる。
    - 主体の動作のみ上方指向
      例：なげあげる、擦りあげる。
  - 序列の上昇　例：繰りあげる、切りあげる。
- 部分的上昇
  - 形の伸長　例：重ねあげる、積みあげる。
  - 形の縮小　例：巻きあげる、まくりあげる。
  - 量の減少による形の縮小　例：刈りあげる。

(2)上位者または下位者に対する社会的行為
- 下位者から上位者
  例：申しあげる。
- 上位者から下位者
  例：取りあげる。

(3)体内の上昇　例：むせびあげる、しゃくりあげる。

(4)完了・完成
- 完成品を伴う作業活動の完了
  例：縫いあげる、焼きあげる。
- 作業活動の完了
  例：調べあげる、勤めあげる。

(5)強調　例：おどしあげる、締めあげる。

(6)その他　例：読みあげる、張りあげる、歌いあげる、描きあげる、引きあげる、切りあげる、入れあげる。

以上の姫野(1999)における分析にはいくつかの問題点がある。第一に、後項動詞の基本義とその基本義から派生した多義的別義との関連性について充分に論じられていない。第二に、姫野が説明している後項動詞の表す概念を構成する意味特徴があまり適切ではない点である。例えば、「～あがる」について指摘すると、姫野は「つけあがる」、「思いあがる」の「あがる」の概念が＜増長[39]＞という意味特徴によって構成されていると見なすが、＜増長＞という一つの意味特徴だけでは「つけあがる」、「思いあがる」の「～あがる」の意味を十分に説明することができないと思われる。増長の意味は『広辞苑』によると次の二つの意味がある。

「増長」：
①程度が次第にはなはだしくなること。
②つけ上がって高慢になること。

姫野(1999)における「つけあがる」、「思い上がる」の「～あがる」を表す＜増長＞という意味特徴は、上述の②の意味に当たる。そして、「つけあがる」の意味を『広辞苑』で確認すると、次のようである。

「つけあがる」：相手の寛大なのに乗じて増長する。

このように、＜増長＞という意味特徴では「つけあがる」、「思いあがる」における「～あがる」を十分に説明することが出来ないのである。

また、下の(5)の文例のように、「思い上がっている」かどうかを判断する際にはある心理的な基準が設けられ、その基準によって、「思い上がっている」かどうかを判断する。

(5) 戦争で常に犠牲になるのは女性や子ども、老人ら罪のない一般市民。査察を強化して平和的に解決するべきで、自らも大量の兵器を持つ米国は、身勝手で思い上がっている。 (朝日新聞記事データベース 2003[40]、

[39] 本論文における＜　＞はその語の意味を構成する意味特徴を表す。
[40] 『CD-HIASK 2003 朝日新聞記事データベース』(2004)　紀伊国屋書店

例文中の下線は引用者によるものである[41])

以上に基づくと、「つけあがる」、「思いあがる」における「～あがる」は＜増長＞という意味特徴だけで説明するのは十分でないと思われる。

「～あげる」の意味分析についても、「おどしあげる」、「締めあげる」に＜強調＞という意味特徴を与えているが、あまり適切だとはいえない。加えて、「～あげる」の意味分類の中に、(6)その他という分類項目があるが、この(6)のその他に属する「読みあげる」、「引きあげる」、「切りあげる」などについてはそれぞれの意味を単独に説明するに止まり、その意味特徴を明らかにしていない。従って、「～あげる」の意味構造を解明したとするには疑問が残る。

そこで、本論文ではこれらの問題点を指摘した上で、複合動詞後項「～あがる」、「～あげる」による意味拡張のプロセス及び基本義と多義的別義との関連性を考慮に入れつつ、主に認知意味論に基づいて、適切な意味特徴を特定することを試みたい。

3.1.2「～あがる」の意味分析

3.1.2.1「～あがる」の基本義

「～あがる」の基本義を説明するために、「飛び上がる」を例として選択して、「飛び上がる」を文中に用いた文例を(6)として下記に示す。

(6) バッタが驚ろいた上に、枕の勢で飛び上がるものだから、おれの肩だの、頭だの鼻の先だのへくっ付いたり、ぶつかったりする。

(夏目漱石『坊っちゃん』)

における「～あがる」は＜位置の変化に焦点を当て＞＜現実空間において＞＜上方へ移動する＞という意味特徴によって形成される概念を表す。この「空間的上昇」という概念が「～あがる」の基本義(多義的別義—〔1〕)であると定義できよう。

最後に、「～あがる」の基本義を後項に用いた主な複合動詞のリストを呈示する。

[41] 本論文の例文における下線は全て筆者によるものである。

表 3-3　「～あがる」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

基本義の具体例				
浮かびあがる	浮きあがる	打ちあがる	押しあがる	躍りあがる
駆けあがる	漕ぎあがる	ずりあがる	迫りあがる	突きあがる
つりあがる	つるしあがる	飛びあがる	跳びあがる	登りあがる
はいあがる	跳ねあがる	ふきあがる	舞いあがる	巻きあがる
持ちあがる	沸きあがる			

3.1.2.2「～あがる」の多義的別義—〔2〕

(7) 議長国はアルファベット順の回り持ちだが、イラクの前に就任する予定だったイランが辞退、順番が<u>繰り上がった</u>。

(朝日新聞記事データベース 2003)

における「～あがる」は＜計算上の序列における＞＜上位へ移動する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜上方へ移動する＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。具体的な空間的上昇から計算上の序列の上昇へと抽象化したものである。この「～あがる」の多義的別義〔2〕のように、意味拡張は具体的な意味から抽象的な意味へと変化するのが普通である。なぜなら、我々人間は抽象的で捉えがたい概念を具体的で把握しやすい概念を用いることで理解するからである。

なお、「～あがる」の別義〔2〕を後項動詞に用いた複合動詞は「繰り上がる」以外に、勝負やスポーツ競技などで勝利し、上位へ進むことを表す「勝ちあがる」がある。

表 3-4　「～あがる」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔2〕の具体例	
繰りあがる	勝ちあがる

3.1.2.3「～あがる」の多義的別義—〔3〕

(8) 俺たちは博士の開発した新しい方式を手に入れてこの情報戦争の中を<u>のしあがる</u>。

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』)

における「～あがる」は＜本来の地位より＞＜上の地位へ移動する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは多義的別義〔2〕の＜上位へ移動する＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

「～あがる」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞は、表 3-5 に表示するものが含まれる。

表 3-5　「～あがる」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔3〕の具体例		
なりあがる	のしあがる	はいあがる

3.1.2.4「～あがる」の多義的別義—〔4〕

(9) 余人がきけば、神威のおそろしさも知らぬ、と<u>慄えあがる</u>ような会話だが、二人は城作りの設計に夢中になってそれどころではないらしい。

(司馬遼太郎『国盗り物語』)

における「～あがる」は＜心理的、生理的な反応の程度が＞＜通常の状態よりも強い状態へ移行する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜上方へ移動する＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。具体的な空間的上昇から心理的・生理的な程度の上昇へと抽象化したものである。前項に用いられている動詞が表す概念に比べて、その概念が意味的に増幅されてより強く表現されている強化・強勢の意味合いを深める「～あがる」である。例文(9)の「慄えあがる」とは、通常の心理的な「慄える」状態よりさらに強く「慄える」状態を表す。

「～あがる」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞は次の表のような

ものがある。

表 3-6　「～あがる」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔4〕の具体例
おびえあがる　すくみあがる　のぼせあがる　震えあがる　むくれあがる

3.1.2.5「～あがる」の多義的別義—〔5〕

(10) 指が赤くほてって、コロコロにふくれあがると、針でも突きさしてやりたい程切なくて仕様がなかった。　(林芙美子『放浪記』)

における「～あがる」は＜四方へ放射線状に膨張した＞＜物理的な形態の変化＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜上方へ移動する＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

姫野(1999)はこのような「形の変化」を「形の(一方向への)伸長」、「形の縮小」、「量の減少による形の縮小」と三つに細分類した。しかし、本稿は、上記の文例(10)に見出されるような、「形の放射線状に膨張する変化」も「～あがる」によって表現されることを指摘したい。形の伸長(例：盛りあがる)と形の縮小(例：巻きあがる)は人間の認知能力であるスキャニングという認知のメカニズムを通して認知できるものである。

スキャニングとは、我々人間が外部世界に視線を投げかけ、目(視線)を移動していく行為であり、認知の一プロセスとして理解される[42]。視線が物体の形の変化を追っていくことでまるで物体が移動しているように感じられるのはこのスキャニングによる効果によって生じるのである。

次に、「～あがる」の基本的な概念を図に示す。「植物の芽が出てくる直前に、土が盛りあがる」における文中の「土が盛り上がる」を図に表すと、図 3-1 のようになる。そして、このような「形の一方向への伸長」によって認知される上昇の動きは図 3-2 のように示すことができる。

[42] 山梨正明(2000)『認知言語学原理』　くろしお出版　p.57

図 3-1 「土が盛り上がる」

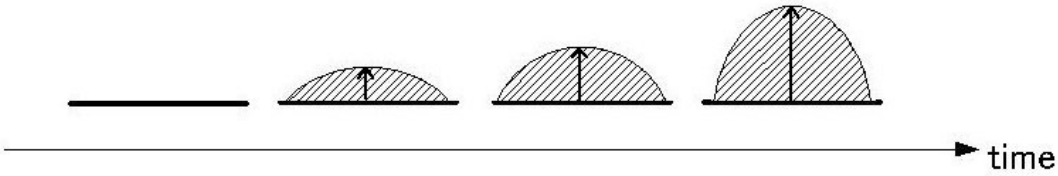
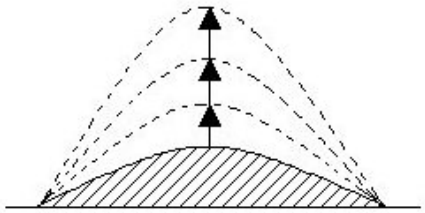


図 3-2 「形の伸長」によって認知される上昇の動き

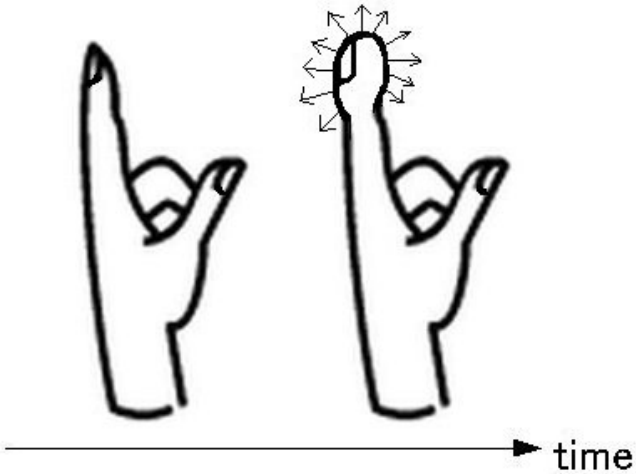


「形の伸長」には上述のような上方への一方向的に伸長する動きがあるものと、下の例文の「ふくれあがる」のように四方へ放射線状に膨張する場合も含まれる。

(11) 指がしもやけで膨れ上がった。

上の例文における「指が膨れ上がった」は、図 3-3 のように示す事ができる。このように、指あるいは棒状のものが普通の状態から横に伸長する場合や四方へ放射線状に膨張する場合でも「膨れ上がる」と表現できる。これらはすべて、「～あがる」の多義的別義〔5〕の表す「形の伸長」の概念である。

図 3-3 「指が膨れ上がった」



また、「巻きあがる」を用いた文例として下記を見られたい。

(12) 壁に貼ってあるポスターがいつの間にか巻きあがっていた。

(13) フィルムが巻き上がっている。

における文中の「巻き上がる」のような「形の縮小」によって認知される上昇の動きは、(12)のように実際に主体(ここでは紙)の基底部が上方に移動するもの(図 3-4 参照)と、(13)のような主体の周辺部が中心に向かって移動するもの(図 3-5 参照)がある。

図 3-4　基底部の上方移動に伴う「形の縮小」(姫野 2003：40)

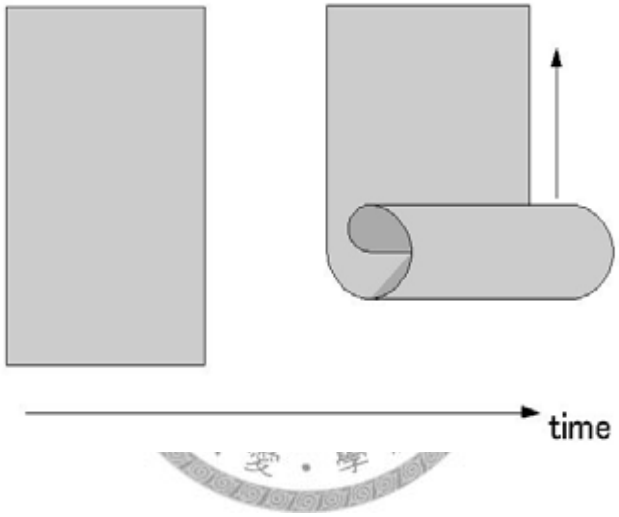
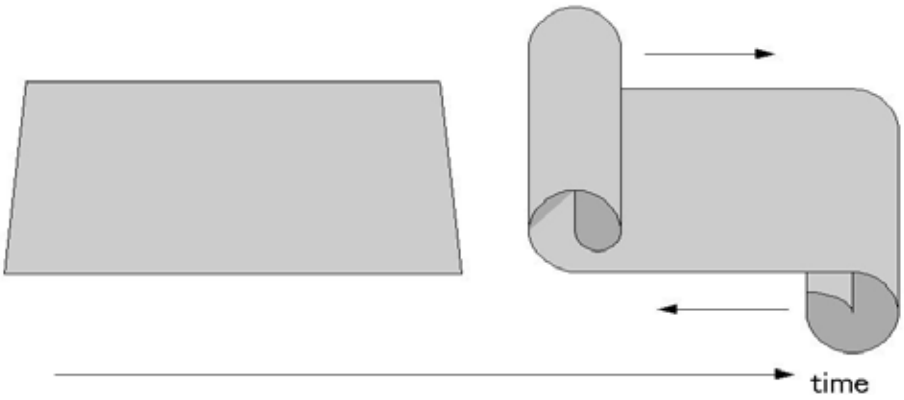


図 3-5　周辺部が中心に向かって移動するのに伴う「形の縮小」



「形状の変化」という概念を表す「～あがる」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞には次の表のようなものがある。

表 3-7　「～あがる」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔5〕の具体例				
起きあがる	折れあがる	切れあがる	締めあがる	立ちあがる
たてあがる	縮みあがる	縮れあがる	積みあがる	抜けあがる
ねじれあがる	伸びあがる	はげあがる	腫れあがる	ふくれあがる
巻きあがる	まくれあがる	めくれあがる	燃えあがる	持ちあがる
盛りあがる				

3.1.2.6「～あがる」の多義的別義—〔6〕

(14) かつては美しい水をたたえ荷船やランチが往き来した大運河も今はその水門を閉ざし、ところどころでは水が干あがって底が露出していた。

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』)

における「～あがる」は＜自然現象に関する出来事が完了して＞＜完了後の状態が持続する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜上方へ移動する＞を一つの動きとして捉えた場合、「水分が大気へと蒸発する」という動きが終了した結果、「干あがった」状態になったことに焦点を当てたもので、「水分が蒸発する」という動きの完了のほかに「干あがった」という結果の残留も含意される。まず、「干上がる」という複合動詞を結合させている「結合パターン」とは、両動詞がメトニミー的関係にあること、そのために、意味的には、「メトニミー関係に基づいた結合パターン」であることを指摘する。上記の(14)文例中の「大運河」を容器と見なせば、その大運河の中を占めているはずの「水」は中身であると見なすことができる。そのため、「容器（大運河）＝全体／中身（水）＝一部」であるという図式が成立する。そして、全体を表していて、同時に、意味的に「容器」である「大運河」とは、その「大運河」の一部であって「容器＝大運河」の中を占めている「容器の中身」を成す「水」が満々と満たされている状態であることこそが、「大運河」としての機能が認められる「普通の状態」である。

ところが、水を満々と湛えていてこそ、「大運河」と称されるべきであるにも関らず、中身の「水」が蒸発して大気圏に上昇してしまって、結果として、

大運河の底が露呈している状態を「干上がった」状態であるということができよう。ここで、その「水」による「上方への実際的な位置移動」に関わるプロセスについて考えれば、「もともとの位置であった大運河から、日照りという自然の力によって、もともとの水という形状を気体である蒸気に変化させられて、大気圏へと上昇して大気圏中に蒸発してしまった」という位置移動のプロセスが関わっている。そして、「水自身が形状上の変化を余儀なくされて水蒸気という気体へ変化したこと、その気体である水蒸気が大運河という容器の中から上方へ上昇したこと、更に、もともとの大運河から大気圏へと実際に位置を移動させたこと」、その「水による上方への位置移動」の結果として、「大運河」の底が露出して白日の下に曝されて、「水が一滴も残っていないという、『大運河』としては普通ではない状態」を呈しているのである。「大運河」は、既に「大運河」と呼べない状態であること、すなわち、「干上がった状態」なのである。

また、そうであるならば、「干上がる」という複合動詞の表す現象・状態とは、「大運河」という「容器全体」の「一部」を成していたはずの「水」が、「水蒸気という気体に変化させられて大気圏中へ上昇して蒸発してしまった状態」、すなわち、もともとの位置であった大運河の中から位置を上方へ上昇して大気圏へと移動させた結果なのである。この点において、（1）基本義の表す概念が、＜具象物である対象を＞＜なんらかの方法を用いて＞＜上方へと位置移動させる動作・行為＞という意味特徴の組み合わせによって形成されていること、その一方、（2）「干上がる」が表す概念は、＜具象物である水を＞＜自然の日照りという方法によって＞＜蒸気という気体に変化させて上方の大気圏へと上昇することによって実際に位置移動させた結果の状態＞という意味特徴の組み合わせによって形成されていること、そして、両者の概念を形成するそれぞれの意味特徴の組み合わせである（1）と（2）を比較すれば、「干上がる」の概念を形成する意味特徴は基本語を形成する意味特徴の内のほとんどのものと共通していることが見出される。これによって、「干上がる」は「飛び上がる」の概念を表す基本義からの多義的別義であることが認められよう。また、両者の概念を支えるそれぞれの意味特徴の内、差異が見出されるのは、

「水が変化した水蒸気による上方へ位置を移動させる方法」と「水がもともとの原型をとどめないで、蒸気という気体に変化して始めて位置移動できた」という二点である。そして、基本義から多義的別義一〔6〕が意味拡張したプロセスには、「対象物が気体という水蒸気に変化して、上方へと実際に位置移動できた」という「時間上の隣接性」及び「原因／結果」に基づいた部分が認められる故に、意味的にはメトニミー的な意味関係に基づいて派生したと判断できる、と本稿は指摘したい。

関連して、「干上がる」の外には、「晴れあがる」、「澄みあがる」などがあり、出来事の完了のほかに、その結果の状態(晴れている、澄んでいる)が持続して、その状態が長時間維持される点が指摘できよう。この点において、姫野(1999)が単に「自然現象の完了」として分類しているのは、不充分であると本稿は指摘したい。

表 3-8　「～あがる」の別義〔6〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔6〕の具体例			
涸れあがる	澄みあがる	晴れあがる	干あがる

3.1.2.7「～あがる」の多義的別義—〔7〕

(15) こうして全く安心のできる簡易瓦斯避難室ができあがった。

(海野十三『空襲警報』)

における「～あがる」は＜よりよいものへと変化させるための＞＜作業活動が完了する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは多義的別義〔6〕の「完了」の意味が GOOD IS UP(よいものは上)という人間の一般的な認知能力による概念メタファーの中の方向づけのメタファーにより意味拡張したものである[43]。

[43] Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. Metaphors We Live By. Univ. of Chicago Press.（渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳、（1986）『レトリックと人生』、大修館書店）p.24-p.25

表 3-9　「～あがる」の別義〔7〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔7〕の具体例				
編みあがる	炒りあがる	打ちあがる	織りあがる	折りあがる
組みあがる	こねあがる	仕あがる	仕立てあがる	すりあがる
染めあがる	炊きあがる	できあがる	煮あがる	煮えあがる
縫いあがる	塗りあがる	練りあがる	干しあがる	彫りあがる
磨きあがる	蒸しあがる	結びあがる	蒸れあがる	焼きあがる
結いあがる	結わえあがる	ゆであがる		

3.1.2.8「～あがる」の多義的別義―〔8〕

(16) 縛りつければ少年達は反抗してくるし、緩めれば少年達は<u>つけあがってくる</u>のであった。　(立原正秋『冬の旅』)

における「～あがる」は＜心理的な評価の程度が＞＜通常の状態よりも高い程度に移行する＞という意味特徴によって構成される概念を表している。これは多義的別義〔4〕の＜心理的、生理的な反応の程度が＞＜通常の状態よりも強い状態へ移行する＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

姫野は「思いあがる」と「つけあがる」を「増長」と分類しているが、3.1.1で説明したように、「増長」の意味を辞書で引くと、結局「思い上がる」となるため、うまく説明できないのである。この場合の「～あがる」は＜心理的な評価の程度が＞＜通常の状態よりも高い程度に移行する＞という意味特徴を含んでいると考えられる。

「思いあがる」、「つけあがる」は多くの場合、他人によって「思い上がっている」、あるいは「つけあがっている」と判断された場合に用いられる表現である。そう判断する際には個人的な、あるいは社会的な価値判断基準によって、「思い上がっている(つけあがっている)」かどうかを判断する。つまり、他人によって判断される場合はその人の行動や発言が＜その人の本来の評価・立場＞より上かどうかではなく、＜ある個人の個人的な基準、あるいは社会的な価値判断基準によって設けられたその人の本来あるべき評価・立場＞より上か

どうかによって「思い上がっている」または「つけ上がっている」と判断されるのである。

「思い上がる」、「つけあがる」は他人あるいは社会的基準によって判断されることが多いが、次の例のように自分で判断する場合もある。

(17) 自分は罪深い人間だ。すぐに人よりも自分が偉いものであるかのように思い上がりたくなる。 (三浦綾子『塩狩峠』)

「思いあがる」は自分の思いにより自分に対する評価を上昇させている状態であり、「自負している」と解釈することができる。「つけあがる」は相手の寛大さに付け入って自分に対する評価や立場による振る舞いを強化させる概念であると解釈できる。

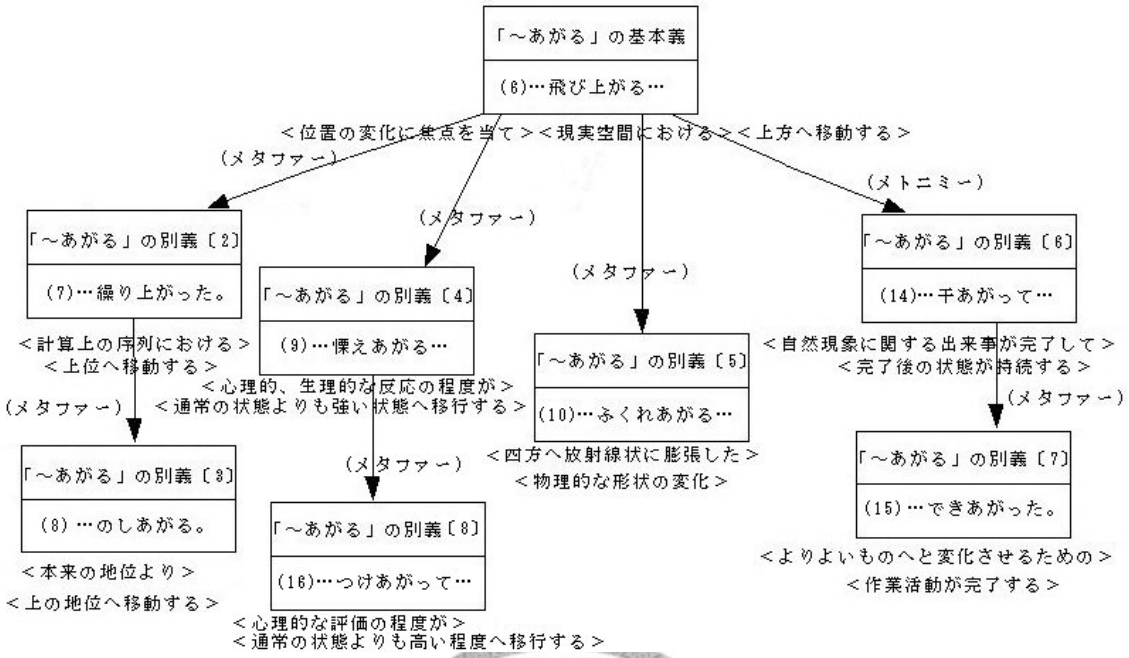
表 3-10 「～あがる」の別義〔8〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔8〕の具体例	
思いあがる	つけあがる

3.1.2.9「～あがる」の多義構造

以上、「～あがる」の多義性について分析を進めてきたが、その結果「～あがる」には①位置変化に焦点を当てた空間的上昇、②序列の上昇、③地位の上昇、④程度の上昇・高まり、⑤形状の変化、⑥自然現象の完了・完了後の状態の持続、⑦動作・作業の完成、⑧社会的・個人的な評価の上昇による態度・言動の変化、という八つの意味があることがわかった。最後に、分析によって明らかになった上昇を表す複合動詞の後項動詞「～あがる」の複数の意味を統括する多義構造を図 3-6 として示す。

図 3-6　「～あがる」の多義構造



3.1.3「～あげる」の意味分析

3.1.3.1「～あげる」の基本義

(18) フン先生は、そーっとてのひらをのぞきこみ、蠅をつまみあげると、蠅の羽を、プツ！プツ！　とむしりとった。

(井上ひさし『ブンとフン』)

における「～あげる」は＜位置の変化に焦点を当てて＞＜何かを用いて動作の対象を＞＜現実空間において＞＜上方へ移動させる＞という意味特徴によって構成される概念を表していて、基本義であると見なすことができよう。上記(18)文中の「つまみあげる」は、動作主が身体の一部である「手」を用いて、対象である「蠅をつまんで」いながら同時に、つまんでいる蠅を「上方へ上げて位置を移動させる行為」を指す。一方、「追い上げる」の場合は、「追い上げる動作主」の動作によって「追い上げられる対象」が「上方へと位置を移動させられる」場合には、動作主も対象も共に同時に上方へ位置を移動させるという、意味上の違いが見受けられる。また、「追い上げる」の表す意味は、『大辞泉』によると、次の二つがある。

「追い上げる」：

①追って上の方へ行かせる。

②激しく追いかけて、相手との距離や差をしだいに縮める。

このうち、①が基本義で、②は基本義から派生した多義的別義だと考えられる。①の「追い上げる」の基本義を表す例文としては次のようなものがある。

(19) 犬が獲物を山の上に追い上げる。

上の例文における「追い上げる」は「獲物を山の上方へと追いかける」という意味を持ち、「追い上げる」の基本義となる。そして、この基本義から意味領域が拡大し、「どの方向へでも、とにかく、逃げようとする獲物を追いかける」という意味になり、この意味がさらに拡張し、「（獲物のみではなく）競争相手とみなされる相手を短時間に至近距離にまで、追いつきそうになるまで追いかける行為」を表すというように、意味的に拡張したと思われる。つまり、「追い上げる」の意味拡張には次の三つの段階があると考えられる。

ⅰ. 獲物を山の上方へと追いかける行為。
ⅱ. どの方向へでも、とにかく、逃げようとする獲物を追いかける行為。
ⅲ.（獲物のみではなく）競争相手とみなされる相手を短時間に至近距離にまで、追いつきそうになるまで追いかける行為。

直接ⅰ.「獲物を山の上方へと追いかける」という基本義から、ⅲ.「（獲物のみではなく）競争相手とみなされる相手を短時間に至近距離にまで、追いつきそうになるまで追いかける行為」という多義的別義が派生したのではなく、まず基本義ⅰ.が持つ＜上方に＞という単一方向性が拡張して、ⅱ.の＜どの方向へでも＞へと意味が拡張したと思われる。意味拡張の中間段階にあたるⅱ.は方向性において意味領域が広がっている意味的な状態にある概念で、ⅰ.からⅲ.へと意味的に拡張する際の、ⅱ.の概念はⅰ.の概念が意味的に拡張し始めた初期の段階であり、ⅰ.の概念とⅲ.の概念の境界線上にあると考えられる。

この「追い上げる」の多義的別義は出来事の隣接性によるメトニミー的関係に基づいて派生したものであると思われる。「追い上げる」の多義的別義であるⅲ.「競争相手とみなされる相手を短時間に至近距離にまで、追いつきそうになるまで追いかける行為」という意味を表す「追い上げる」を文中に用いた例

を下記に示す。

(20)小さな油谷が地元の応援歌に押されるようにじりじり追い上げた。

(朝日新聞記事データベース 2004[44])

注意すべきことは、上記のような場合の「追いあげる」は前項動詞「追う」と後項動詞「あげる」が結合し、「追い上げる」という複合動詞全体が意味拡張したものであり、後項動詞の「～あげる」が先に意味拡張してから前項動詞の「追い～」と結合したものではない。

そして、例(20)のようなメトニミー的関係に基づいて意味拡張した「競争相手とみなされる相手を短時間に至近距離にまで、追いつきそうになるまで追いかける行為」を表す「追いあげる」の意味はさらに下の例(21)のように、物理的な接近から抽象的な距離の接近へと意味拡張する。

(21) 高い知名度を誇る田名部を、昨年の衆院選で小選挙区を独占した自民の奈良が追い上げる。 (朝日新聞記事データベース 2004)

例(21)は例(20)との間にあるメタファー的関係により派生した意味である。

姫野(1999)は「すすりあげる」、「咳きあげる」、「むせびあげる」、「しゃくりあげる」、「せぐりあげる」における「～あげる」を「体内の上昇」として分類したが、＜体内＞という意味特徴は前項動詞である「すする」、「咳く」などに含まれるものであり、後項動詞の「～あげる」に＜体内＞という意味特徴は含まれていないと思われる。さらに、「鼻水をすすりあげる」という場合において、「すすりあげる」対象となるのは鼻水であるが、鼻水は必ずしも体内にあるとは限らない。したがって、本論文では、「すすりあげる」、「咳きあげる」、「むせびあげる」、「しゃくりあげる」、「せぐりあげる」における「～あげる」を基本義と見なすことにする。

以上の考察の結果、基本義を示す「～あげる」を後項に用いた主な複合動詞のリストを下記の表 3-11 に示す。

---

44 『CD-HIASK 2004 朝日新聞記事データベース』(2005) 紀伊国屋書店

表 3-11　「～あげる」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

基本義の具体例			
いだきあげる	打ちあげる	追いあげる	押しあげる
抱えあげる	掻きあげる	担ぎあげる	汲みあげる
けりあげる	こすりあげる	こみあげる	さしあげる
さすりあげる	さらいあげる	しゃくりあげる	吸いあげる
すくいあげる	すすりあげる	ずりあげる	咳きあげる
せぐりあげる	せりあげる	抱きあげる	たぐりあげる
助けあげる	つかみあげる	突きあげる	つまみあげる
つりあげる	つるしあげる	取りあげる	投げあげる
なであげる	にらみあげる	運びあげる	はさみあげる
跳ねあげる	払いあげる	拾いあげる	引きあげる
引きずりあげる	引っ張りあげる	吹きあげる	塞ぎあげる
ぶちあげる	振りあげる	ほうりあげる	掘りあげる
巻きあげる	まつりあげる	見あげる	むせびあげる
持ちあげる	もみあげる	揺すりあげる	揺りあげる

3.1.3.2「～あげる」の多義的別義—〔2〕

(22) 現在は利子の総額が１円未満の場合は端数（銭単位）を切り上げて１円として計算しているが、変更後は端数を切り捨てて０円にする。

(朝日新聞記事データベース 2004)

における「～あげる」は＜対象を計算上の序列における＞＜上位へ移動させる＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜上方へ移動させる行為＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。具体的な空間的上昇から計算上の序列の上昇へと抽象化したものである。

なお、「切りあげる」には次の例文のような用法もあり、この場合の「切りあげる」の表す意味は「区切りをつけて終わりにする」という意味である。

(23) しかし、午後の三時頃になると、疲れても来るし、ひとが恋しくもな

るし、遊びたくなって、頃合いのところで仕事を切り上げ、家へ帰る。

(太宰治『朝』)

表 3-12　「～あげる」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔2〕の具体例		
切りあげる	繰りあげる	競りあげる

3.1.3.3「～あげる」の多義的別義—〔3〕

(24) 辻々には彼の首が百両で買い上げられるという高札まで建てられた人だ。　(島崎藤村『夜明け前』)

における「～あげる」は＜相対的に社会地位の高い人が相対的に社会地位の低い人から＞＜その所有物をとりたてることによって＞＜対象物を上方に移動させる行為＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜上方へ移動させる＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。空間的上下方向性から対人関係の上下方向性へと抽象化した概念である。

表 3-13　「～あげる」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔3〕の具体例				
買いあげる	借りあげる	取りあげる	巻きあげる	召しあげる

3.1.3.4「～あげる」の多義的別義—〔4〕

(25) この際なにとぞ星社長をはじめ我々の誠意のあるところを御了解下され、奉仕的活動の出来るよう御後援下さらんことを願い上げます。

(星新一『人民は弱し官吏は強し』)

における「～あげる」は＜相対的に社会地位の低い人が相対的に社会地位の高い人に対し＞＜ある行為を行ってくれることを要請する動作＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは多義的別義〔3〕の＜相対的に社会地位の高い人が相対的に社会地位の低い人から＞＜対象物を上方に移動させ

る行為＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

姫野(1999)が述べているように、この多義的別義〔4〕は多くの場合、動作主が自らを低め、相手に対する行為を行うというものである[45]。

表 3-14　「～あげる」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔4〕の具体例			
さしあげる	存じあげる	願いあげる	申しあげる

3.1.3.5「～あげる」の多義的別義—〔5〕

(26) 私は先生の咽喉を<u>締めあげた</u>腕を解き、その場に平伏して非礼を詫びるしかなかった。　(海野十三『大脳手術』)

における「～あげる」は＜行動の程度を＞＜通常の状態よりも強い状態へ移行させる＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜上方へ移動させる＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。具体的な空間的上昇から行動・動作の強さの上昇へと抽象化したものである。

姫野は「絞りあげる」、「張りあげる」、「読みあげる」の三語をどの分類にも属さないものであるとし、その意味は「声をあげる」の用法からきたものと思われると述べている。しかし、これらの語における「～あげる」も声の程度を上昇させるということで、「行動の程度を上昇させる」という意味であるといったほうが妥当だと思われる。

表 3-15　「～あげる」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔5〕の具体例				
おどしあげる	しごきあげる	縛りあげる	絞りあげる	締めあげる
つねりあげる	どなりあげる	張りあげる	ひねりあげる	読みあげる
ほめあげる	おだてあげる			

[45] 姫野昌子(1999)　前掲書　p.48

3.1.3.6「～あげる」の多義的別義—〔6〕

(27) 頭髪にチリチリのパーマをかけ、それをアフロスタイルのように盛り上げている。 (沢木耕太郎『一瞬の夏』)

における「～あげる」は＜対象が上昇していると感じられるような＞＜物理的な形態変化を起こさせる行為＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜上方へ移動させる＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

これは 3.1.2.5 の「～あがる」の多義的別義〔5〕の項において述べたように人間の認知能力の一つであるスキャニングにより、視線が物体の形の変化を追っていくことでまるで物体が移動しているように感じられる。このような人間の生理的基盤がこの「～あげる」の多義的別義〔6〕を可能にしている。

表 3-16 「～あげる」の別義〔6〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔6〕の具体例				
折りあげる	重ねあげる	切れあげる	くくりあげる	剃りあげる
たくしあげる	たくりあげる	積みあげる	ねじあげる	ねじりあげる
巻きあげる	まくしあげる	まくりあげる	めくりあげる	盛りあげる

3.1.3.7「～あげる」の多義的別義—〔7〕

(28) 刑事たちの調べ上げたことは、少年の自供を裏附けるものばかりであった。 (吉村昭『戦艦武蔵』)

における「～あげる」は＜出来事を＞＜ほぼ完全に完了させた状態＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜上方へ移動させる＞を一つの動きとして捉えた場合、その動きが終了した状態に焦点を当てたもので、動きの完了が含意される。この意味は一つの動きの時間上の隣接性により意味拡張したもので、メトニミー的関係により派生した多義的別義である。

表 3-17　「～あげる」の別義〔7〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔7〕の具体例
売りあげる　数えあげる　刈りあげる　調べあげる　勤めあげる　並べあげる

3.1.3.8「～あげる」の多義的別義—〔8〕

(29) 俺が、これほど焦躁のうちに努力して書き上げた作品を、一カ月半もの間、一読もしないで、置きっ放しにしておいた博士を、俺は少し呆気に取られて見た。　(菊池寛『無名作家の日記』)

における「～あげる」は＜よりよいものへと変化させるための＞＜作業活動を完了させる＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは多義的別義〔7〕の「完了させる」の意味が GOOD IS UP(よいものは上)という人間の一般的な認知能力による概念メタファーの中の方向づけのメタファーにより意味拡張したものである。

多義的別義〔7〕と多義的別義〔8〕の違いは、別義〔7〕が単に作業や出来事を完結・完了させた状態という概念を表すのに対し、別義〔8〕はよりよいものへと変化させようという意識のもとで作業を行った結果、作業の完了とともに、何かを完成させる行為という概念を表すのである。

姫野は「歌いあげる」、「描きあげる」について、「人生の感情を、叙情の世界を、愛の心を」「甘美に、詩情深く、切々と、高らかに、朗々と、」「歌いあげる、描きあげる」のように創作や芸術活動に関して用いられる文学的表現で、「あげる」は、「賛える」のニュアンスを持っているとしているが、「歌いあげる」と「描きあげる」の「～あげる」はともに＜よりよいものへと変化させるための＞＜作業活動を完了させる＞という意味特徴を持つこの多義的別義〔8〕である「完成させる」という意味であると思われる。

表 3-18　「～あげる」の別義〔8〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔8〕の具体例				
編みあげる	洗いあげる	炒りあげる	炒めあげる	歌いあげる

打ちあげる	描きあげる	織りあげる	折りあげる	書きあげる
固めあげる	鍛えあげる	刻みあげる	組みあげる	こねあげる
仕あげる	仕立てあげる	すりあげる	育てあげる	染めあげる
剃りあげる	炊きあげる	たたきあげる	でっちあげる	研ぎあげる
撮りあげる	煮あげる	縫いあげる	塗りあげる	練りあげる
張りあげる	干しあげる	拭きあげる	彫りあげる	まとめあげる
磨きあげる	蒸しあげる	結びあげる	焼きあげる	やりあげる
結いあげる	結わえあげる	ゆであげる	読みあげる	

3.1.3.9「～あげる」の多義的別義—〔9〕

(30) つい五分前の友達に対する懐しさが消えて、何か笑いものにされているような気持が鮎太の心に突き上げて来た。(井上靖『あすなろ物語』)

における「～あげる」は＜感情・気持ちなどが＞＜心の奥底より上方へ湧き上がる状態＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜上方へ移動させる＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。空間的上方移動から心理的な上方移動へと抽象化したものである。

表 3-19　「～あげる」の別義〔9〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

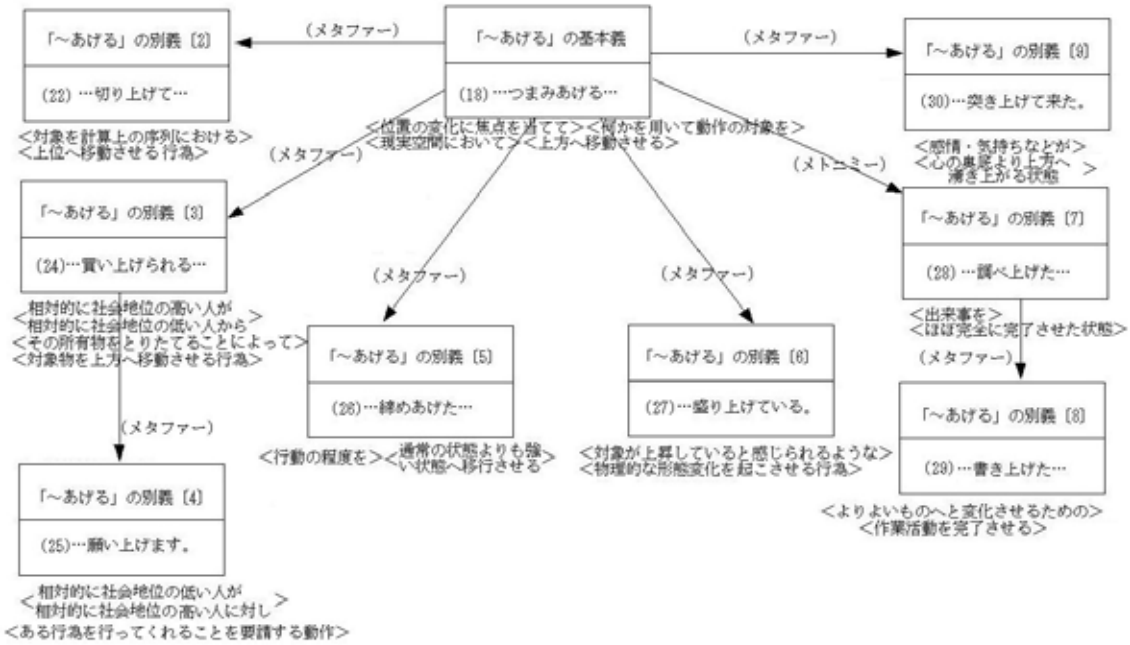
多義的別義〔9〕の具体例	
こみあげる	突きあげる

3.1.3.10「～あげる」の多義構造

以上、「～あげる」の多義性について分析を進めてきたが、その結果「～あげる」には①位置変化に焦点を当てた対象の空間的上昇、②対象の序列の上昇、③上位者が下位者からなにかをとりたてることによって上方へ移行させる行為、④下位者が上位者に対する要請・行為、⑤行動の程度を通常より上昇させる行為、⑥形状変化を起こさせる行為、⑦ほぼ完全に完了させた状態、⑧完成させる行為、⑨感情・気持が上方へ溢れ上がる状態、という九つの意味があることがわかった。最後に、分析によって明らかになった上昇を表す複合動詞の後項

動詞「～あげる」の複数の意味を統括する多義構造を図 3-7 として示す。

図 3-7　「～あげる」の多義構造



3.1.4「～のぼる」の意味分析

3.1.4.1「～のぼる」の基本義

(31) 午後になれば獣たちを焼く灰色の煙が<u>立ちのぼる</u>のが見えるよ。

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』)

における「～のぼる」は＜動きの過程に焦点を当てて＞＜現実空間において＞＜上方へ移動する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。この「過程に焦点を当てた上昇」という意味が「～のぼる」の基本義である。これは物体の上昇を一つの動きとして捉えた場合、その動きの過程に焦点を当てたもので、動きの経路が焦点化される。そして、このように動きの過程に焦点を当てた表現であるため、「～のぼる」が表す上昇は「～あがる」が表す上昇と違い、労力を伴うことが含意される。例えば「山をかけあがる」と「山をかけのぼる」を比べてみるとわかるが、「かけあがる」は位置の移動に焦点を当てているのに対し、「かけのぼる」は上昇の経路に焦点があり、そのため「かけのぼる」のほうが労力を伴うと感じられる。

表 3-20　「～のぼる」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

基本義の具体例				
かけのぼる	さしのぼる	攻めのぼる	立ちのぼる	つたいのぼる
はいのぼる	はせのぼる	跳ねのぼる	舞いのぼる	よじのぼる

3.1.4.2「～のぼる」の多義的別義—〔2〕

(32) わざわざこういう地理的説明をしたのは、秋から早春にかけての鮭の産卵期には、雄物川一面が鮭の肌の山毛欅色になってしまうというほどにさかのぼってくるからだ。　(司馬遼太郎『国盗り物語』)

における「～のぼる」は＜動きの過程に焦点を当てて＞＜川の流れに逆らって上流へ移動する行為・動作＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜動きの過程に焦点を当てて＞＜上方へ移動する＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。また、「～のぼる」の基本義は動きの過程に焦点があるため、労力を伴うことは既に指摘したが、このような労力を伴う感じは上方への移動と川の流れに逆らった移動の類似点でもある。上方へ移動するには重力に逆らう必要があり労力を伴う。川の流れに逆らって上流へ進むのにも、水流の力によって労力が伴うからである。

また、「さかのぼる」は「過去に戻る」という意味がある。

(33) 海軍軍縮の問題が、すべて大正十、十一年のワシントン会議にさかのぼることは、ここで言うまでもあるまい。　(阿川弘之『山本五十六』)

における「さかのぼる」という表現は川の流れと時間の流れとの類似性により意味拡張したメタファーであり、後項動詞の「～あがる」が先に意味拡張してから前項動詞の「さか～」と結合したものではない。したがって、「過去にもどる」という意味は「～のぼる」の多義的別義の中には含まれないが、「さかのぼる」自体の多義性を示すものであることが見受けられる。それは、意味的には、時間を水平移行させて、「後」＝「以前」、「前」＝「未来」という観念的な図式においては、川の流れている地点からは「後方」に当たる「川の上流」という地点を、時間的な観念に置き換えれば、「以前＝過去」であると、メタ

ファー的に捉えることができるからである。この点から考えれば、「さかのぼる」の基本義は上記の意味特徴の組み合わせによって形成されており、「～のぼる」の表す基本語から意味的に拡張した多義的別義〔2〕を成すと同時に、「さかのぼる」自身が基本義を成して、メタファー的表現による「過去にもどる」という別の意味を派生させていることが認められる。

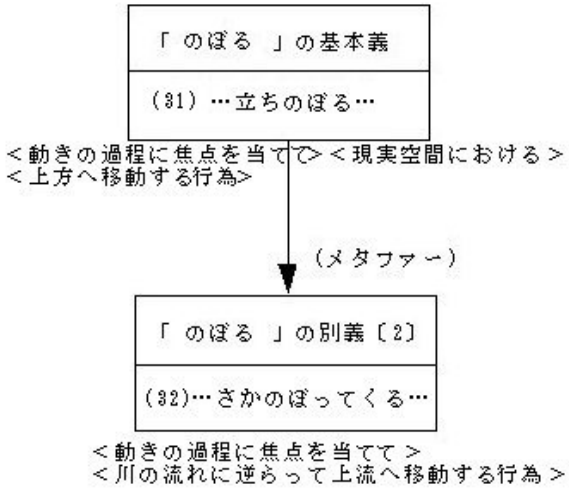
表 3-21　「～のぼる」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔2〕の具体例
漕ぎのぼる　　さかのぼる

3.1.4.3「～のぼる」の多義構造

以上、「～のぼる」の多義性について分析を進めてきたが、その結果「～のぼる」は後項動詞としては造語力が弱く、意味・用法も限られていることがわかった。また、「～のぼる」と「～あがる」はともに上昇を表しているが、その違いは、「～のぼる」は動きの過程に焦点を当てているのに対し、「～あがる」は移動の位置変化に焦点があることがわかった。そして、「～のぼる」の意味拡張はメタファーによるものだということもわかった。最後に、分析によって明らかになった上昇を表す複合動詞の後項動詞「～のぼる」の複数の意味を統括する多義構造を図 3-8 として示す。

図 3-8　「～のぼる」の多義構造



3.2 中国語の上昇方向を表す方向補語の意味分析

本節では、中国語の上昇方向を表す方向補語である「～上」を取り上げる。まず、先行研究を紹介し、その問題点を挙げる。次に、「～上」について意味分析を行い、その意味派生のプロセス及び意味構造を明らかにする。

3.2.1 先行研究

中国語の「～上」の先行研究は、まず『現代漢語八百詞[46]』の分析があげられる。『現代漢語八百詞』では「～上」の意味を次のように分類している。

(1)動詞＋上＋名詞

a.動作に結果が生じたことを表す。合わさるという意味を持ち合わせる。

例：關上、鎖上、愛上、接觸上。

動作に結果が生じ、ある場所に存在、添加する意味を持ち合わせる。

例：戴上、算上、鑲上、寫上、站上、養上。

動作に結果が生じ、ある目的または標準に到達する意味を持ち合わせる。

例：住上、評上、比上、說上。

b.動作が開始し持続する。開始を強調している。

例：討論上、看上、嚷嚷上、聊上、飄上、忙上。

(2)動詞＋上＋数量

一定の数量に到達することを表す。

例：睡上、住上、大上、說上、走上。

(3)動詞＋上＋名詞(場所)

人または事物が動作により低いところから高いところへ移動する。

例：飛上、開上、跑上、插上。

低いところから高いところへ移動するのではなく、ある目的に到達することを表す。

例：送上。

---

[46] 呂叔湘主編(1983)『現代漢語八百詞』商務印書館

『現代漢語八百詞』における「～上」の分析の問題点としては、まず分析が十分ではないことが挙げられる。例えば、「呈上」、「奉上」、「獻上」などは上述の分類のなかには含まれていない。また、それぞれの分類に与えた意味特徴が適切ではないことも挙げられる。例えば、＜動作に結果が生じたことを表す＞＜合わさるという意味を持ち合わせる＞という意味特徴を与えた分類の例として、「關上」、「鎖上」、「愛上」、「接觸上」を挙げたが、＜合わさる＞あるいは＜二つの物体を接触させてくっつける＞という意味特徴を共通に含んでいるとは考えにくい。

次に、『現代中国語文法総覧(下)[47]』は第 5 章の中で補語を取り上げ、その第 2 節において方向補語を分析し、「～上」の意味を以下のように分類している。

基本義：低いところから高いところへ向かうこと。

派生的用法：

a.立脚点に近づくことを表す。例：走上、追上。

b.開いた状態から合わさった状態に向かうことを表す。例：閉上、關上。

c.ある物をある場所に存在させることを著す。例：種上、插上

d.なかなか到達できない目的に到達したことを表す。例：住上、當上。

e.一定の数量に達したことを表す。例：跑上、好上、長上。

f.動作が開始してさらに持続することを表し、「変化した」、「新たな状況が出現した」という含意がある。例：討論上、唱上、交上、愛上。

g.添加を表す。例：算上、加上、賠上。

以上の分析の問題点としては、まず「～上」の例が少ないことが挙げられる。そのため、例として挙げられていない「呈上」、「奉上」、「獻上」、「撞上」、「堵上」、「碰上」などが一体どの分類に属するのか判断しかねる。また、意味特徴が適切ではないことも問題点である。例えば、b.の＜開いた状態から合わさった状態に向かうことを表す＞ものとして「閉上」、「關上」を挙げているが、このような＜開いた状態から合わさった状態に向かうことを表す＞という意味特徴は前項動詞の「閉」と「關」の意味特徴であって、「～上」の意味特徴ではない。

[47] 劉月華他(1991)『現代中国語文法総覧(下)』相原茂監訳　くろしお出版

このような意味特徴では「關門」と「關上門」の違いを説明することができない。

最後に、于康(2006[48])は認知言語学的手法を用いて、「～上」の意味は動詞の「上」の意味から来ていると考え、まず「上」という動詞を意味分析し、その意味拡張のプロセスを説明した上で、「上」と「～上」の意味の間にある相互関係を比較した。そして、「～上」の意味拡張のプロセスを説明した。以下が于康による「～上」の意味の分類である。

(1)物理的上方移動。例：爬上、走上、飛上、跳上、飄上、漫上、插上、提上、扶上。

(2)心理的上方移動。例：走上、跑上、送上、呈上、獻上、寄上、交上、奉上、遞上。

(3)付着と結果。　例：關上、閉上、皺上、合上、追上、考上、嫁上、看上、愛上、吃上、染上、娶上、掙上、派上、登上、記上。

(4)状態変化と持続。例：折騰上、嚷嚷上、罵上、養上、唱上、說上、帶上、飄上、下上、刮上。

(5)ある量への到達。例：看上、說上、跑上、住上。

上述の分析の問題点としては、まず説明が不十分だということが挙げられる。例えば、(2)の心理的上方移動の中に「跑上前」という例を挙げたが、なぜ前に進むことが心理的上方移動なのかについては説明していない。また、分類が大まかすぎるということも言える。例えば、(3)の「付着と結果」という分類の中に「追上」、「閉上」、「愛上」、「考上」、「記上」などが含まれているが、これらの動詞における「～上」は「付着と結果」以外にもそれぞれ別の意味特徴が含まれているため、同じ分類に属するものだとは言いがたい。

以上の先行研究とその問題点を踏まえた上で、次節より中国語の「～上」の意味分析を行うことにする。

[48] 于康(2006)　前掲書

3.2.2 中国語の「～上」の意味分析

3.2.2.1「～上」の基本義

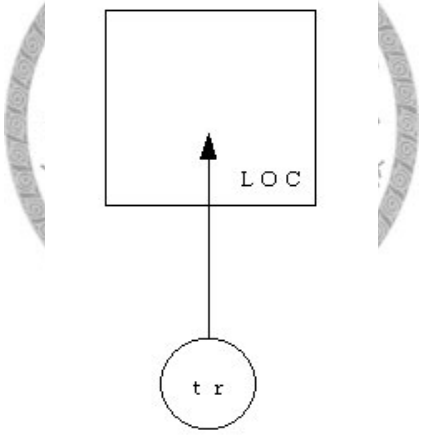
(34) 我爬上學校頂樓的陽台，深深的吸入一口新鮮的空氣。

(「中央研究院現代漢語語料庫」、以下「研究院語料庫」)

(私は学校の屋上にあるベランダにのぼって、新鮮な空気を一口深く吸い込んだ[49]。)

上の例文における「～上」は空間的上昇を表す。これは「～上」の基本義であり、＜現実空間において＞＜上方に移動し＞＜ある位置に到達してとどまる行為・動作＞という意味特徴によって形成される概念を表している。イメージスキーマに表すと図 3-9 のようになる。

図 3-9　「～上」のイメージスキーマ(tr：トラジェクター、LOC：場所)



中国語の「～上」には＜上方に移動する＞という意味特徴だけでなく、＜ある位置に到達してとどまる＞という意味特徴も含まれているのが特徴である。例えば、

(35) 把行李搬上二樓。(荷物を二階に運び上げる。)／*把行李搬二樓[50]。

(36) 飛機飛上天空。(飛行機が空に飛び立つ。)／*飛機飛天空。

のように、「～上」には動作に方向性を付与し、その動作の結果到達する場所と結びつける機能があり、方向性を持たない動作を表す動詞(搬、飛)と場所名詞は

[49] 本稿の中国語の訳は筆者によるものである。

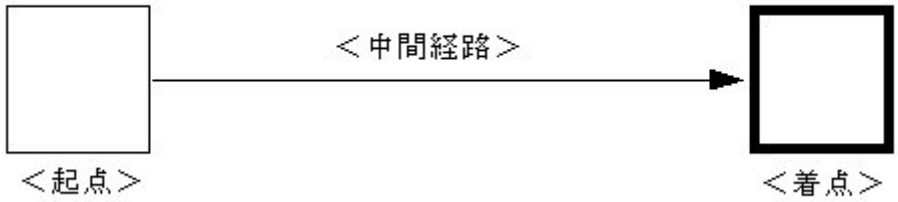
[50] 本稿では「*」はその表現が不成立、「?」は不適切、「??」はさらに容認度が劣ることを表すものとする。

方向補語なしでは直接結びつくことができない。また、例文を見てもわかるように、「～上」には動作(搬、飛)の結果、ある場所(二樓、天空)に到達し、そこにとどまるという意味が含まれていることがわかる。

この基本義である「～上」は上方向における移動表現に使われている。「～上」の後ろに場所詞をつけることで、動作の着点(Goal)か中間経路(Route)を表すことができる。下の図 3-10 は経路表現のイメージスキーマで、着点がプロファイルされていることを表している。また、図 3-10 の起点を表す四角と中間経路を表す矢印は細線、着点を表す四角は太線で示されている。これは細線の部分が背景化された「地」の部分で、太線の部分がプロファイルされた「図」の部分であるということを示している。

(37) 小偷<u>爬上屋頂</u>。(泥棒が屋根に上った。)　：動作の着点を表す

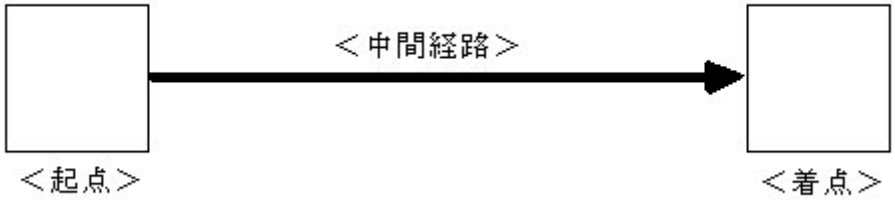
図 3-10　動作の着点がプロファイルされた経路表現のイメージスキーマ



下の図 3-11 は中間経路がプロファイルされた経路表現のイメージスキーマを表している。太線で示された中間経路を表す矢印がプロファイルされている図の部分を表している。

(38) 消防員<u>爬上雲梯</u>。(消防士が梯子を登った。)　：動作の中間経路を表す

図 3-11　中間経路がプロファイルされた経路表現のイメージスキーマ



一方、日本語の上昇移動表現は中間経路を表すときは下の例のように「を」格と動詞の「のぼる／～のぼる」を用いて表現する。

(39) 崖をよじ登る。(動作の中間経路を表す)

また、中間経路のほかに日本語は助詞によって起点も着点も表すことができる。

(40) 荷物を一階から運び上げる。(動作の起点を表す)

(41) 荷物を二階に運び上げる。(動作の着点を表す)

中国語のほうはというと、起点を表す場合は、「從」という介詞を用いて、

①(S)[51]＋從＋L 起点＋V 上(＋L 着点)(S：主語、L：場所を表す語句、V：動詞)

という文型をとる。

②(S)＋V 上＋L

という形式では L は中間経路か着点しか表すことができない。

表 3-22　「～上」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

基本義の具体例											
奔上	攀上	帶上	砌上	騎上	撈上	端上	押上	沖上	揹上	捧上	襲上
晾上	駕上	弄上	躍上	登上	擠上	湧上	殺上	駛上	飄上	飆上	站上
爬上	跳上	跑上	開上	浮上	升上	拉上	搬上	拿上	打上	丟上	拋上
射上	舉上	推上	抬上	飛上	衝上	走上	跨上	提上	扶上		

3.2.2.2「～上」の多義的別義—〔2〕

(42) 他們應該做的是收拾掉旗子，掃淨垃圾，向選民致上深深的歉意，將平靜和清潔重新還給這個都市。　(「研究院語料庫」)

(彼等がやるべきことは旗を片付け、ゴミを掃除し、投票した人々に深くお詫びを申し上げ、静けさと清潔を再びこの町に返すことである。)

における「～上」は＜社会的地位において＞＜上方に位置する者に＞＜ものや気持ちを移行させる行為＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜上方に移動する＞という意味特徴との類似性により意味

[51] 文型の中での(　)はいつも文に表れるとは限らない成分を示す。

拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

「地位の上昇」という概念を表すこの多義的別義〔2〕はさらに三つの意味に細分することができる。まずは社会的地位の低い人から高い人への動作を表す「～上」で、「送上」、「獻上」、「交上」などが含まれる。次に、対象の地位が上昇することを表す「～上」で、「派上」と「換上」が含まれる。最後は動作主の地位の上昇を表す「～上」で、「考上」、「選上」、「當上」が含まれる。三つの細分化した意味の中で、一つ目の社会的地位の低い人から高い人への動作を表す「～上」のような相手を自分より上に見る用法には相手を敬う気持が込められていて、敬語的な表現によく使われている。

表 3-23　「～上」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔2〕の具体例
報上　致上　告上　送上　獻上　呈上　交上　奉上　遞上　派上　換上 考上　選上　當上

3.2.2.3「～上」の多義的別義—〔3〕

(43) 正當張嫌欲打開轎車車門之際警方立即衝上圍捕。　(「研究院語料庫」)
(張容疑者が車のドアを開けようとした瞬間、警察は彼を捉えようと駆け寄った。)

における「～上」は＜前方に移動する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の意味特徴の中の＜上方に移動する＞という意味特徴との類似性により意味拡張したもので、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

この多義的別義〔3〕の意味特徴である＜前方に移動する＞と基本義の意味特徴である＜上方に移動する＞との類似性は人間の身体的基盤によるものである。人間は平面的な絵画や写真などに対して奥行きを感じることができる。その奥行きの知覚に関する絵画的手がかりの一つに「視線の高さ」がある。視野のなかで相対的に高い位置にある対象は低い位置にある対象よりも遠くに見えると

いわれる[52]。平面的な写真などに奥行きを感じる例として下図のようなまっすぐ伸びている道がある。この図を見てみると、近くから遠くに目を移すときは、視線を下から上に移動させることがわかる。このような人間の知覚の特性により、＜前方に移動する＞ことと＜上方に移動する＞こととの間に類似性が見出される。

図 3-12　奥行きの知覚

表 3-24　「～上」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔3〕の具体例							
迎上	搶上	踏上	走上	衝上	撲上	跑上	擁上

3.2.2.4「～上」の多義的別義—〔4〕

(44) 船在海上遇到大風浪，撞上礁石。　(「研究院語料庫」)

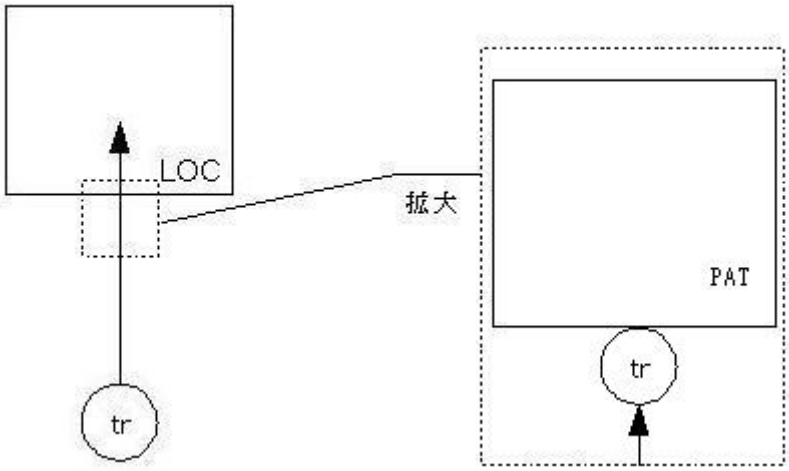
(船は海上で嵐に遭い、岩礁にぶつかった。)

における「～上」は＜動作主が＞＜対象へ一方向性的に移動して＞＜対象に到達してうちあたった状態＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の表す＜現実空間における＞＜上方に移動し＞＜ある位置に到達してとどまる＞という上昇のイベントの中の＜ある位置に到達してとどまる＞という一部を成す意味特徴を共有しているので、基本義から意味拡張した

[52] 『心理学辞典　CD-ROM 版』中島義明他編　(1999)　有斐閣

多義的別義と認められる。この別義〔4〕の概念は図 3-13 のように表すことができる。

図 3-13　「上昇」の一部がプロファイルされ「動作の到達」を表す
(PAT：被動作主)



この多義的別義〔4〕に属する例の特徴として、「～上」のかわりに「～到」と言い換えることができることが挙げられる。例えば、

(45) 機車撞上電線桿。(バイクが電柱にぶつかった。)
　＝機車撞到電線桿。(バイクが電柱にぶつかった。)

(46) 我昨天在車站碰上以前的同學。(私は昨日駅で昔の同級生に会った。)
　＝我昨天在車站碰到以前的同學。(私は昨日駅で昔の同級生に会った。)

のように、多義的別義〔4〕における「～上」は一見、「～到」と意味的差異がほとんど無く、その違いを説明するのは難しい。なぜなら、二つはともに「動作の到達」を意味するからである。しかし、「～上」と「～到」は以下の例のような「～到」でしか使うことができず、「～上」とは言い換えられない表現があることから、両者はまったく同じ意味ではないことがわかる。

(47) 他因為喝醉了，不小心撞到頭。(彼は酔っ払っていたため、頭をぶつけた。)

(48) ??他因為喝醉了，不小心撞上頭。

上の例にあるような違いが生じるのは「～上」の持つ強い方向性に起因すると

思われる。「～上」は強い方向性を有するため、焦点は動作の到達先である対象にしか当てることができず、「～上」の後につくのは動作の対象となる。一方、「～到」は方向性を有さないため、「～上」のように動作主の動作の到達先である対象に焦点を当てることもできるし、上の例のように、動作主の一部に焦点を当てることもできる。

表 3-25　「～上」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔4〕の具体例			
撞上	堵上	碰上	遇上

3.2.2.5「～上」の多義的別義—〔5〕

(49) 打開水龍頭，讓母親聽到水聲，然後根本不洗，就把龍頭關上。

(研究院語料庫)

(蛇口をひねって、母親に水の音を聞かせて、そしてそのまま洗わずに蛇口を閉めた。)

における「～上」は＜ある動作が達成し＞＜その達成後の状態が持続する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。

これは「～上」の基本義である＜ある位置に到達してとどまる＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係に基づいて派生した多義的別義である。具体的な空間に到達してとどまることから抽象的な動作が達成して、達成後の状態が持続することへと転化したものである。

この多義的別義〔5〕は一見、多義的別義〔4〕の「動作の到達」と似ているが、対象との結びつきを作る機能があるかどうかという点で大きく異なる。多義的別義〔4〕の「～上」は前項でも述べたように、動作が対象に到達することを表しているため、動作と対象とを結びつける機能を有している。それとは違い、多義的別義〔5〕の「～上」はその動作自体が達成されるかどうかが重要で、対象との結びつきを作る機能は含まれていない。このため、多義的別義〔5〕の「～上」は対象が後ろにではなく、前についている場合でも使うことができ、その場合は、対象がある状態にあることを表している。例えば、

(50) 門鎖上了。(ドアはロックされた。)

ドアが閉まっている状態にあることを表す

(51) 火點上了。(火は点された。)

火が点されている状態にあることを表す

一方、多義的別義〔4〕に属する「～上」は対象が後ろにではなく、前につくと不自然な表現になる。

(52) ??電線桿撞上了。

(53) ??朋友遇上了。

表 3-26　「～上」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔5〕の具体例
接上　點上　搭上　扣上　闔上　關上　閉上　合上　鎖上　連上　追上　跟上　趕上

3.2.2.6「～上」の多義的別義—〔6〕

(54) 更糟糕的是, 你如果在菸霧瀰漫的地方待上一、兩小時, 即使你不抽菸, 也會有相當於兩、三支煙含量的尼古丁進入體內。

(「研究院語料庫」)

(もっと悪いことに、もしタバコの煙が充満しているところに一、二時間いたら、タバコを吸っていなくても、タバコ二、三本の量のニコチンが体内に吸い込まれることに相当する。)

における「～上」は＜ある量に到達する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜ある位置に到達する＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係に基づいて派生した多義的別義である。具体的な空間的位置から抽象的な量である時間や金銭などの数値へと転化したものである。

この多義的別義〔6〕の特徴としては、「～上」の後ろには必ずある量(時間や金銭、距離など)がつくことが挙げられる。

(55) 他在日本待上好幾年。(彼は日本に何年もいた。)　[時間的な量]

(56) 到歐洲旅行要花上十幾萬。　[金銭的な量]

(ヨーロッパ旅行に行くのには十数万元かかる。)

(57) 她為了減肥每天都跑上三、四公里。　[距離的な量]

(彼女はダイエットのため、毎日 3、4 キロ走っている。)

上の例文にあるように、この多義的別義〔6〕に属する「～上」は単独で使うことができず、後ろにある量をつけなければならない。

表 3-27　「～上」の別義〔6〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔6〕の具体例
花上　排上　過上　煮上　摸上　談上　湊上　算上　費上　辦上　燒上　逛上 喝上　哼上　讀上　泡上　待上　住上　玩上　睡上　走上　跑上　耗上

3.2.2.7「～上」の多義的別義—〔7〕

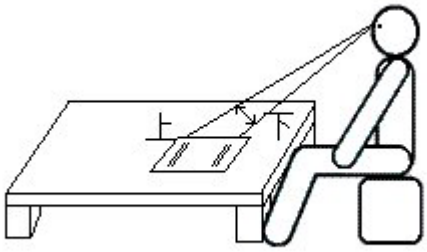
(58) 除夕是新年的高潮，每家都貼上了春聯。　(「研究院語料庫」)

(大晦日は新年の一番盛り上がるときで、どの家にも春聯が張ってある。)

における「～上」は＜なにかの表面に付着する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜上方にとどまる＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係に基づいて派生した多義的別義である。＜上方に＞と＜表面に＞という二つの意味特徴の間にある類似性については、まず「上」という概念がなにを表すのかということを考える必要がある。

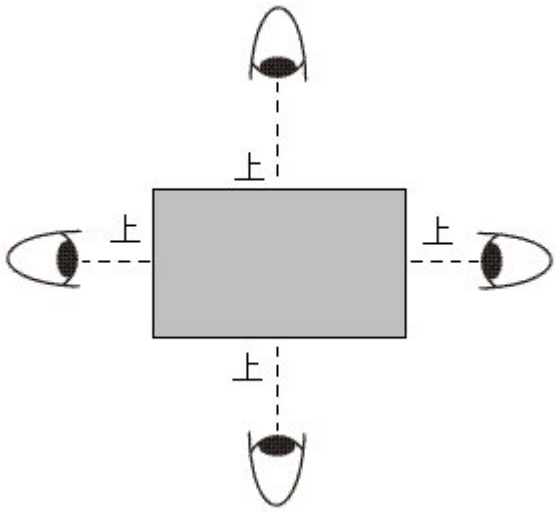
「上」という概念は物理的な概念である引力に逆らった垂直方向だけを指すのではなく、様々な意味を持つ。例えば、宇宙空間にいるときを想定して、その場合の「上」の意味はというと、人間の頭上にある空間を指す。また、平面的な本などの場合の「上」の意味はというと、下図のように視線がより高いほうを指す。

図 3-14　平面上の上下



さらに、対象の外側の表面も「上」である。例えば、「紙の上にメモする」、「壁の上に落書きする」、「ガラスの上に指紋が残っている」、「顔の上にご飯つぶがついている」などは全てその外側の表面を指す。つまり、森田(1980[53])も指摘しているように、上面とは必ずしも上方向にあるものではなく、目に触れる外側が「上」なのである。

図 3-15　目に触れる外側が「上」



上図のように、「上」という概念のなかには対象の表面も含まれており、「上方」と「対象の表面」の類似性を見出すことができる。中国語の「上」は上図の下の目線が表すように、本来ならば垂直方向に対しての「下」である表面を「上」で表すことができ、

[53] 森田良行(1980)『基礎日本語 2—意味と使い方』　角川書店　p.49

(59) 天花板上裝有電風扇。(天井に扇風機が取り付けてある)

のような表現が成り立つ。

次に、＜とどまる＞と＜付着する＞という二つの意味特徴の差異について考察すると、どこかに「とどまる」ということは「とどまっている」間その場所に「付着」しているかのような状態を保っているが、何の痕跡も残さず、いつでも別の場所へ位置を移動させることが可能である。これに対して、「付着する」の場合は、既に別の何らかの物体にくっつけられてしまっているため、位置を移動させるのは容易ではない上に、もし、位置を移動させたならば、何らかの痕跡が残るという二点を指摘することができよう。基本義との以上のような類似性に基づいて、この項の多義的別義〔7〕が派生したと思われる。

表 3-28　「～上」の別義〔7〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔7〕の具体例											
鋪上	刷上	罩上	繫上	圍上	套上	綁上	蒙上	簽上	記上	紮上	覆上
夾上	嵌上	擺上	披上	抹上	劃上	纏上	印上	繞上	編上	標上	坐上
踩上	架上	題上	繪上	擦上	列上	佩上	濛上	撒上	裹上	澆上	注上
種上	勾上	吊上	貼上	插上	刺上	黏上	塗上	畫上	寫上	刻上	穿上
戴上	縫上	放上	填上	釘上	裝上	鑲上	蓋上	染上	掛上	漆上	

3.2.2.8「～上」の多義的別義—〔8〕

(60) 自從迷上打棒球之後，他每天早晚都要來鍛鍊一下身體。

(「研究院語料庫」)

(野球にはまってから、彼は毎日朝と夜に体を鍛えることにしている。)

における「～上」は＜ある特定の対象に対して＞＜動作主のある心理的な動作が開始して＞＜動作の結果が持続する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。この「～上」の多義的別義〔8〕は多義的別義〔7〕の＜なにかの表面に付着する＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係に基づいて派生した多義的別義である。なにかに付着することが抽象化して、動作主の心理的な動作がある特定の対象に対して、抽象

的に付着することを表すようになったと考えられる。

また、この多義的別義〔8〕には＜動作主のある心理的な動作が開始して＞＜動作の結果が持続する＞という意味特徴があるだけでなく、＜ある特定の対象に対して＞という意味特徴も含まれている。なぜなら、この多義的別義〔8〕に属する例はいずれもその動作の対象が必要であるからだ。例えば、下の例文のように、動作の対象が伴わない表現は不自然である。

(61) 我愛上他了。(私は彼を好きになった。)／??我愛上了。(私は好きになった。)[54]

(62) 他惹上麻煩了。(彼はトラブルに巻き込まれた。)／??他惹上了。(彼は巻き込まれた。)

表 3-29　「～上」の別義〔8〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔8〕の具体例
搞上　盯上　愛上　迷上　惹上　賴上　學上　扯上　卯上

3.2.2.9「～上」の多義的別義―〔9〕

(63) 只要有崇高的抱負, 加上不斷的努力, 有一天你將會讓別人刮目相看的。(「研究院語料庫」)

(崇高な抱負を持ち、絶え間なく努力すれば、あなたはいつかきっと人を見返すことができるだろう。)

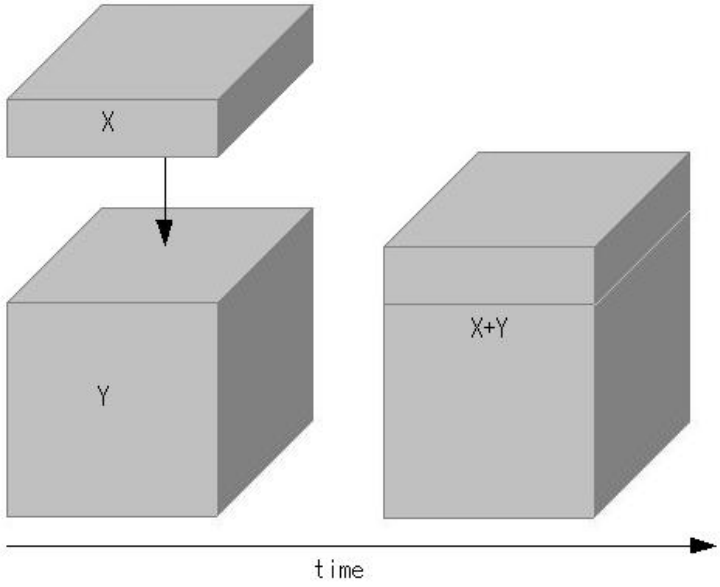
における「～上」は＜なにかを付け加える＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは多義的別義〔7〕の＜なにかの表面に付着する＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係に基づいて派生した多義的別義である。なにかに付着することが抽象化して量の増加を表すようになったと考えられる。

下図のように、なにかに付着するということはなにかを付け加えることでもある。これは日本語の「上乗せする」という概念とよく似ている。あるものの

[54] 疑問文「你愛上他了嗎?(彼を好きになったの?)」の答えとしては成立するが、単独では用いられない。

上に何かを乗せることは量の増加でもあり、「付け加える」ことでもある。

図 3-16　「上乗せする」のイメージスキーマ



また、一見すると「付加」という意味は前項動詞に含まれているもので、方向補語「～上」の意味ではないと思われるかもしれないが、「～上」の意味の中に「付加」が含まれていることについて、「賠上」を例として説明する。

(64) 錢輸了就算了，用不著賠上性命。

(負けた金はもうしょうがないが、命まであげる必要はない。)

前項動詞「賠」には「付加」という意味はないが、「賠上」だと「さらになにかを付け加える」という意味が含まれる。したがって、「～上」には＜付加＞という意味特徴が含まれていることがわかる。

表 3-30　「～上」の別義〔9〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

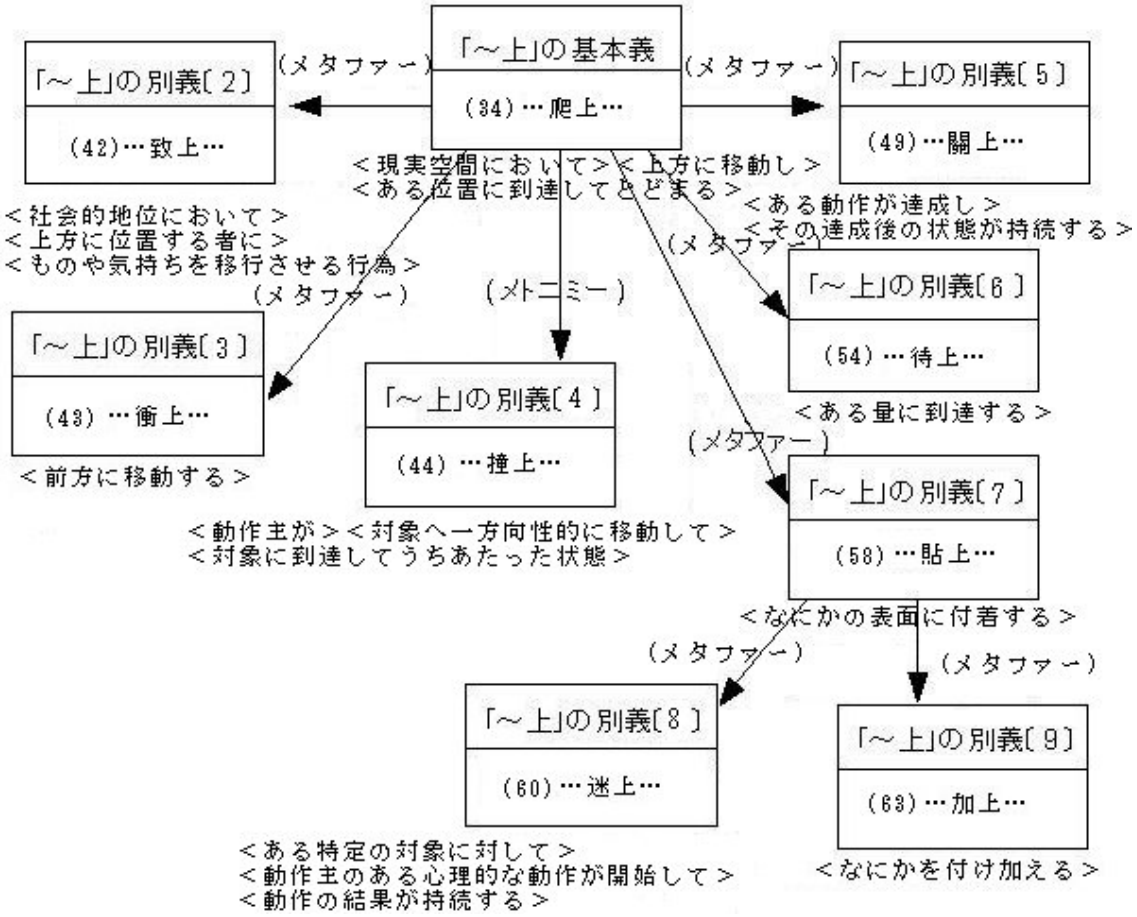
多義的別義〔9〕の具体例								
加上	算上	賠上	賭上	補上	摻上	添上	來上	附上

3.2.2.10「～上」の多義構造

以上、中国語の「～上」の多義性について分析を進めてきたが、その結果、「～上」には①空間的上昇、②地位の上昇、③前進、④動作の到達、⑤動作の達成

と状態持続、⑥ある量への到達、⑦付着、⑧動作の開始と持続、⑨付加、という九つの意味があることがわかった。最後に、分析によって明らかになった上昇を表す方向補語の「～上」の複数の意味を統括する多義構造を図 3-17 として示す。

図 3-17　「～上」の多義構造



3.3 上昇方向を表す日本語の複合動詞後項と中国語の方向補語の対照分析

上昇方向を表す日本語の複合動詞後項と中国語の方向補語について、それぞれ 3.1 と 3.2 において意味分析を行った。日本語の結果は表 3-31、中国語の結果は表 3-32 にまとめた。

表 3-31　上昇方向を表す日本語の複合動詞後項の意味分析結果

～あがる	①位置変化に焦点を当てた空間的上昇	基本義
	②序列の上昇	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 2
	③地位の上昇	別義 2 とのメタファー的関係により派生した別義 3
	④程度の上昇・高まり	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 4
	⑤形状の変化	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 5
	⑥自然現象の完了・完了後の状態の持続	基本義とのメトニミー的関係により派生した別義 6
	⑦動作・作業の完成	別義 6 とのメタファー的関係により派生した別義 7
	⑧社会的・個人的な評価の上昇による態度・言動の変化	別義 4 とのメタファー的関係により派生した別義 8
～あげる	①位置変化に焦点を当てた対象の空間的上昇	基本義
	②対象の序列の上昇	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 2
	③上位者が下位者から何かをとりたてることによって上方へ移行させる行為	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 3
	④下位者が上位者に対する要請・行為	別義 3 とのメタファー的関係により派生した別義 4
	⑤行動の程度を通常より上昇させる行為	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 5
	⑥形状変化を起こさせる行為	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 6
	⑦ほぼ完全に完了させた状態	基本義とのメトニミー的関係により派生した別義 7
	⑧完成させる行為	別義 7 とのメタファー的関係により派生した別義 8
	⑨感情・気持が上方へ溢れあがる状態	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 9

～のぼる	①過程に焦点を当てた空間的上昇	基本義
	②川の流れに逆らって上流へ移動する	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 2

表 3-32　上昇方向を表す中国語の方向補語の意味分析結果

V上	①空間的上昇	基本義
	②地位の上昇	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 2
	③前進	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 3
	④動作の到達	基本義とのメトニミー的関係により派生した別義 4
	⑤動作の達成と状態持続	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 5
	⑥ある量への到達	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 6
	⑦付着	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 7
	⑧動作の開始と持続	別義 7 とのメタファー的関係により派生した別義 8
	⑨付加	別義 7 とのメタファー的関係により派生した別義 9

この分析結果から導かれる結論として以下の二点が挙げられる。

(1)日本語の上昇方向を表す後項動詞は焦点を位置変化に置いたものと、焦点を経路に置いたものに分けられる。一方、中国語にはその区別がない。

(2)中国語のV上における上は、「上昇」という基本義から、「前進」という派生義に拡張する。これは人間の視覚のメカニズムの一つである奥行きの知覚によるものである。しかし、日本語の上昇を表す複合動詞後項の中に「前進」という意味は含まれていない。これは、日本語に「進む」という前進を表す動詞が存在するためだと思われる。

第四章　下降方向を表す日本語の複合動詞後項及び中国語の方向補語の意味分析

4.1 日本語の下降方向を表す複合動詞後項の意味分析

本節では日本語の複合動詞における下降方向を表す後項動詞の中から「～さがる」、「～さげる」、「～おりる」、「～おろす」、「～くだる」、「～くだす」、「～おちる」、「～おとす」を取り上げて意味分析する。

日本語の下降方向を表す動詞は種類が多く、その使い分けは日本語学習者にとって困難であると言われる。そのため、それらの表す意味の差異を正しく認識すれば、学習者の使い分けもより正確になるであろうと考えられる。したがって、本節では下降方向を表す前述の後項動詞の基本義となる意味特徴を特定し、それらの複数の下降方向を表す後項動詞の意味の違いを明らかにする。また、類義表現の意味の相違についても詳細に分析することを試みる。

4.1.1 先行研究

姫野(1999[55])は複合動詞の後項動詞の中で、様々な自他対応関係や反義、類義関係にあるものを取り上げて分析している。そして、下降方向を表す後項動詞として第三章の中で「～さがる」、「～さげる」、「～おりる」、「～おろす」、「～くだる」、「～くだす」、「～おちる」、「～おとす」を取り上げて分析している。

複数の下降動詞の意味について姫野が分析した結果を以下の通りにまとめて「表 4-1」として示す[56]。

[55] 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』　ひつじ書房

[56] 姫野昌子(1999)　前掲書　p.55-p.57 までをまとめて「表 4-1」にして示した。

表 4-1　姫野による下降方向を表す後項動詞の意味分析結果

(1)「～さがる」
- 一方が固定されて他方が下方に垂れている状態
  例：折れさがる。
- 水平移動の後退　例：飛びさがる、引きさがる。
  - 順位や地位の後退
    例：繰りさがる、成りさがる。
- 目標に向かって深く迫る　例：食いさがる。

(2)「～さげる」
- 対象を下方へ移動させる
  例：つりさげる、掘りさげる。
- 対象を後方へ移動させる
  例：押しさげる、引きさげる。
- 社会的な上下関係に関する行為
  例：願いさげる、とりさげる。
- 軽視　例：見さげる。

(3)「～おりる」――降下　例：抱えおりる、飛びおりる、駆けおりる。

(4)「～おろす」
- 対象を下へ移動させる意志的行為
  例：抱えおろす、担ぎおろす。
- 視線や手の動きの方向
  例：見おろす、にらみおろす、なでおろす。
- 新しく書くこと　例：書きおろす。

(5)「～くだる」――降下　例：駆けくだる、漕ぎくだる、攻めくだる。

(6)「～くだす」
- 対象物を飲んで下へ移動させる意志的行為
  例：飲みくだす。
- 視線や手の動きのならかな下方移動
  例：読みくだす、書きくだす。
- 感情的な上下関係の評価を含む　例：見くだす。

(7)「～おちる」―― 落下　例：滑りおちる、崩れおちる、舞いおちる。

(8)「～おとす」
- 落下させる
  例：洗いおとす、切りおとす、突きおとす。
- 陥落させる
  例：泣きおとす、くどきおとす、攻めおとす。
- ～することをうっかりもらす
  例：言いおとす、見おとす。

以上の姫野論文による分析にはいくつかの問題点がある。第一に、表 4-1 に示されている後項動詞類の基本義とその基本義から派生した多義的別義との意味的な関連性についての分析が欠落していることである。第二に、下降方向を表す個々の後項動詞の表す基本義が曖昧であったり、適切ではなかったりするために、必然的にそれぞれの後項動詞が表す意味の間に存在する意味的な差異が明確ではない点である。例えば、姫野論文では「～おりる」と「～くだる」が、共に＜降下＞という同じ意味特徴を示すとみなす。「～おりる」と「～くだる」の二後項動詞が表す意味概念には、＜降下＞という意味特徴が共通に含まれているのは確かであるが、しかし、ただその「意味的な共通点」を指摘するのみであるならば、両者の意味的差異を解明して明確に示すことは無理であろう。第三の問題点は、姫野論文では「～さがる」の第三の意味として「目標に向かって深く迫る」という意味を表すと指摘し、その意味を表す例として「食いさがる」という複合動詞を挙げている。しかし、「食いさがる」の表す意味としては、姫野論文による前述の意味のみでは不充分である点を本稿では指摘したい。最後に、第四の問題点としては、「書きおろす」とは、「新しく書く

こと」という意味を表すと主張しているが、この意味は「書きおろす」という複合動詞全体によって表されている意味概念であり、「～おろす」という後項動詞自体がその意味を表すとは認めがたい。

本稿では、先行研究である姫野論文における諸問題点について、以上のように指摘した。そこで、姫野論文の適切ではない点を修正すること、及び、不充分な点を補充することを目的に、本稿において分析の対象となっている個々の後項動詞の表す意味を形成するさまざまな意味特徴の組み合わせが妥当であるか、どうか、という視点から分析・考察して明らかにした上で、これらの後項動詞の表す意味概念を特定化することを試みたい。

4.1.2「～さがる」の意味分析

後項動詞の「～さがる」のもともとの動詞である「さがる」の表す概念には、基本的には三種類あるように思われる。その第一は、「固体のある一方が固定されていて、他の部分は不安定な状態でそこから下方に放たれている状態」を表す概念である。第二は、「ある固体の位置が、段階的に、後ろへ実際に後退的に移動・移行する動作」を表す概念である。第三は、「ある固体の位置が高い所から低い所へと垂直的、或いは、下方へ、段階的に位置が変わる動作」を表す概念である。したがって、第一の概念は「状態」を表す概念である。このカテゴリーは、「位置が段階的に実際に移動・移行する動作」を表している他の二つの概念とは全く異なる領域に属していることが見出される。そのため、本稿では、「～さがる」が後項動詞を成す動詞を形成する際に、まず、第一のカテゴリーに属する「～さがる」の表す概念を支える意味特徴を抽出する。次に、第二の概念を表す「～さがる」を形成する意味特徴を抽出する。そして、最後に、第三の概念を表す「～さがる」を形成する意味特徴を抽出する。その上で、「～さがる」が後項を成す個々の複合動詞における「～さがる」の表す意味に関して個々に分析・考察していく。

もともとの動詞「さがる」の表すこれら三種類の基本義を踏まえた上で、その「さがる」が後項動詞を成す複合動詞において「～さがる」の意味が変化するか、どうか、もし、変化するのが見出された場合には、どのような意味的な

変化を示すか、また、第二の概念である「前から後へと水平的に位置が変わる動作(例えば、「飛びさがる」)という概念と時間の推移（例えば、「昼下がり」＝正午が過ぎた午後の時間、或いは、「夕刻に近づいた時間」など）を表す概念の間には、何らかの意味的な相互関連性があるか、もし、あるとしたら、「後退する動作」と「繰り下がる時間」の間では、どちらの意味からどちらの意味へと意味的に拡張したか、などに関して考察する。

また、前述の「後方へ水平移動・移行」を表す第二の概念と、第三の概念である「高い所から低い所へと垂直的、或いは、下方へ、段階的に位置が変わる動作」を表す概念、の二つの基本的な概念の間には、何らかの意味的な関連性があるのかどうか、についても分析・考察する。

4.1.2.1「～さがる」の基本義 - 1

「～さがる」の基本的な意味を表す文例として下記を見られたい。

（65）大橋は水に映って、岸から垂れさがる長い柳の影もすゞしい。

（島崎藤村『山陰土産』）

における「岸から垂れさがる長い柳の影もすゞしい」という全文の意味は、「岸に植えてある柳の木の枝の一方の端は柳の木の幹に固定されて、枝の伸びているもう一方の先端が岸から不安定に下方の川面に向かって垂れ放たれている状態であり、その柳の枝は、風がふくたびに垂れ放たれている先端がゆらゆらと動くので、その動きが見る者に風が吹いているのを感じさせ、（視覚による認知を通して）見る者をより涼しく感じさせる効果を醸し出している。」という意味である。したがって、文中の「垂れさがる」の表す意味を支える意味特徴は、＜ある固体（枝）の一方の先端が別のある固体（木の幹）に固定されていて＞＜ある固体（枝）のもう一方の先端が＞＜不安定に下方へ垂れ放たれた状態・様子＞である。そのため、「垂れさがる」が表す意味概念には、「ある固体が下方へと実際に位置を移動したり、移行したりしないで、固定化された状態にある」という条件下において成立する概念である。

「垂れさがる」と同じように、＜不安定に下方へ垂れ放たれた状態・様子＞を表すものに「ぶらさがる」と「つりさがる」がある。下記の例を見られたい。

(66) 公園で子供が鉄棒にぶらさがっている。

における「ぶらさがる」は＜ある固体の一方の先端が別のある固体に固定されていて＞＜ある固体の全体が＞＜不安定に下方へ垂れ放たれた状態・様子＞という意味特徴により構成される。

(67) 窓に風鈴がつりさがっている。

における「つりさがる」は＜ある固体の一方の先端が別のある固体に吊るすことによって固定されていて＞＜ある固体の全体が＞＜不安定に下方へ垂れ放たれた状態・様子＞という意味特徴で構成される。

上述のように、「垂れさがる」、「ぶらさがる」、「つりさがる」は共に＜不安定に下方へ垂れ放たれた状態・様子＞という共通の意味特徴を持っていることがわかる。

次に、「垂れさがる」、「ぶらさがる」、「つりさがる」に類似した意味概念について考える。下記の文例を見られたい。

(68) 公園に植えてある木が、台風に襲われたために、枝が折れさがっている。

における「折れさがる」の概念は、＜ある固体（枝）の一方の先端が別のある固体（木の幹）に固定されていて＞＜ある固体（枝）のもう一方の先端が＞＜「折れて」下方へ垂れている状態・様子＞という意味特徴の組み合わせによって形成されている。そして、「垂れさがる」「ぶらさがる」「つりさがる」の表すそれぞれの概念と「折れさがる」が表す意味概念との差異は、「折れさがった」状態は、「折れた箇所」が木の幹に僅かに固定されている状態であり、下方へ垂れ下がった状態は不安定ではないため、風が吹いてもあまりぶらぶらと動くということはない。もし、枝が風で動いて全く折れてしまった状態になったならば、その瞬間に、「折れさがった」枝はその状態を保つことができずに、「折れて地面に落ちた」状態へと変化するからである。しかし、「折れさがる」状態は、「ある固体が下方へと実際に位置を移動したり、移行したりしないで、固定化された状態にある」という条件下において成立する意味概念の一つであることは否めない。

例えば、「折れさがる」の表す状態が、「垂れさがる」「ぶらさがる」「つりさがる」などが表す状態と異なる点は、「枝は木の幹に固定化されているとはいうものの、枝は折れている箇所によって、その固定化されている強さの程度が異なる上に、枝が下方へ垂れ下がる状態が、前述の三種類の複合動詞の表す状態に比較すれば、その程度が不安定ではない」ということが観察できるであろう。言い換えれば、「折れさがっている枝は風が吹くたびに必ず動くとは限らず、動けば、完全に折れて地面に落下する結果になるので、よほど強い風でない限り、普通の強さの風が吹いたとしても、枝は折れたままの硬直状態を保ったままである割合が高い」ということが推察できよう。また、「折れさがる」の動作主は、通常、主に植物であって、人間や固体ではない。もし、動物である場合には、例えば、「角が折れさがった動物」というように、「角を持った動物で、しかも、その角が折れさがっているままの状態」を保っている動物に限られるものと考えられる。角が完全に折れた場合には、「角が折れた動物」と表現するのであり、「角が折れさがった動物」とは表現しないからである。

以上、この項のカテゴリーの意味を表す「～さがる」の概念が表す主な状態を、「図 4-1」、「図 4-2」、「図 4-3」、「図 4-4」によって示す。そして、「～さがる」の概念と比較するために、「固体の一方が固定化されて、もう一方が不安定に下方へ垂れ放たれておらずに、固定されたものとして下方にさがっている」という動詞の「さがる」の概念を表現している文例を下記に示す。

(69) つららが軒からさがっている。

上記の文例が表す概念を「図 4-5」として示す。

図 4-1「枝が垂れさがっている」

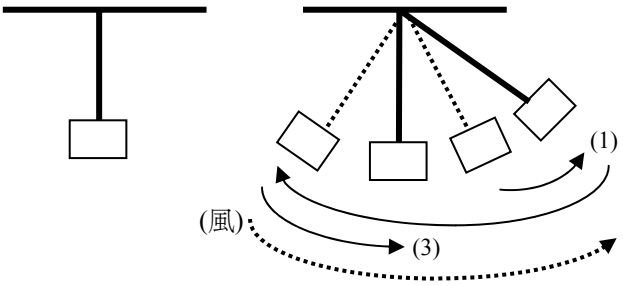


図 4-2「風鈴がつりさがっている」

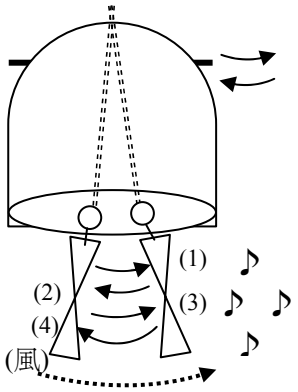


図 4-3　「看板がぶらさがっている」

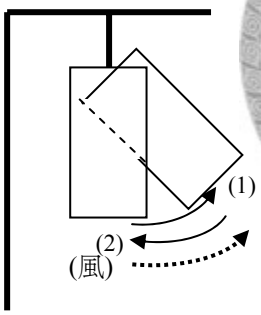


図 4-4　「枝が折れさがっている」

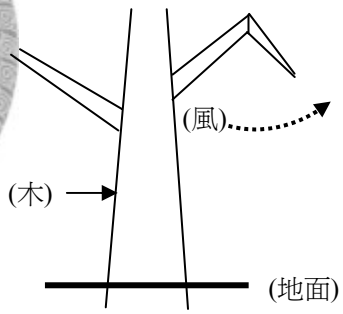


図 4-5「つららが軒からさがっている」

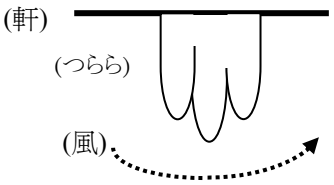


図 4-1 は、＜ある固体（枝）の一方の先端が別のある固体（木の幹）に固定されていて＞＜ある固体（枝）のもう一方の先端が＞＜不安定に下方へ垂れ放たれた状態・様子＞という意味特徴によって形成されている「（～から～が）垂れ

さがる」という意味概念を図によって表したものである。固体のある一方が別の固体に固定されていて、ある固体のもう一方の先端が不安定に下方へ垂れているため、垂れ下がっているある固体が風になびくほど柔らかければ、風が吹くたびに、その不安定に下方へ「垂れさがっている」ある固体の先端が動くことを示す。これに対して、図 4-2 は、風になびくほど柔らかくない、硬い物質によってできている個体である「風鈴」を示す。風鈴の上部のてっぺんの部分はワイヤーか或いは紐のようなもので別のある固体（家の軒など）に固定されていて、そこから不安定に下方に「ぶらさがる」或いは「つりさがる」状態、及び、風鈴の中にしつらえてある「風鈴を打つバチ」の、ある一方の先端が風鈴の内部のてっぺん部分にワイヤーか或いは紐のようなもので固定化されており、バチのもう一方の先端の部分が不安定に下方に「垂れさがって」、或いは、「ぶらさがって」いるために、風が吹くにつれて動く状態、という、二つの固体がそれぞれ「ぶらさがっている」「つりさがっている」状態と「垂れさがっている」「ぶらさがっている」などの状態、を示している。「垂れさがっているバチ」が、風が吹くたびに動けば外側の「鈴」を打つために、「リーン、リーン」という涼やかで澄んだ音を出して、聴覚によって認知する音を通して人間が涼しさを感じる度合いを増す効果を上げるのは言うまでもない。

また、図 4-3 は、風になびかない硬い固体でできている「看板」などの上部に細い綱が結び付けてあって、その綱によって「看板」の一方の先端がある別の固体に固定化されていて、「看板」のもう一方の先端が不安定に下方に垂れ放たれて「垂れさがって」いる状態、或いは、「つりさがって」いる状態である為に、風が吹くたびに「看板」が動くと、視覚によって認知する「看板の動き」を通して「人の目を引く効果を上げる」状態を、図 4-3 は示している。図 4-4 は「枝が折れ下がっている」状態を示す図である。

以上、これらの図 4-1、4-2、4-3、4-4 による四つの図が、＜ある固体の一方の先端が不安定に下方に垂れ放たれている状態＞を表すのに対して、図 4-5 は、もともとの動詞「さがる」の概念が、＜ある固体の一方の先端が別のある固体に固定されていて＞＜ある固体のもう一方の先端が＞＜単に下方へ垂れている状態・様子＞を表すことを示しており、その場合には、「下方へ垂れている固

体が、風に吹かれてゆらゆら揺れたり、ぶらぶら動いたり」する状態を想定しているわけではない。ある固体の一方の先端が別の固体に固定化されて、他の一方の先端が単に下方へ垂れて放たれている状態を表現する。図 4-5 は、「つらら」は風に吹かれても、ぶらぶらと動いたり、ゆらゆらと揺れたりしないで、固定化されたそのままの状態で「単に下方へさがっている」ことを示す。

動詞「さがる」の表す状態と、後項動詞に変化した「～さがる」の表す状態を比較すると、「さがる」の方は固体の一方の先端が別の固体に固定化されて、もう一方の先端が単に下方へ「さがる」場合、及び、「不安定に下方へさがる」場合、の両方を表す。これに対して、後項動詞へと変化した「～さがる」の方は、固体の一方の先端が別の固体に固定化されて、もう一方の先端が不安定に下方へ「～さがる」状態を表現する場合に多く用いられる傾向があるように思われる。言い換えれば、「～さがる」がこの項のカテゴリーに属する意味を表す場合に、後項動詞を成して複合動詞として機能する場合には、聞き手に「ある固体の一方が不安定に下方へぶらぶらと動いたり、或いは、ゆらゆらと揺れたりする状態のまま垂れ放たれている」ことを、聞き手に視覚的に認知させたり、連想させたりする効果があるように思われるのである。

次に、「垂れさがる」「ぶらさがる」「つりさがる」「折れさがる」の表す意味に近い意味を表すものとして、下記の文例中の「喰い下がっている」の表す概念について考える。

(70) 尻尾には最前の黒いものが、死ぬとも離るまじき勢で<u>喰い下がっている</u>。　（夏目漱石『吾輩は猫である』）

における「喰いさがる」は、＜ある物体の一方の先端が「喰う」という行為によって別の固体に固定され＞＜その物体の別の一方の先端が＞＜不安定に下方へと垂れ放たれている＞という意味特徴の組み合わせによって形成されている「喰い下がる」という意味概念であり、「垂れさがる」の概念を支える意味特徴との共通性が高く、単に、＜ある物体の一方の先端が「喰う」という行為によって別の固体に固定されている状態＞という意味特徴の示す「固定化される方法」が「喰う」・「食う」という動作・行為である点のみが異なるために、「垂れさがる」の「～さがる」の表す基本的な意味から意味的に拡張したもの

と認められよう。

「喰い下がる」或いは「食い下がる」が表す概念は、「『食う』という動作・行為をする動作主は動物や人間などの生物である」との限定条件、また同時に、動作主の位置は「『食い付いた箇所から実際に位置を移動したり移行したりしないで固定化されている』状態である」という条件、という二つの条件下において成り立つ概念であることが分かる。

関連して、それでは、下記の文例における「食い下がる」の意味について考える。

(71) 父母は私に将来アメリカに留学させるから英語を勉強せよと言ってくれるが、私は日本に留学したいから日本語の勉強を続けたいと食いさがった。

における「食いさがる」の表す意味は、「父母の願いに背いても、あくまでも自分の望みを離さないとばかりに、自分の目標に向かって深く迫るために粘り強く父母に立ち向かう」という意味である。この意味は、姫野論文による「～さがる」に対する第三の意味である「目標に向かって深く迫る」という意味を表現している。そして、(70)文中の「喰い下がる」が「相手のある部分に食い付いたら、一方の先端が不安定に下方へとぶら下がるような不利な状態に陥ったとしても、その食い付いた位置を固定化するかのように変えずに離さない」という実際的で具体的な状態を表すのに対して、(71)文中の「食い下がる」は「自分が不利な状態に陥ったとしても、当初の目的を固定化したものであるかのように変えずに離さない」という心理的な状態を表すのである。したがって、(70)文中の「喰い下がる」と(71)文中の「食い下がる」の表す二つの意味の間に存在するところの、意味的な類似性に基づく「メタファー的な意味拡張」のプロセスによって、(70)文中の「喰い下がる」の表すようなもともとの目で見える具体的な意味から、(71)文中の「食い下がる」の表すような目で見えない抽象的で心理的な状態を表す意味へと拡張したものと考えられるのである。

では、次に、「喰い下がる」或いは「食いさがる」の概念を支える意味特徴の組み合わせと、「垂れさがる」の概念を支える意味特徴の組み合わせを比較してみる。両者の差異は単に「ある物体の一方の先端を別の固体に固定化する

方法」が異なるだけであることが分かる。そして、その異なる方法とは、前者の示す「ある生き物による『喰う』・『食う』という行為によって位置を固定化する」ことであることが見出せる。したがって、「喰い下がる」或いは「食いさがる」の概念は、比喩的な表現を除いては、動作主が「喰う」・「食う」という動作・行為ができる人間を含めた動物であるという、限定条件下に成り立つ概念であることが見出されるのである。

以上の分析と考察の結果、明白になったことは次の点である。「ある固体が実際に位置を移動したり移行したりせずにその位置が固定化されている状態」であるというカテゴリーを表す「～さがる」という後項動詞を含む複合動詞には、「垂れさがる」「ぶらさがる」「つりさがる」「折れさがる」「食いさがる」の五種類の複合動詞があること、そして、これらの全ての複合動詞の後項動詞である「～さがる」の表す意味概念は、＜ある固体の一方の先端が別のある固体に固定されていて＞＜ある固体のもう一方の先端が＞＜不安定に下方へ垂れ放たれた状態・様子＞という意味特徴の組み合わせによって「動作主の位置が固定化されており、実際に移動したり移行したりして位置を変えない状態」であることが条件として成り立っている概念であること、などが指摘できよう。

また、「垂れさがる」「ぶらさがる」「つりさがる」「折れさがる」の四種類の複合動詞が共有する共通の意味特徴の組み合わせと、「喰い下がる」或いは「食いさがる」の表す概念を支える意味特徴の組み合わせとの差異は、後者には、＜ある物体の一方の先端が「喰う」・「食う」という行為によって別の固体に固定されている状態＞という意味特徴が加わっている点を指摘することができる。また、上記の複合動詞のそれぞれの動作主を比較してみると、「折れさがる」の動作主はごく一部の角を持った動物を除いては、主に植物であること、また、「垂れさがる」、「ぶらさがる」、「つりさがる」の動作主体は植物や動物や人間を含めた生物であることに加えて、固体も動作主になることができる。これに対して、「喰い下がる」或いは「食いさがる」の動作主は、「喰う」・「食う」という動作・行為が加わっているために、比喩的な表現を除いては、人間を含めた動物に限定される、などの相互間に存在する差異が見出せる。

4.1.2.2「～さがる」の基本義 - 2

この項では、「飛びさがる」及び「繰りさがる」におけるそれぞれの「～さがる」の表す概念について分析・考察する。

(72) かんの命ずるまま、反射的に跳ねあがり、右ひだりに駈け、跳びあがり、刀をぬき、斬り、飛びさがる。 (司馬遼太郎『国盗り物語』)

における「～さがる」は＜動作主が＞＜中間的段階において＞＜後方へ水平に移動する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。この意味は「～さがる」の基本義 - 2 となる。

次に、「繰りさがる」について、下の例を見られたい。

(73) 波及的に繰り下がる場合の計算の仕方を理解し、正しく筆算でできるようにする。 (学芸大学教育実践データベース[57])

における「～さがる」は＜序列が＞＜中間的段階において＞＜下方へ移動する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。レイコフ・ジョンソンらによる「多」は「上」、「少」は「下」という方位性を表す概念を「経験的基盤」に基づいて理解できることは本稿において既に指摘した。したがって、計算する時の用語として、「数が少ない」方に移動して計算する際に、＜下方へ移動する＞という意味特徴によって支えられる「繰り下がる」という表現を可能にするのである。これは基本義 - 2 の＜中間的段階において＞＜後方へ水平に移動する＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。具体的な空間における水平移動という根源領域(source domain)から抽象的な序列における前から後ろへと水平移動するという目標領域(target domain)へと写像(mapping)したものである。

例(73)文中における「繰り下がる」の場合、序列とは計算上の位のことを指し、「高い(大きい数の単位)」位から「低い(小さい数の単位)」位へと移動する抽象的な概念である。次の例のような場合の序列は時間のことを指し、「近い」時間から「遠い」時間へと予定などが移動することを表す。

(74) 野球延長のため、番組が繰り下がる可能性があります。

上の例のように、予定していた時間が離れていく(後退していく)ことは、前項

[57] 柴田忠幸「引き算のひっ算」(2000) オンライン「学芸大学教育実践データベース」インターネット http://diep.u-gakugei.ac.jp/output/001002002/Index.htm (2008/2/14 にアクセス)

でも述べたように水平的に後ろに移動していくという抽象的概念を表す。

ここで一つ問題となるのは、なぜ「繰り下がる」という形式であって、「*繰り下りる」という形式ではないのかということである。考えられるのは、やはり序列は上下間での移動ではなく、いくつもの段階を想定しての段階的な水平移動であるので、後退を表す場合には上から下へ「～おりる」ではなく、前から後ろに「～さがる」という形式のほうが自然な表現と言えるからだと思われる。

4.1.2.3「～さがる」の基本義‐3

この項においては、「～さがる」の表す基本義‐3について分析・考察する。

(75) 縮んでしまっているセーターはそのままもち上り、ずり下ったズボンとの間に、おへそが覗いた。 (曾野綾子『太郎物語』)

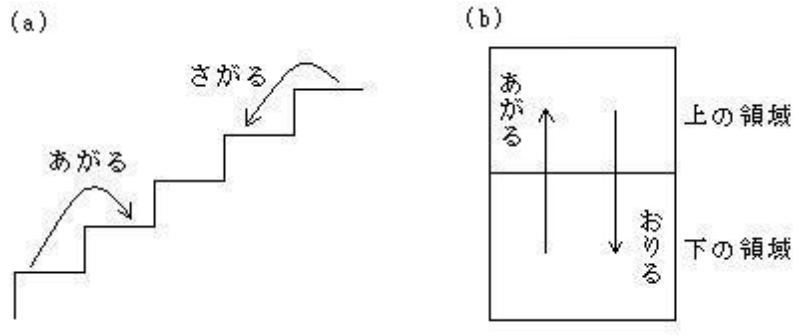
における「～さがる」は＜固体が＞＜中間的段階において＞＜下方へ移動する動作・行為＞という意味特徴によって形成される概念を表す。この意味は「～さがる」の基本義‐3となる。

例(75)における「～さがる」は、通常ズボンの上部のベルトの部分が腰の位置にあるべき状態でズボンをはくと、ズボンの丈が丁度よい長さになるにもかかわらず、そのベルトの部分が腰より下がった位置に下げてズボンをはくと、ズボンの丈が通常より長くなって、全体的にずり下がっている状態を表すことを指す。

森田(1980[58])は「さがる」の基本義について、「あがる／おりる」が上下両極間での位置移動を表すのに対し、「あがる／さがる」は上下間の段階的な移行を表すと述べている。また、「あがる／おりる」は「火口底におりてみよう」のように、上下両極間の位置移動意識があり、「火口底にさがる」とは言わない。一方、「あがる／さがる」は段階的移行なので、「一段下がる」、「さがりすぎる」などの言い方が普通に用いられるという。下図は森田が「あがる／さがる」と「あがる／おりる」の違いを示したものである。

[58] 森田良行(1979)『基礎日本語—意味と使い方』 角川書店 p.8-p.9

図 4-6　「あがる／さがる」と「あがる／おりる」(森田 1979：9)



上述のような森田の指摘のとおり、「～さがる」の基本義‐3 も同様に中間段階での位置下降を表す。「ずりさがる」は上下移動の中間段階における位置下降であり、上下両極間での位置下降ではないことがわかる。この基本義‐3 は、ある個体が下方へ実際的に位置移動した状態を表す。

「ずりさがる」が目に見える下方への実際的に位置移動した状態を表すのに対して、「成りさがる」は、元々の位置として高かったはずの相手に対する評価を下降して評価する時の表現になる。これは目に見えない抽象的な評価概念を表す。下記を見られたい。

(76) しかし、あの人たちの所謂一文なしに成り下ったというのは、プロレタリヤートの文字通りの一文なしとは大いに違うんだぜ。

(浜尾四郎『殺人鬼』)

における「～さがる」は＜地位が下方へ移動する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義‐3 の＜中間的段階において＞＜下方へ移動する動作・行為＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。具体的な空間における上下移動という根源領域から抽象的な地位における上下移動という目標領域へと写像したものである。

「繰り下がる」と同様に、「*成り下りる」ではなく「成り下がる」という形式をとる理由としては、社会的地位の下降は上下両極間の移動ではなく中間段階での段階的移動であるため、「～さがる」を用いたほうが自然といえるからだと思われる。

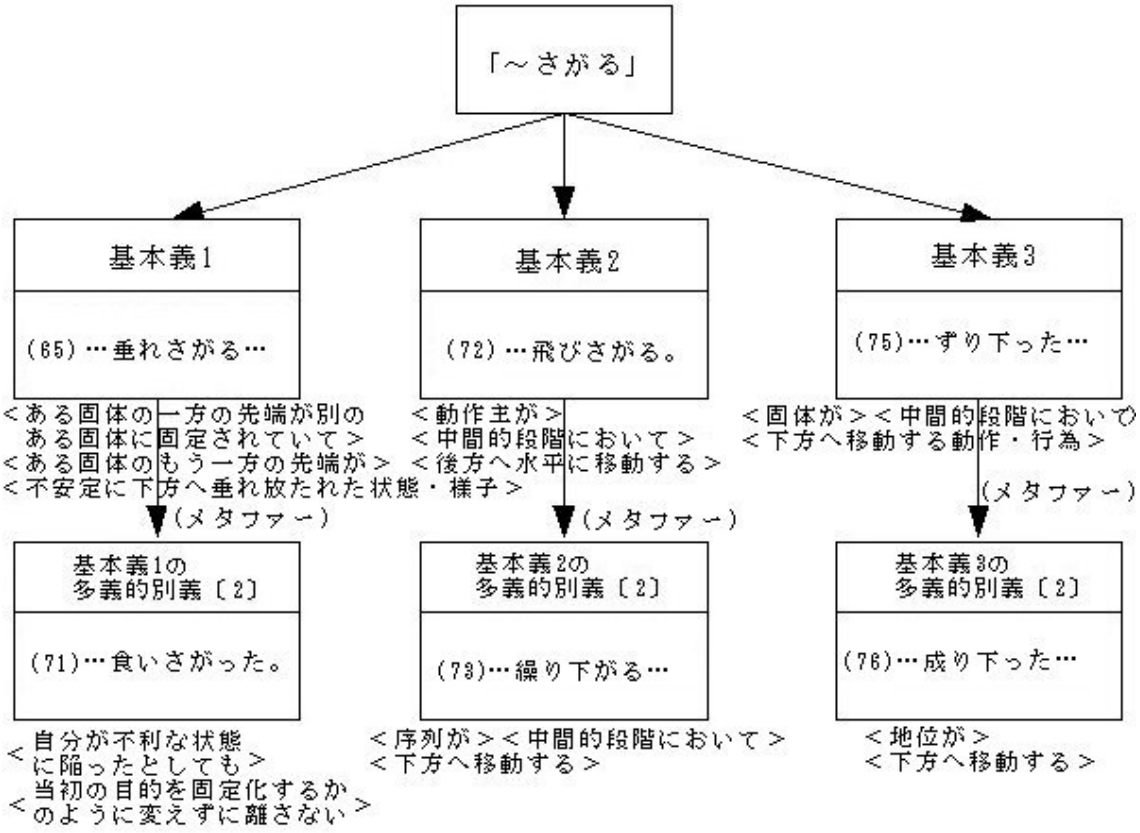
4.1.2.4「～さがる」の多義構造

以上の分析の結果、「～さがる」の表す概念には、三種類の異なる基本的な概念が存在すること、そして、それぞれの基本義‐1、‐2、‐3 から意味的に拡張したと見なされる個々の多義的別義［2］が存在すること、の二点が明らかにされた。また、後項動詞の「～さがる」の表す異なる三種類の内、基本義‐1 の表す概念は、意味的には、「～さがる」のもともとの動詞である「さがる」の表す基本的な概念に対応しているが、僅かに差異が見出される点としては、後項動詞へと変化した「～さがる」を用いた複合動詞の方がもともとの動詞である「さがる」の表すイメージよりも、「固体の一方の先端が不安定に下方へぶらぶらと動いたり、ゆらゆらと揺れたりする状態で垂れ放たれている」ことをより鮮明に、視覚的に認知させたり、連想させたりする効果を増している傾向があることが指摘できよう。後項動詞の「～さがる」の表す基本義‐2、及び、基本義‐3 に関しては、もともとの動詞である「さがる」の表す概念と一致しており、意味的には、動詞「さがる」と後項動詞「～さがる」の表す意味概念は、相互に対応していることが明白になった。

次に、「～さがる」の表す基本的な概念である基本義‐1、基本義‐2、基本義‐3 は、個々に意味的に拡張して、それぞれの多義的別義―〔2〕を派生させていることが分かった。

以上、明らかにされた事実に基づくと、「～さがる」の表す基本義‐1、基本義‐2、基本義‐3、及び、それらの異なる三種類の基本義から意味的に拡張したと見なされる個々の三種類の多義的別義―〔2〕によって形成される「～さがる」を形成する多義構造は、三方に放射線状を成して形成されていると思われる。それを「図 4-7」で示す。

図 4-7　「～さがる」の多義構造



4.1.3「～さげる」の意味分析

4.1.3.1「～さげる」の基本義‐1

(77) 家の中は虫干のやうに階上にも階下にも、いろいろな着物が吊り下げてある。　(芥川龍之介『着物』)

における「～さげる」は＜対象の一端を固定し＞＜他の端を下方へ不安定に垂れ放つ状態・さま＞という意味特徴によって形成される概念であり、基本義‐1となる。この場合の「～さげる」の動作主は、

(78) ひょうたんはつるにたくさんの子供をぶらさげている。

における「ぶらさげている」というような比喩表現を除いては、主に人間を含めた動物である。そして、この基本義‐1が表す概念には、対象物がある地点から別の地点へと実際に位置を移動するという概念を含まない。単に、対象物のある部分が形状変化を示さないで、対象物の一方が固定化され、他の一方が下方へ垂れ放たれる状態を示す概念を表すのである。

表 4-2　「～さげる」の基本義‐1 を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

基本義‐1 の具体例
つりさげる　ひっさげる　ぶらさげる

4.1.3.2「～さげる」の基本義‐2

(79) 今日は式の時間がのびたので、午後の行事は、三十分ほどくり下げて一時半からということになっていた。(下村湖人『次郎物語　第五部』)

における「～さげる」は＜予定していた行事を始める時間を＞＜中間段階で＞＜後方へ水平移動させる動作・状態＞という意味特徴によって形成される「くりさげる」という概念を表し、基本義‐2 となる。時間や計算という抽象概念を＜中間段階での＞＜後方へ水平移動させる動作・状態＞を表す。

表 4-3　「～さげる」の基本義‐2 を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

基本義‐2 の具体例
繰りさげる

4.1.3.3「～さげる」の基本義‐3

(80) 花房は佐藤にガアゼを持って来させて、両手の拇指を厚く巻いて、それを口に挿し入れて、下顎を左右二箇所で押えたと思うと、後部を下へぐっと押し下げた。　(森鴎外『カズイスチカ』)

における「～さげる」は、＜中間段階において＞＜対象物全体を実際に下方へ位置移動させる動作・行為＞という意味特徴によって形成される概念である。この「押しさげる」という概念は(80)文中に見出されるようにもともと固体を動作の対象としていたが、意味的な拡張によって抽象的な意味概念を表現する多義性を示すようになった。下記を見られたい。

(81) シベリア高気圧の台湾への突然の襲来は、それまで日中 25 度以上に上がっていた気温を押し下げた。

における「押しさげた」の動作主は、「シベリア高気圧」という抽象的な概念である。関連して、

(82) 高い位置に吊ってある絵の位置を低くするために、壁に取り付けてあるひもを下へ引っ張って引きさげた。

における「引きさげる」はある対象物の位置をより低い位置へ移動させる行為を示す。この場合の対象物は具象物である「絵」である。そのため、＜中間段階における対象物全体を＞＜下方へ実際に位置移動させる動作・行為＞という意味特徴によって形成される「引きさげる」という概念である。この概念も「価格」という抽象的な意味領域へと意味的に拡張していることが見出される。下記を見られたい。

(83) 原油の価格が暴落したので、石油を扱う各社は石油価格を一斉に引き下げた。

以上、「押しさげる」「引きさげる」などの複合動詞中の後項動詞「～さげる」は、物体の一部分を形状変化させないまま、物体の全体を下方へ実際に位置移動させる動作を表す概念であることが明らかになった。加えて、これらの複合動詞は、対象物が「物体」という具象物から意味拡張して、「気温」や「価格」などの抽象的な概念へとそれぞれ個別に意味的に拡張していることが見出される点も指摘しておきたい。

4.1.3.4「～さげる」の多義的別義―〔2〕

(84) 穴はもう彼らの腰のあたりまで掘り下げられていた。

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド 』)

における「～さげる」は＜中間段階において対象である物体のある部分に＞＜形状変化を起こさせつつ＞＜下方へ移動させていく動作・行為＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義‐3 の＜下方へ実際に位置移動させる動作・行為＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。この概念は「～さがる」と同様、上下移動の中間段階における位置下降を表す。上記(84)文中の「～さげる」は、動作主である人間が地面の地表を「掘り始めた地点」が「掘り下げる」という複合動詞が表す概念の起点となる。そして、動作主が「掘る」という動作を繰り返すごとに起点を示すところの、「もともと周りの地表と同じ

レベルであった地点」は、地表のレベルからどんどんさがっていく状態を示す。

「～さがる」と同様、「～さげる」も上下移動の中間段階における位置下降であって、上下両極間での位置下降ではない。また、下方への位置移動も物体全体が下へ移動しているというわけではなく、物体の一部の形状変化による位置移動である。

表 4-4　「～さげる」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔2〕の具体例
切りさげる　掘りさげる

4.1.3.5「～さげる」の多義的別義—〔3〕

(85) 原料はガス会社から、廃液をきわめて安く<u>払い下げて</u>もらえることになり、面白いようにもうかった。(星新一『人民は弱し官吏は強し』)

における「～さげる」は＜所有物を＞＜社会的地位の高い方から＞＜下方へ移動させる動作・行為＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義‐3 の＜下方へ実際に位置移動させる動作・行為＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。具体的な空間における上下移動という根源領域から抽象的な社会地位における上下移動という目標領域へと写像したものである。

この多義的別義〔3〕に属する「払い下げる」、「貰い下げる」、「売り下げる」において、＜社会的地位の高い方から低い方へ＞＜移動させる＞ものは一般的に「官有の動産や不動産」などの「官有物」である傾向を示すことが見受けられる。

表 4-5　「～さげる」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔3〕の具体例
売りさげる　払いさげる　貰いさげる

4.1.3.6「～さげる」の多義的別義—〔4〕

(86) それはまるで人を見下げた、 傲慢な調子だった。

(小林多喜二『母たち』)

における「～さげる」は＜対象者に対する個人的評価を＞＜中間段階においての＞＜高い方から低い方へと変化させる＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義‐3の＜下方へ実際に位置移動させる動作・行為＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものであり、メタファー的関係により派生した多義的別義である。具体的な空間における上下移動という根源領域から抽象的な社会地位における上下移動という目標領域へと写像したものである。

この多義的別義〔4〕に属する「見下げる」が表す概念とは、＜行為の対象者に対する評価を＞＜高い方から低い方へと変化させる＞ことを指しているが、言い換えれば、相手や対象者を「軽く見る」・「同等に見なさない」・「劣っていると蔑視する」などの概念と共通した意味を表現する。

Lakoff が主張する概念メタファーの一つの<高い位は上、低い位は下[59]>からでもわかるように、我々人間は社会的地位の程度を空間的な上下概念を用いることで理解する。ここの「～さげる」の多義的別義〔4〕も具体的な空間における上下移動という根源領域から抽象的な社会的・個人的評価における上下移動という目標領域へと写像することで、抽象的な概念を我々人間にとって認知しやすい形(ここでは空間上の移動)に変えて理解するのである。

表 4-6 「～さげる」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔4〕の具体例
見さげる

4.1.3.7「～さげる」の多義的別義—〔5〕

(87) そして唐沢氏本人がやつて来て、手を突いて謝まるならば告訴を取り下げようと云ふのだ。 (菊池寛『真珠夫人』)

59 Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. 前掲書 p.23

における「～さげる」は＜いったん提起した訴え・願い・考えを＞＜取り消す＞という意味特徴によって形成される概念を表している。この概念は、一般的には社会の上位に位置する公的な機関に願い出た案件を取り消して無効にするということを表す。基本義‐3 の＜下方へ実際に位置移動させる動作・行為＞という意味特徴との意味的な類似性により意味拡張したもので、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

「願いさげる」は本来相手に出した願いを自分の元に戻す意味であり、この場合相手に対して何かを「願う」わけであるから、相手のほうを上に見た表現だと思われる。「取り下げる」も「訴訟を取り下げる」や「願書を取り下げる」などのように、本来政府などの公的機関に出した正式な手続きを取り消して自分のもとへ戻す意味であり、やはり外部の公的機関を上に見て、動作主のほうを下に見ている表現である。また、「取り下げる」は、＜社会的地位の高い方から低い方へ＞＜ある案件を移動させて＞＜正式に無効にする行為＞などの意味特徴の組み合わせによってその概念が支えられる。また、「ある案件」の場合は、例えば、「訴訟、告訴、申請」などの事件・案件である。一方、「願い下げる」の場合は、「訴え、要請、願望」などを扱う場合に用いる。実際に願いや考えや訴えや願望や要請などを願い出た当事者である動作主が取り消して無効にすることを指すのである。

表 4-7　「～さげる」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

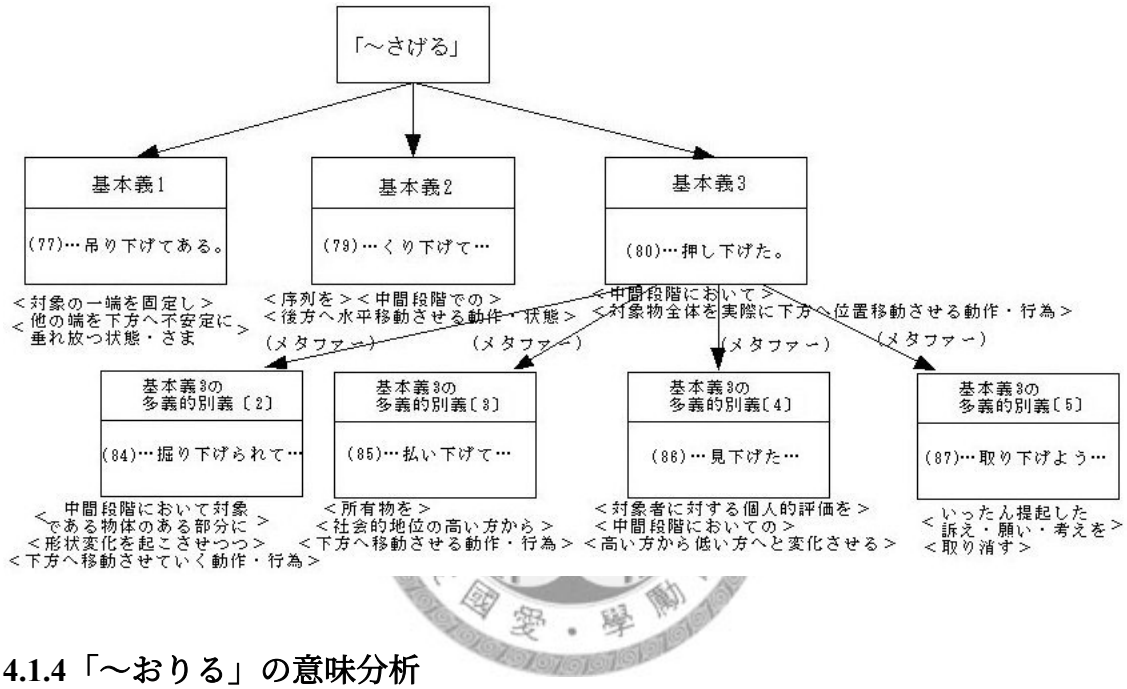
多義的別義〔5〕の具体例
取りさげる　願いさげる

4.1.3.8「～さげる」の多義構造

以上、「～さげる」の多義性について分析したが、その結果「～さげる」には①一端が固定された状態で他の端を下方へ垂れ放ったり移動させたりする行為、②序列を下降させること、③中間段階において下降させる動作・行為、④物体のある部分に形状変化を起こさせつつ下方へ移動させていく動作・行為、⑤所有物を社会的地位の高い方から下方へ移動させる行為、⑥地位を下降させ

ること、⑦訴えなどを取り消すか願いさげて無効にすること、という七つの意味があることがわかった。そして、その意味拡張はメタファー的関係により派生したものであるということもわかった。最後に、分析によって明らかになった下降方向を表す複合動詞の後項動詞「～さげる」の複数の意味を統括する多義構造を図 4-8 として示す。

図 4-8　「～さげる」の多義構造



4.1.4「～おりる」の意味分析

(88) 路地口の窓を開けて、俊ちゃんは男のようにピョイと地面へ飛び降りると、湯殿の高窓から降した信玄袋を取りに行った。

(林芙美子『放浪記』)

における「～おりる」は＜上下両極間の＞＜下方へ移動する動作・行為＞という意味特徴によって形成される概念を表している。「～おりる」にはこの一つの意味しかなく、多義性を示さない。

姫野は「～おりる」と「～くだる」に同じ「降下」という意味を与えているが、それでは両者の違いを説明することができない。例えば、なぜ「台の上からおりる」とは言えるのに対し、「*台の上からくだる」とは言えないのか。また、「山からおりる」と「山からくだる」はどちらも言えるがその違いはなんであろうか。これらの問題を説明するのには＜降下＞以外の意味特徴を特定す

る必要がある。

同じ下降を表す動詞であっても、上下両極間での位置移動である「～おりる／～おろす」は中間段階における上下移動である「～さがる／～さげる」とは異なるということは既に述べたが、「～おりる」と後で述べる「～くだる」もどこに焦点を当てるかという点で異なる。「～おりる」が「位置の変化」に焦点を当てているのに対し、「～くだる」は「経路」のほうに焦点がある。上の「台の上からおりる」のように、椅子の上や台の上から地面へおりるという短距離の下降は経路ではなく位置の移動に焦点があるため、「くだる」ではなく「おりる」を用いる。また、「山からおりる」と「山からくだる」の違いも、前者の場合は「位置の変化」に焦点を置き、後者の場合は「動作の経過」に焦点を置くという差異があることがわかる。

表 4-8　「～おりる」を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

具体例
抱えおりる　かけおりる　滑りおりる　とびおりる　這いおりる　舞いおりる

4.1.5「～おろす」の意味分析

4.1.5.1「～おろす」の基本義

(89) 河岸には荷を<u>積み下ろす</u>ための広い石段がついていたが、今はもう使うものもなく、丈の高い雑草が石のすきまにしっかりと根を下ろしていた。　(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)

における「～おろす」は＜上下両極間の＞＜下方へ移動させる動作＞という意味特徴によって形成される概念を表し、基本義となる。

姫野(1999)は「なでおろす」を手の方向を示す意味として視線の動きと同じ意味に分類しているが、「なでおろす」は「手を下方へ移動させる」という意味で、手を対象として捉えた用法である。視線の動きと違って具体的であり、「～おろす」の基本義に属すると考えたほうが妥当だと思われる。

表 4-9　「～おろす」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

基本義の具体例				
うちおろす	抱えおろす	掻きおろす	担ぎおろす	切りおろす
すくいおろす	ずりおろす	抱きおろす	助けおろす	つかみおろす
つりおろす	なでおろす	吐きおろす	運びおろす	引きおろす
踏みおろす	吹きおろす	踏みおろす	ふりおろす	積みおろす

4.1.5.2「～おろす」の多義的別義—〔2〕

(90) 機械でつけたように、規則正しく刻まれた風紋を横切って進むと、ふいに視界が切れて、深いほら穴を見下ろす、崖際に立っているのだった。

(安部公房『砂の女』)

における「～おろす」は＜視線を上下両極間の＞＜下方へ移動させる＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜下方へ位置移動させる＞という意味特徴と類似していることにより意味拡張したもので、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

「見下ろす」には「人を見下ろした横柄な態度」のように、「軽蔑する、あなどる」という意味で使われることがある[60]。しかし、これは「見おろす」という一語が形成された後にできた多義的別義なので、「～おろす」の多義的別義とはいえない。また、この用法はかなり限られたもので、一般的に「A を見下ろす」といえば字義通りの意味で、動作主が A の上方にいて、視線の下方に A がいるという物理的な空間位置を表しており、A を軽蔑するという意味にはならない。「見下ろす」が「軽蔑する、あなどる」という意味になるのはやはり「人を見下ろした態度(口調、口ぶり、質問)」などの表現の場合に限られる。そして、「人を見下ろした態度」において、「見下ろす」が「軽蔑する」という意味を表すようになったのは、自分が他者の上方にいることがあたかもその人よりえらいと感じることから来ていると思われる。一方、「見下げる」や「見下す」は自分の心の中において相手の地位を下方へ移動させることであり、単

[60] 『三省堂　スーパー大辞林』〈http://www.sanseido.net/〉

に空間的な位置関係から「軽蔑する」という意味に派生した「見下ろす」とは異なる。

表 4-10　「～おろす」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔2〕の具体例
見おろす　眺めおろす　にらみおろす

4.1.5.3「～おろす」の多義的別義—〔3〕

(91) 「高い支持率があり、改革が道半ばの首相を引きずりおろして自民党が国民の支持を得られるのか」などの意見が出た。

(朝日新聞記事データベース 2003)

における「～おろす」は＜ある人の地位を＞＜何らかの原因による不当な圧力のために＞＜急激に実際に下降させる行為＞という意味特徴によって「地位を下降させる行為」という概念を表す。この別義の場合は動作主も対象者もほとんど人間である。人間のほかに、対象物になるのは具象物に加えて、観光地などの実際の場所や抽象的な夢や名誉などが対象になることができる。下記を見られたい。

(92) タイ国のプーケットは有数の観光地であったが、大津波の襲来以後、その地位からひっぱりおろされた。

(93) 前総統が逮捕されたことにより、総統の名誉ある高い地位は犯罪者を出した汚名によって低い地位へと引きずりおろされた。

表 4-11　「～おろす」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔3〕の具体例
引きずりおろす　　ひっぱりおろす

4.1.5.4「～おろす」の多義的別義—〔4〕

(94) やがて話は文学論にうつり、続いて当代の文士評に飛び、有名な人びとを片っぱしから、こきおろしはじめた。　(山本有三『路傍の石』)

における「～おろす」は＜ある人に対する社会的・個人的な評価を急激に＞＜下方へ移動させる＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは多義的別義〔3〕の＜ある人の地位を＞＜何らかの原因による不当な圧力のために＞＜急激に実際に下降させる行為＞という意味特徴と類似していることにより意味拡張したもので、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

この多義的別義〔4〕における「～おろす」と「見下げる」の「～さげる」との違いは「～おろす」は上下両極間の下方へ移動するのに対し、「～さげる」は中間段階における下方へ移動するものを指示する。したがって、「～さげる」より「～おろす」のほうが急激に地位をさげることを表している。また、軽蔑を表す「～おろす」と「～くだす」の違いは「～おろす」が地位の位置変化に焦点があるのに対し、「～くだす」は地位を下降させる過程に焦点があることである。「～さげる」も「～おろす」と同様に地位の位置変化に焦点がある点で「～くだす」とは異なる。

表 4-12　「～おろす」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔4〕の具体例
こきおろす

4.1.5.5「～おろす」の多義的別義—〔5〕

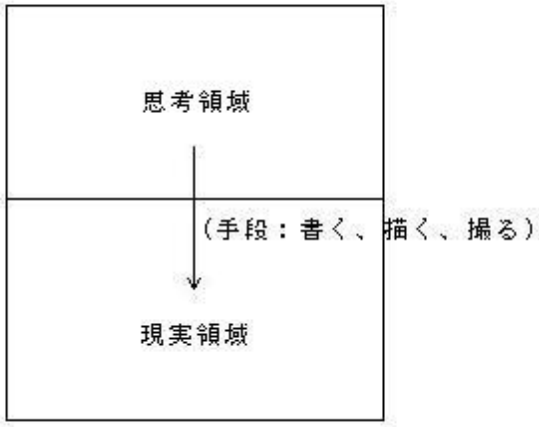
(95) 一つ競作をやりましょうかな。これから尊家が一作、不肖が一作、ともに敵討の新作を<u>書き下ろして</u>、どっちが世に受けるか競作というのをやってみましょう。　(林不忘『仇討たれ戯作』)

における「～おろす」は＜個人の脳裏にある構想を＞＜思考領域から現実領域へ＞＜移動させて新たに実現化させる動作＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜上下両極間の＞＜下方へ位置移動させる＞という意味特徴と類似していることにより意味拡張したもので、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

「～さがる」の基本義の項で取り上げた森田(1979)による図 4-6 のように、「～おりる」はある領域から別の領域の移動でもある。下図のように、「～おろす」

も「～おりる」と同様にある領域から別の領域の移動でもあり、ここの多義的別義〔5〕における「～おろす」は人間の脳の中にある構想を「書く」、「描く」、「撮る」といった手段を使って思考領域から現実領域へと移動させることを表す。

図 4-9　「構想を実現化する」という意味を表す「～おろす」



「描き下ろす」は下の例のように、絵の創作によく使われている。

(96) シリーズの中で長く絶版になっていた絵本 4 巻が、新たに描き下ろした絵で復刊中だ。　(朝日新聞記事データベース 2004)

「撮り下ろす」のほうは下の例のように、写真や映画、ドラマなどの映像の創作によく使われている。

(97) 写真家森山大道が滝沢直己デザインのイッセイの服を撮り下ろした写真集「NOVEMBRE」(月曜社)が出版された。

(朝日新聞記事データベース 2004)

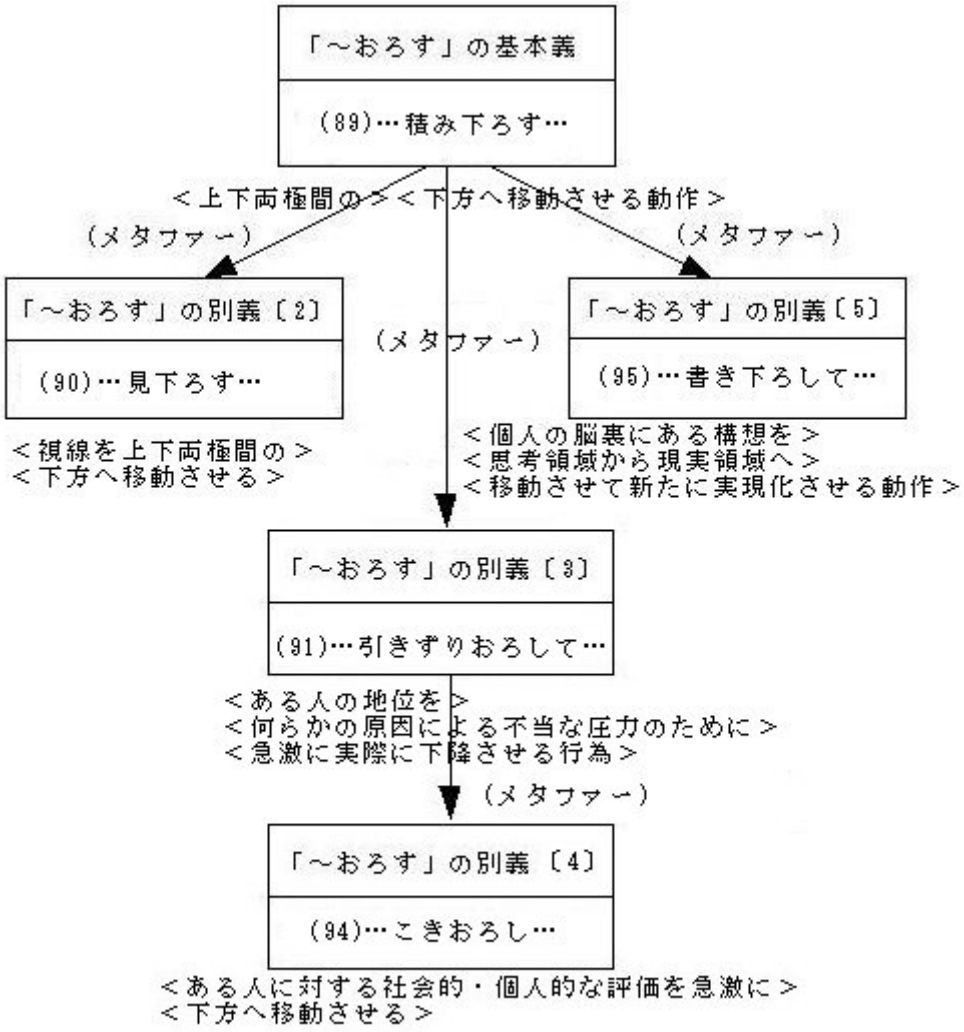
表 4-13　「～おろす」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔5〕の具体例
書きおろす　撮りおろす　描きおろす

4.1.5.6「～おろす」の多義構造

以上、本節で「～おろす」の多義性について分析をした結果、「～おろす」には①下方へ位置移動させる動作・行為、②視線の位置を下降させる動作・行為、③地位を急激に実際的に下降させること、④対象者や相手に対する評価を下降させること、⑤構想を新たに実現化する行為、という五つの意味があることを明らかにした。最後に、分析によって明らかにした下降方向を表す複合動詞の後項動詞「～おろす」の複数の概念を統括する多義構造を図 4-10 として示す。

図 4-10　「～おろす」の多義構造



4.1.6「～くだる」の意味分析

4.1.6.1「～くだる」の基本義

(98) 堤を駆け下る大治郎を見て、五人の敵が包囲の体勢を変えた。

(池波正太郎『剣客商売』)

における「～くだる」は＜動作主の＞＜移動の過程に焦点を当てた＞＜下方への移動＞という意味特徴によって形成される概念であり、基本義となる。

「～くだる」の基本義は「～のぼる」の基本義と対応関係にあり、両者はともに移動の過程に焦点を置く。「～くだる」は下へと、また、「～のぼる」は上へと位置移動する動作を表す。そして、ほかの下降を表す後項動詞との違いは、「～さがる」、「～おりる」が移動後の結果に焦点があるのに対し、「～くだる」は移動の過程(経路)に焦点があることが指摘できよう。

表 4-14　「～くだる」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

基本義の具体例
かけくだる　攻めくだる　逃げくだる　馳せくだる

4.1.6.2「～くだる」の多義的別義―〔2〕

(99) 灯は明々と壁を泄れ、木魚の音も山の空気に響き渡って、流れ下る細谷川の私語に交って、一層の寂しさあわれさを添える。

(島崎藤村『破戒』)

における「～くだる」は＜動作主の移動の過程に焦点を当てた＞＜川の流れに従って下流へ移動する動作＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜動作主の移動の過程に焦点を当てた＞＜下方への移動行為＞という意味特徴と類似していることにより意味拡張したもので、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

重力によって、ものは「上」から「下」へと移動する。水の流れも同じように、水流の力により、「上流」から「下流」へとものは流れる。したがって、「のぼる」ことは「上」や「上流」へ移動することであり、重力や水の流れに逆らった動きである。同様に、「くだる」ことも「下」や「下流」へ移動することで

あり、重力や水の流れに従った動きである。このように「のぼる」ことは比較的労力を伴うことであり、「くだる」ことは比較的労力を伴わないことである。上述のような類似性により、この「～くだる」の多義的別義〔2〕が派生したと思われる。

表 4-15　「～くだる」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔2〕の具体例
漕ぎくだる　流れくだる

4.1.6.3「～くだる」の多義的別義—〔3〕

(100) しかし源氏は、ただの臣下ではなく、準太上天皇という身分なのであるが、姫宮の身分の方を上にしてへりくだったのだった。

(田辺聖子『新源氏物語』)

における「～くだる」は＜動作主の移動の過程に焦点を当てた＞＜社会的地位を下方へ降下させる動作＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜動作主の移動の過程に焦点を当てた＞＜下方へ移動する動作＞という意味特徴と類似していることにより意味拡張したもので、メタファー的関係により派生した多義的別義である。空間上の下降から社会的地位上の下降へと転換されたもので、具体的な空間における上下移動という根源領域から抽象的な社会地位における上下移動という目標領域へと写像したものである。

同じ動作主の地位の下降を表している「成り下がる」における「～さがる」との違いは、「～くだる」のほうが動作性、意志性が強いことが挙げられる。「～さがる」は地位の変化に焦点があるのに対し、「～くだる」は地位の下降過程に焦点がある。そのため、「～くだる」は動作性と意志性が強く、「へりくだる」の場合、自らの意志で地位を下降させる動作を表現する。反対に、「成り下がる」の場合は自身の意志とは関係なく相手の自身に対する評価が下降することを表す。

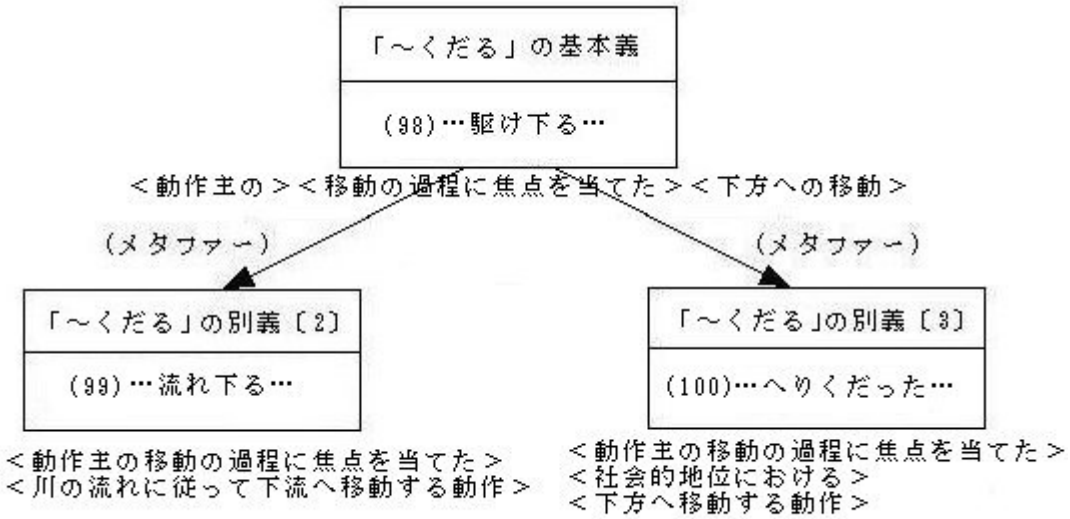
表 4-16　「～くだる」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔3〕の具体例
へりくだる

4.1.6.4「～くだる」の多義構造

以上、「～くだる」について意味分析した、その結果「～くだる」には、①過程に焦点を当てた動作主による下方へ位置移動する動作、②川の流れに従って下流へ移動していく動作、③自身を卑下すること、という三つの意味があることがわかった。最後に、分析によって明らかになった下降方向を表す複合動詞の後項動詞「～くだる」の表す複数の概念を統括する多義構造を図 4-11 として示す。

図 4-11　「～くだる」の多義構造



4.1.7「～くだす」の意味分析

4.1.7.1「～くだす」の基本義

(101) 唾液をしぼり出しては、飲み下す。くりかえしているうちに、唾液が糊のようにねばって、喉にからみだした。　(安部公房『砂の女』)

における「～くだす」は＜対象の移動の過程に焦点を当てて＞＜下方へ移動させる動作＞という意味特徴によって形成される概念を表し、基本義となる。

「飲み下す」は「飲む」より、ゆっくりと下降していく動作であると感じられ、その下降の経路も焦点化される。「薬を飲み下す」は「薬を飲む」よりも口からのどを通って胃にいたる過程が聞き手に意識されるのである。

表 4-17　「～くだす」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

基本義の具体例
飲みくだす

4.1.7.2「～くだす」の多義的別義—〔2〕

(102) さいしょ、一気に<u>読みくだした</u>とき、私の目に灼きついたのは、終りのカヨという二字だけであった。　(三浦哲郎『忍ぶ川』)

における「～くだす」は＜対象の移動の過程に焦点を当てて＞＜視線を下方へ移動させる動作＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜対象の移動の過程に焦点を当てて＞＜下方へ移動させる動作＞という意味特徴と類似していることにより意味拡張したもので、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

このような視線の下降を表す「～くだす」と「～おろす」の違いは、前者が視線移動の経路に焦点を当てているのに対し、後者は視線移動後の結果に焦点がある。そして、「～くだす」は視線移動の経路に焦点があるため、視線が比較的ゆっくりと下降するように感じられると思われるのである。

表 4-18　「～くだす」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔2〕の具体例
見くだす　読みくだす

4.1.7.3「～くだす」の多義的別義—〔3〕

(103) この五月、康子に呼出されてホテルのロビイで会ったとき、彼女は貧乏学生を<u>見下す</u>ような言い方をしたものだった。

(石川達三『青春の蹉跌』)

のような「～くだす」は＜対象の移動の過程に焦点を当てて＞＜社会的・個人的な評価を＞＜下方へ移動させる動作＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは多義的別義〔2〕の＜対象の移動の過程に焦点を当てて＞＜視線を下方へ移動させる動作＞という意味特徴と類似していることにより意味拡張したもので、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

(103)文中の「見下す」は多義的別義〔2〕の「見下す」とは違い、空間領域において視線を下降させるのではなく、相手に対する社会的・個人的評価を下降させる概念を表すものである。また、「見くだす」と「見さげる」、「見おろす」の違いは前にも述べたが、さらに補足すると、「見くだす」は動きの過程に焦点があるため、最も動作性が強い。そのため、「見くだした人」といえば「見くだす」という動作をした人を指す。一方、「見さげた人」といえば見さげられた対象を表す。「見下げる」とは、ある人に対して何らかの肯定的な評価や期待を持っていたが、その人が自分の期待の反することをしてしまったときなどにその人に対する肯定的な評価を自分が心の中で設定していた程度より下に設定しなおすことである。「見くだす」にはこのような「見下げる」が表す「対象に対する事前の肯定的な評価や期待」がなく、相手に対する一方的で理由のない偏見や差別感情などにより、初めから対象を下に見ている感が強い。以上の「見くだす」、「見さげる」に対して「見おろす」は評価を下降させるのではなく、視線によって表される空間の上下関係から他人に対する優越感へと変化したものだと思われる。

表 4-19　「～くだす」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

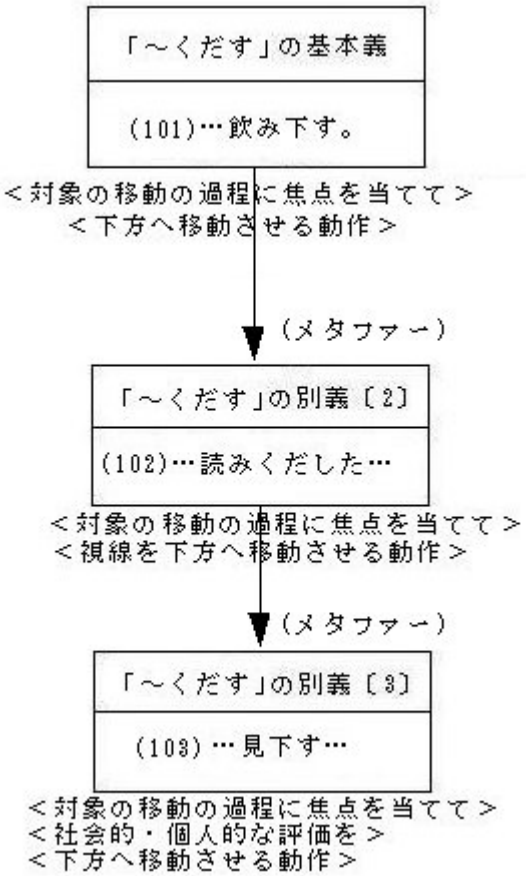
多義的別義〔3〕の具体例
見くだす

4.1.7.4「～くだす」の多義構造

以上、「～くだす」について意味分析した結果、「～くだす」には①過程に焦点を当てて対象を下降させる行為、②過程に焦点を当てて視線を下降させる行為、③対象を下に見たり、軽蔑したりする評価を下降させる動作、という主

に三つの意味があることを明らかにした。最後に、分析によって明らかになった下降方向を表す複合動詞の後項動詞「～くだす」の複数の意味を統括する多義構造を図 4-12 として示す。

図 4-12　「～くだす」の多義構造



4.1.8「～おちる」の意味分析

4.1.8.1「～おちる」の基本義

(104) 広場に面したガラス張りがいっせいに<u>崩れ落ち</u>、ガラスの破片が突風とともにわれわれの上に吹きつけた。　(三浦哲郎『忍ぶ川』)

における「～おちる」は＜対象物が元の位置から離れて＞＜自然の重力により＞＜加速度的に一挙に下方へ移動して移る動作＞という意味特徴によって形成される概念を表しており、基本義である。

森田(1979[61])は「おちる」の意味を、「ある位置(上の位置)を占めていたものが、何かの理由、他の力によってそこから離され、行き着くところ(下端)まで一挙に移ること」と解釈し、ある位置から離れる作用は意志的な行為ではないと述べた。また、下降のなかでも何かに伝わったり、落下速度を弱める逆の力が働いたりする場合は「落ちる」とは言わないという。その例としてパラシュートでの降下をあげ、「*パラシュートで落ちる」は不自然で「パラシュートでおりる」が自然であるのは、意志的かどうかによるものだという。しかし、森田のこのような分析では説明できない表現も存在している。例えば、「桜の花びらが舞い落ちる」における「おちる」は森田のいうような、行き着くところまで一挙に移ることに当てはまらないのは、前項動詞の「舞う」が表す概念による。すなわち、「舞う」という概念が「何かが美しい動きを見せながらゆっくり動く動作」を表すために、「落ちる」の概念が示す「行き着くところまで一挙に移る動作」を妨げるためである。そのため、「花びらが舞い落ちる」全体で、「花びらがまるで人が美しい動きによって喜怒哀楽を表現するため舞っているかのようにひらひらとゆっくり下方へ落下するさま」という概念を表すのである。このため、「舞い落ちる」の場合は、前項動詞の表す概念が後項動詞の表すもともとの概念を妨げて、削ぎ落とす働きを示すことが観察できよう。

また、次のような例を見てみよう。

(105) 風船が空から降りてきた。

(106) 風船が空から落ちてきた。

における(105)文では、風船は空気が入ったもので浮力が働いているため、ゆっくりと「おりてくる」のである。一方、(106)文における風船は破れて空気が入っていない状態の風船で、自然の重力によって速く「落ちてくる」のである。こうして考えると、「おちる」と「おりる」の違いは、その下降が意志的であるかどうか、そして自然であるかどうか、に加えて、その動作がゆっくり移行して位置の移動が緩慢であるのか、あるいは、一挙に下降して位置を移動するのが速いか、によって意味が分かれるのだということがわかる。

また、「生まれ落ちる」は前項と後項が結合してから新しく「この世に生ま

[61] 森田良行(1979)　前掲書　p.132-p.133

れる」という意味ができたものであり、後項動詞の「おちる」に「この世に生まれる」という意味は含まれていない。したがって、「生まれ落ちる」における「～おちる」は多義的別義ではなく基本義に含まれる。

表 4-20　「～おちる」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

基本義の具体例				
溢れおちる	生まれおちる	きれおちる	崩れおちる	こぼれおちる
転がりおちる	転げおちる	転びおちる	滴りおちる	滑りおちる
ずりおちる	ちぎれおちる	ちりおちる	つたいおちる	伝わりおちる
流れおちる	なだれおちる	抜けおちる	ぬげおちる	はげおちる
外れおちる	離れおちる	ふりおちる	舞いおちる	群がりおちる
燃えおちる	漏れおちる	焼けおちる		

4.1.8.2「～おちる」の多義的別義—〔2〕

(107) 信長は身一つで血路をひらき、やっと尾張に逃げ落ちたが、対岸の美濃では羅刹に追われる地獄の亡者のように織田兵が逃げまどって惨澹たる戦況になっている。(司馬遼太郎『国盗り物語』)

における「～おちる」は＜動作主が命を守るため＞＜勝負に負けた位置から離れて＞＜別の場所へとひそかに素早く移動して後退する水平移動の行為＞という意味特徴によって形成される概念を表している。

これは基本義の＜動作主が元の位置から離れて＞＜下方へ移動する＞という意味特徴と共有できる意味特徴が少ない。そのため、周縁的な意味概念を表していることが分かる。＜戦いに負けて敗走する＞ことは、概念メタファーによれば、＜下＞に属する概念である、加えて、「にげる」が＜敗走して後退する行為[62]＞を表すので水平的な後退を表すのである。

『広辞苑』や『大辞泉[63]』、『大辞林[64]』では「にげおちる」に＜ひそかに＞という意味特徴が与えられている。これは「にげおちる」という複合動詞の概

[62]『広辞苑　第 5 版　CD-ROM 版』(2000)　岩波書店
[63]『大辞泉(デジタル大辞泉)』http://www.japanknowledge.com/
[64]『三省堂　Web Dictionary』http://www.sanseido.net/

念を形成する意味特徴の一つである。そして、前項動詞「にげる」よりも後項動詞の「～おちる」によってその「ひそかに」の意味が含められる。すなわち、もともとの動詞「おちる」の概念が、＜ひそかにのがれる＞の意味を表すからである[65]。

姫野(1999)は「～おちる」に一つの意味しか与えていないが、「にげおちる」における「～おちる」は垂直方向の下降ではなく、実際的な敗走行為による下降状態への移行であるため、基本義ではなく、多義的別義であると判断するのが妥当だと思われる。

表 4-21　「～おちる」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

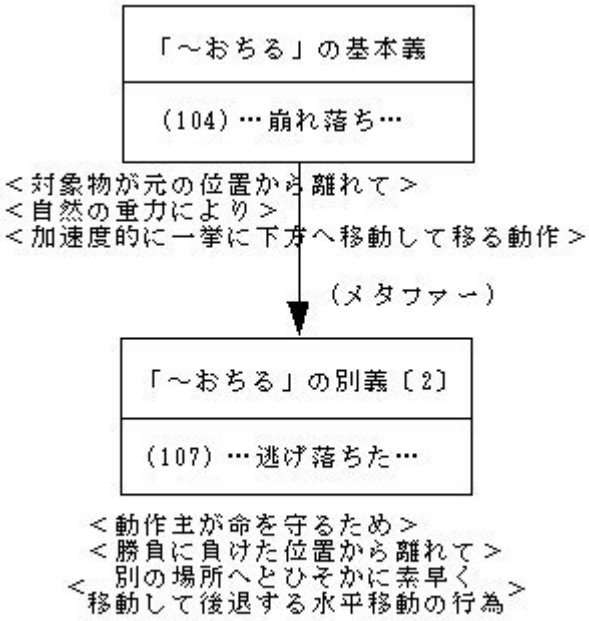
多義的別義〔2〕の具体例
にげおちる

4.1.8.3「～おちる」の多義構造

以上、「～おちる」について意味分析した結果、「～おちる」には①加速度的に下方へ落下する、②敗走行為という別の場所へ素早くひそかに移動して後退する水平移動の行為、という二つの意味があることを明らかにした。また、多義的別義〔2〕は基本義とのメタファー的関係により派生したものであるということも判明した。最後に、分析によって明らかになった下降方向を表す複合動詞の後項動詞「～おちる」の複数の意味を統括する多義構造を図 4-13 として示す。

[65]『広辞苑　第 5 版　CD-ROM 版』(2000)　岩波書店

図 4-13　「～おちる」の多義構造



4.1.9「～おとす」の意味分析

4.1.9.1「～おとす」の基本義

(108) 信夫は、虎雄と物置の屋根の上で、言い争って突き落とされた日のことを、懐かしく思い出した。　(三浦綾子『塩狩峠』)

における「～おとす」は＜対象に何らかの力を加えることによって＞＜元の位置から離して＞＜下方へ加速度的に移動させる動作＞という意味特徴によって形成される概念を表し、基本義となる。

(109) 夏のあいだ水泳からかえった客が、体についた砂を洗いおとすためのシャワーがその水槽から下っている。　(三島由紀夫『金閣寺』)

における「～おとす」は＜対象に何らかの力を加えることによって＞＜対象の一部分、あるいは全てを下方へ加速度的に移動させる行為＞という意味特徴によって形成される概念を表している。そして、上記の(109)文中の「洗いおとす」の概念を支える意味特徴は、＜体についた砂を＞＜水の力を加えることによって＞＜下方へ洗い流しながら位置を移動させる動作＞という意味特徴の組み合わせで形成されていることがわかる。

表 4-22　「～おとす」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

基本義の具体例				
洗いおとす	射おとす	うちおとす	生みおとす	掻きおとす
刈りおとす	切りおとす	蹴おとす	蹴りおとす	こきおとす
剃りおとす	叩きおとす	突きおとす	つりおとす	投げおとす
はたきおとす	はらいおとす	引きずりおとす	吹きおとす	ふりおとす
ふるいおとす	ほうりおとす	揺すりおとす	揺りおとす	

4.1.9.2「～おとす」の多義的別義—〔2〕

(110) あるものは建物の古びたペンキをへらのようなもので削り落とし、あるものは前庭の雑草を抜き、あるものは家具の修理を引き受け、あるものは荷車を引いて丘の下に配給食料を取りに行った。

(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)

における「～おとす」は＜ある固体の一部分を＞＜少しずつそいで取ると同時にそれを＞＜加速度的に落下させる行為＞という意味特徴で形成させる概念である。そのため、「削る」「そぐ」「こする」「こそげる」などの行為を表す動詞と共起して用いることができる固体を対象物として限定する用法である。また、固体全体が下方へ加速度的に落下するのではなくて、「削り落とされた薄いもの」や「こすりおとされた薄く小さいもの」などの「薄くて、小さくて、軽いもの」を下方へ落下させるために、その落下する速度が、固体全体が加速度的に落下するよりも、ゆっくりした動作になるのは否めない。また、この「～おとす」はもともとの対象物である固体の一部分だけを固体からそいで取った結果、固体から離れさせると同時に下方へ移動させる行為である。そのため、もともとの起点には離れて落下した一部分を除いた残りの部分が残留している状態を示す。その点が前項の、例えば、「突き落とす」の示す概念とは意味的に異なる点であろう。

表 4-23　「～おとす」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔2〕の具体例
削りおとす　そぎおとす　こすりおとす　こそげおとす

4.1.9.3「～おとす」の多義的別義—〔3〕

(111) この山頂に城をつくれば、百万の敵がふもとをかこんでも、攻めおとせないであろう。　(司馬遼太郎『国盗り物語』)

における「～おとす」は＜対象を元の位置から引き離して＞＜自分の支配できる状態へ移行させる＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜対象に何らかの力を加えることによって＞＜元の位置から離して＞＜下方へ加速度的に移動させる行為＞という意味特徴を共有することがわかる。また、「戦いに負ける」ことはすなわち勝者の支配下にある範囲領域へ実際的に移動させられることを指す。そのため、具体的な空間における上下移動という根源領域から支配—被支配の人間関係における上下移動という目標領域へと写像されたものであり、基本義とのメタファー的関係により派生した多義的別義である。

我々人間は生活の経験上、何らかの目的のために空間的に高いところに位置するものを落とした場合、そのものは高い所から落ちて、低いところへ到達するだけでなく、最終的には自分の手に入ることが予想される。例えば、木に生っているりんごを揺り落とす場合や獲物の鳥を射落とす場合などである。そして、このような物理的な空間上の上位のものだけでなく、「自分が支配したいもの」を手に入れるためには、そのものに直接的に圧力を加えることによって「～おとす」のである。上記の(111)文中の「攻めおとす」の場合は、「武力を用いて相手に直接攻撃を加えた戦いに勝って、自分の支配下に組み入れる行為」で持って「おとす」場合を表現している。また、人、特に好きな女性を自分の支配できる状態へ移行させるためには、「口説く」という手段で「おとす」必要があるし、相手の権力の象徴である城を自分の支配できる範囲へ移行させるには「攻める」という手段で「おとす」必要がある。下の例の「競り落とす」のように、目当ての商品などを自分の支配領域へ移行させるために、「競る」と

いう手段で「おとす」必要がある。

(112) 威勢のいい「ええか、ええか」のかけ声のもと、袋の中で指を握りあって値を伝える独特の「袋競り」で、次々にフグが競り落とされていった。 (朝日新聞記事データベース 2004)

下の図 4-14 の(a)、(b)、(c)はそれぞれ「占有したい目標」の例として「好きな女性」を、「支配したい目標」の例として「相手の権力の象徴である城」を、「所有したい目標」の例として「目当ての商品」を、それぞれ「おとす」という、「目標」、「手段」、「おとす」の相互関係を示す。

図 4-14「対象を自分の支配領域へ移行させる」という意味を表す「～おとす」

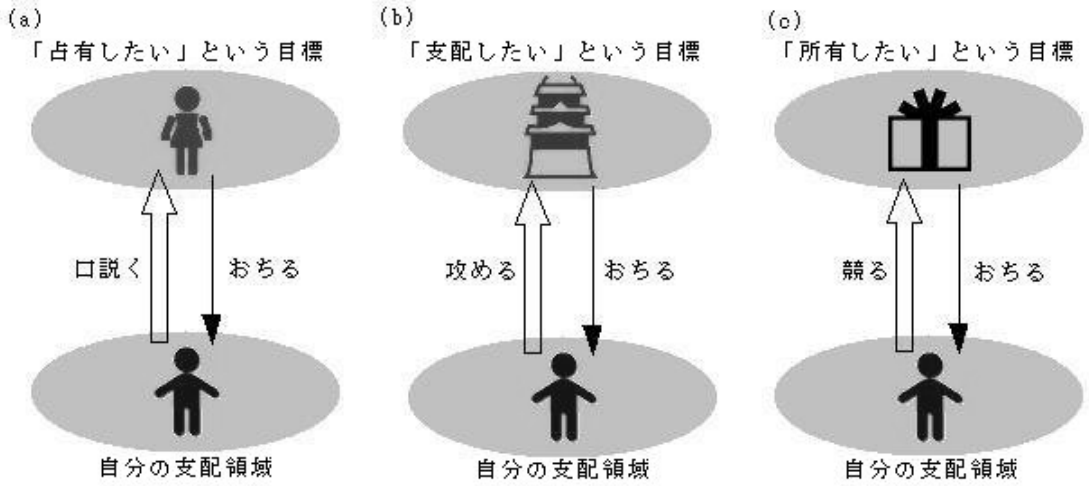


表 4-24 「～おとす」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔3〕の具体例
口説きおとす　攻めおとす　責めおとす　説きおとす 泣きおとす 競りおとす

4.1.9.4「～おとす」の多義的別義—〔4〕

(113) 大企業が作製した紙の 2 次元図面を情報の媒体に、熟練した職人が豊富な経験を基に精密な試作・金型製作をこともなげに終えてしまう。だが、せっかく 3 次元で描いたデータも平面図に書き落とす手間が 2 度伴う。

(日経産業新聞[66])

における「～おとす」は＜情報を移行して＞＜別の形に書き換える行為＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜対象に何らかの力を加えることによって＞＜元の位置から離して＞＜下方へ加速度的に移動させる動作＞という意味特徴と類似していることにより意味拡張したもので、メタファー的関係により派生した多義的別義である。具体的な空間における物体の下方への加速度的な移動という根源領域から抽象的な情報を移動させるために書き換えるという動作を示す目標領域へと写像したものである。

(113)文中の「～おとす」は二次元図面で指示されていることを媒体にして、熟練工は問題なく仕事を済ますことができるが、ハイテク技術を用いて描いた三次元の図面では役に立たない。熟練工が実際に仕事を完了させるには、三次元図面を、もう一度、役に立つ二次元図面に書き換えなければならない。この場合、三次元図面というハイテク技術を駆使して描いた「高い」レベルのものは実際の現場では役に立たないために、「低い」レベルの二次元図面に書き換えねばならないという、手間と時間が二倍もかかることを皮肉だと指摘しているのである。そのため、この高いレベルの三次元図面から低い二次元図面への書き換えは情報内容をそのままにして形式を下方へ移動させる行為を表すのである。

「～おとす」の基本義である「落下させる」という概念は、対象を自然の重力に任せて下降させることであるが、この多義的別義〔4〕の「～おとす」も移行させる対象である情報に対して、記録の形式を変えることはあっても、その内容に手を加えて変更することなく移行させることであり、両者の類似点が見出される。形式を変える際に、「高いレベルの三次元図面」から「低いレベルの二次元図面」に書き換える必要があることに依拠して、「高い」レベルから「低い」レベルへの素早い移行に上下関係における情報の位置移動を見出すことができる。

また、前に述べた「～おろす」の多義的別義〔4〕は＜個人の脳裏にある構想を＞＜思考領域から現実領域へ移動させる＞という意味特徴によって形成され

[66] 丹治信広「デジタルマイスターの挑戦」
http://www.nikkei.co.jp/topic/tokushu2/eimi039525.html (2008/3/26 にアクセス)

る「構想を実現化する」という概念を表し、脳裏で考え出したものを実現化するものである。これに対して、上記(113)文中の「～おとす」の意味が異なることは明らかであろう。また、「～おろす」における移行の対象がまだ実現化されていない脳内の構想であるのに対し、「～おとす」における移行の対象は例(113)のようにすでに実現化されているものである場合が多い。また、下記の(114)文例中の「書き落とす」は聴覚でとらえた目に見えない音楽を譜面に書き移すことを指す。この場合はある人の記憶から別の人の記憶へと移動させて守ってきた民族音楽を、人の記憶が貯蔵されている脳というその位置(上部)から譜面(下部)へ移して保管する行為を指す。すなわち、民族音楽の保管場所が人間の脳のみならず、譜面への領域へ拡張していることを示す。

(114) 17 歳になる頃には民俗音楽を譜面に書き落とすことをはじめ、その後 1942 年に農場に移り住むと本格的にその作業に取り組みました[67]。

表 4-25　「～おとす」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔4〕の具体例
書きおとす　描きおとす

4.1.9.5「～おとす」の多義的別義—〔5〕

(115) さらに、被告人が被害児をあやそうとして取り落とすというのも、本当に乳児をあやそうとするのであれば、取り落とすことのないように注意して抱き上げるのが当然であって、他の 2 回の契機についての供述の不自然さを併せ考慮すると、単なる言い逃れとしか言えないものである。　(MSN 産経ニュース[68])

における「～おとす」は＜取るのに失敗して＞＜意図せずに対象を下方へ加速度的に移動させる＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜対象を自然の重力により＞＜下方へ加速度的に移動させる＞と

[67] 「ゲイル・トヴェイト（Geirr Tveitt）生誕 100 年」
http://www.norway.or.jp/news_events/2008/geirrtveitt.htm　(2008/3/26 にアクセス)

[68] 「『辻褄あわせ不自然な供述』　光市検察側弁論要旨（６）」
http://sankei.jp.msn.com/affairs/trial/071018/trl0710181957015-n2.htm　(2008/3/28 にアクセス)

いう意味特徴と類似していることにより意味拡張したもので、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

この多義的別義〔5〕は基本義と同じく「落下させる」ことを表す。しかし、基本義は動作主が意図的に対象を落下させることを表すのに対し、「取りおとす」、「拾いおとす」などにおける「～おとす」は、動作主が意図せずに対象を落下させてしまうことを表す。両者は「落下させる」動作を行う動作主に意志性があるかどうかという点で異なることが指摘できよう。この「～おとす」の多義的別義〔5〕は従来の辞書類には記載されてこなかった用法だが、杉村(2005[69])がコーパスによる分析でこの意味の存在に気づいて指摘した。本稿はこの杉村(2005)が提起した意味を認め、かつその意味派生のプロセスを改めて説明したのである。

基本義の「～おとす」が「～ておとす」と言い換えられるのに対し、多義的別義〔5〕の「～おとす」は「～するのに失敗しておとす」と言い換えられる。要するに、前者の場合、動作主の動作が目標を達成した後に対象が落下したが、後者の場合は動作が目標を達成せずに対象が落下するのである。したがって、両者は明らかに違う意味であると判断できる。

表 4-26　「～おとす」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔5〕の具体例
掴みおとす　取りおとす　捕りおとす　拾いおとす

4.1.9.6「～おとす」の多義的別義—〔6〕

(116) 伊木は油井の言葉に狼狽して、そのときの朝子の表情を<u>見落した</u>。

(吉行淳之介『砂の上の植物群』)

における「～おとす」は＜意図せずに＞＜情報を脱落させる＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは多義的別義〔5〕の＜意図せずに＞＜対象を加速度的に落下させる＞という意味特徴と類似していることにより

[69] 杉村泰(2005)「コーパスを利用した日本語の複合動詞「-忘れる」、「-落とす」、「-漏らす」の意味分析」　『日語教育』 第 34 輯　韓国日本語教育学会

意味拡張したもので、メタファー的関係により派生した多義的別義である。具体的な物体の落下という根源領域から抽象的な情報の落下という目標領域へと写像したものである。この多義的別義〔6〕が基本義からではなく、多義的別義〔5〕から派生したと判断できるのは対象の落下が動作主の意図によるものではなく、無意識的に脱落させる行為を示しているからである。なお、この多義的別義〔6〕において脱落させる対象は具体的なものではなく、抽象的な情報・心理・感情である。人間が情報を発信したり、受信したりするときに、無意識に情報を脱落させることを「～おとす」という空間的な概念を用いて表現したのである。

この多義的別義「6」の「～おとす」と同じように「情報の脱落」を表す後項動詞に「～もらす」、「～のがす」、「すごす」、「～わすれる」がある。これらの類義表現についての先行研究は「～おとす」と「～もらす」について言及した森田(1979[70])や「見おとす」、「見すごす」、「見のがす」を比較した長嶋(2003[71])、「～わすれる」、「～おとす」、「～もらす」についてコーパスとアンケート調査を用いて、その使い分けを分析した杉村(2006[72])がある。

森田(1979)は「～おとす」の意味について、「ぼんやりしていたり、不注意・うっかりなどが原因で知らぬ間にその行為を怠っているような場合によく用いる。無意識の失敗である」と述べ、「～もらす」については、「注意し努力していたにもかかわらず、その対象をとらえることにしくじる場合」であると分析した。

長嶋(2003)は非意図的な認知の欠如を表す「見おとす」、「見すごす」、「見のがす」について、「見おとす」は「対象の存在に気づかない」ことを表し、「見すごす」は「対象が特別の条件に合っていることに気づかない」ことを表し、「見のがす」は「主体が積極的に対象を捉えようとしているが何らかの事情で捉えられない」ことを表すのだと分析した。

杉村(2006)は「～忘れる」は「他動詞行為の失念」を表し、「～落とす」は「視

---

70 森田良行(1979)　前掲書 p.135-p.136

71 柴田武、長嶋善郎、浅野百合子、国広哲弥、山田進(2003)『ことばの意味〈3〉辞書に書いてないこと』　平凡社　p.58-p.65

72 杉村泰(2006)「複合動詞「－忘れる」、「－落とす」、「－漏らす」の用法」　『日語学習与研究』　2006 年第 4 期（総第 127 期）中国日語教学研究会、対外経済貿易大学

覚や言語生活に関する行為の『結果』の失敗」を表し、「～漏らす」は「打倒行為[73]や言語生活、取得に関する行為の『結果』の失敗」を表すと指摘した。また、「～忘れる」は「その行為自体を怠ることに重点のある表現である」のに対し、「～落とす」は「その行為には取り掛かったものの意図する結果まで到達しなかったことを表す点に重点のある表現であると考えられる」と述べている。

本研究において、「～おとす」と類義表現にあるとして取り上げるのは「～もらす」、「～のがす」、「～すごす」である。ではなぜ「～わすれる」を取り上げないのかというと、「～わすれる」は杉村の分析の通り、「行為そのものの失念」であり、「～おとす」、「～もらす」、「～のがす」、「～すごす」が表す「一部の情報の欠如」とは性質が異なるため、本研究の分析の対象から外したのである。

では、本研究が考える「～おとす」の意味について、既に分析したように「無意識に情報を脱落させる行為」という概念を表すものであると主張する。「～もらす」は「全体を意識して注意したのにもかかわらず一部の情報を捉え損ねる」という概念を表すものであると考える。「～のがす」は「ある特定の情報を捉えようと意識したが捉え損ねた」という概念を表すもので、「～すごす」は「情報を得たにもかかわらず、その情報が特別な条件に合っていることに気づかない」という概念を表すものであると考える。

「～おとす」は多義的別義〔5〕の「無意識の落下」から派生し、「無意識の情報脱落」を表すようになったが、ほかの類義表現との違いはその情報の脱落が「意志的なもの」ではなく、「無意識的なもの」によるものだという点にある。また、我々は抽象的な情報のやりとりを日常生活上の経験基盤に基づき、具体的な物体の受け渡しに見立てて理解することがある。例えば、「相手が差し出した言葉を受け取る」、「判決を言い渡す」、「励ましの言葉をもらった」などのような表現である。そして、「～おとす」の用法に対しても、情報のやりとりは物体の受け渡しという概念として理解されていることが根底にある。それゆえ、多義的別義〔6〕の「～おとす」は情報のやりとりの最中に、無意識的

[73] 杉村(2006)は「撃つ」、「討つ」、「打つ」などを「打倒行為」と名づけた。

に一部の情報を脱落させたことを物体の受け渡しの時に無意識的に物体を落したことに見立てて理解するという、類似性に基づいた意味関係を示す。

「～もらす」は情報を液体として理解し、全体に注意して「もらさない」ようにしたにもかかわらず、一部の液体(情報)がもれることである。このような情報を水に見立てたメタファーを液体のメタファーと呼ぶ。野村(2002[74])はReddy(1979[75])の提案した言語コミュニケーションを概念化するメタファーである「導管メタファー(conduit metaphor)」を検討し、日本語は英語と違って「言葉」を「液体」として捉える傾向が強いと指摘した。Reddy(1979)が名づけた「導管メタファー」とは次の四つの部分からなるメタファーの集まりである。

a.「言語は導管のように機能し、考えを人から人へ移動させる」

例：*Try to* get *your* thoughts across *better.*

b.「書いたり、話したりする際、我々は自分の考えや感情を言葉の中に入れる」

例：*Don't* force *your* meaning into *the wrong* words.

c.「言葉は考えや感情を内に含み、それらを相手に運ぶことにより移動が完成する」

例：*The* sentence was filled with emotion.

d.「聞いたり、読んだりする際、我々はふたたび考えや感情を言葉の中から取り出す」

例：*I don't* get *any* feelings *of anger* out of *his* words.

一方、野村(2002)によると、日本語は「言葉」を「液体」として捉え、日本語におけるコミュニケーションの概念化は次の五つの概念メタファーにまとめることができるという。

a.「言葉を話す／書くことは液体を発することである」

---

[74] 野村益寛(2002)「＜液体＞としての言葉：日本語におけるコミュニケーションのメタファー化をめぐって」 『認知言語学 II：カテゴリー化』 東京大学出版会 p.37-p.57

[75] Reddy, M.J. (1979). “The conduit metaphor: a case of frame conflict in our language about language.” In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and Thought*, p. 284-p.324. London: Cambridge University Press. [second edition in 1993 p.164-p.201].

例：言葉を漏らす。言葉を絞り出す。不満の言葉をこぼす。辛辣な言葉を浴びせる。

b.「言葉の流暢さは液体の流れの速度である」

例：淀みなく話す。言い淀む。滔々と話す。立て板に水を流すように話す。

c.「言葉の理解しやすさは液体の透明度である」

例：言葉を濁す。

d.「言葉を聞く／読むことは液体を受け入れることである」

例：言葉を汲む。言葉を聞き流す。言葉を聞き漏らす。本を読み流す。本を読み漏らす。

e.「意味が言葉になる」

例：考えが言葉になる。言葉／意味／考え／気持ちを汲む。言葉／考え／気持ちが心にしみる。

以上のように、情報の欠落を表す「～もらす」は野村がまとめた五つの概念メタファーのうちの a.「言葉を話す／書くことは液体を発することである」と d.「言葉を聞く／読むことは液体を受け入れることである」という二つの概念メタファーに基づくものであると考えられる。

「～のがす」は「ある特定の情報を捉えようと意識したが捉え損ねた」という概念を表し、情報を受け取るときにしか使えない表現である。また、捉えようとする特定の情報は動的なもので、つまり「逃げられる」可能性のあるものに限られる。

「～すごす」は「情報を得たにもかかわらず、その情報が特別な条件に合っていることに気づかない」という概念を表すのだが、これは情報を一度受け取ったのにもかかわらず、その情報がある条件に合っていることに気づかず、「とどまらせずに通過させる」ことから、この「～すごす」の多義的別義が派生したと思われる。

次に、これらの情報の欠如を表す後項動詞「～おとす」、「～もらす」、「～のがす」、「～すごす」がどのような前項動詞と結合するのかを見るために、

情報の伝達を表す動詞の中から「見る」、「言う」、「話す」、「伝える」、「聞く」、「書く」、「読む」を取り上げて、辞書[76]とインターネットの検索エンジン[77]を用いてその結合状況を調べてみた。次の表 4-27 がその結果である。

表 4-27　情報の欠落を表す後項と情報の伝達を表す前項の結合状況

	～おとす	～もらす	～のがす	～すごす
見	○	×	○	○
言い	○	○	×	×
話し	×	×	×	×
伝え	×	×	×	×
聞き	○	○	○	○
書き	○	○	×	×
読み	○	○	×	○

表における○は辞書や検索エンジンにより、その結合パターンが存在すると判断できる場合を表し、×はその結合パターンが存在しない、あるいは一般的な用法ではない場合を表す。また、「言いのがす」のように、相手に伝えた情報が欠落したという意味ではなく、言う機会を逃したという意味で使われているため、「見のがす」、「聞きのがす」とは別の意味に属すると考えたほうが妥当であると考える。同じように、「言いすごす」は存在する結合パターンだが、「度を越して強く言う」という意味であって、情報の欠落という意味ではない。「話しすごす」も誰かと話して時間を過すという意味で使われてはいるが、情報の欠落という意味では使われていない。よって、情報の欠落を表わさないこれらの結合パターンは全て×とした。

この表 4-27 の結果から次のようなことがわかる。まず、「～おとす」は従来「ぼんやりしていたり、不注意・うっかりなどが原因で知らぬ間にその行為を怠っているような場合によく用いる。無意識の失敗である」、または「視覚や言語生活に関する行為の『結果』の失敗」を表すとされてきたが、表 4-27 のように、同じ言語行動でも「話す」と「伝える」とは共起しない。これは先行研

[76] 『広辞苑』、『大辞泉』、『大辞林』を使用した。
[77] goo（http://www.goo.ne.jp/）のフレーズ検索を使用した。

究の中では論及されていない点である。ではなぜ「言う」とは結合できるのに、「話す」、「伝える」とは結合できないのかというと、「話す」と「伝える」は情報を相手に伝達することを前提にしたものなので、情報の欠落が伴いにくいのかもしれない。そのため、「独り言を言う」というように、相手がなくても成立する「言う」とは違い、表にあるように「～おとす」とだけでなく情報の欠落を表す後項動詞とは結合できないように見受けられるのである。

次に、「～もらす」は本来全体を捉えようとして、その一部を捉え損ねるという意味だが、「見る」と結合できないのはこのような「～もらす」が持つ全体を捉えようとする意識によるものだと思われる。なぜなら、「見る」ということは常になにかに焦点を当てた状態で「見る」ことであり、全体を「見る」ことは人間の視覚の構造上不可能である。自分は眼前の景色全体を見ているつもりでも焦点から離れた周辺的な所ははっきりと見ることができないからである。このような人間の生理的基盤の制約により「見る」と「～もらす」は結合できないと思われる。「話す」と「伝える」と結合できないのは先ほども述べたように、「話す」と「伝える」は情報を相手に伝達することを前提にしたものなので、情報の欠落が伴いにくいからであろうと推察する。「話す」と「伝える」は表を見てもわかるように全ての情報の欠落を表す後項動詞と結合できないのである。

また、「～のがす」は前述した通り、情報の受信に際して、ある特定の情報を捉えることに失敗したという意味であり、情報の送信には使えない表現である。したがって、情報の送信を表す前項動詞「言う」、「書く」とは結合できない。では、なぜ「～のがす」は情報の受信を表す前項動詞「見る」、「聞く」とは結合できるのに、同じように情報の受信を表す「読む」とは結合できないのかというと、「読む」対象である文字が静的なものであるため、文章のある部分が「にげる」可能性がほとんどなく、読み手が書き手の伝えたいことを捉えることに失敗することはあまり考えられないからだと思われる。

最後に、「～すごす」は「見る」、「聞く」、「読む」などの情報の受信を表す動詞とは結合できるが、「言う」、「話す」、「伝える」、「書く」などの情報の発信を表す動詞とは結合できない。

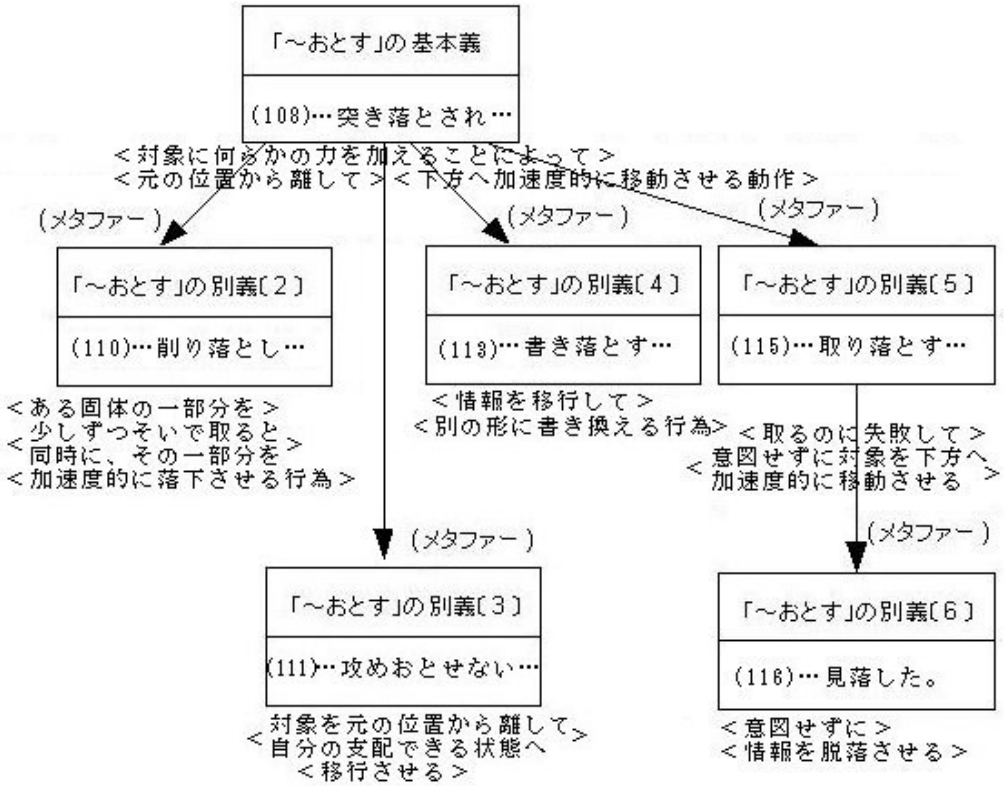
表 4-28　「～おとす」の別義〔6〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔6〕の具体例
言いおとす　書きおとす　聞きおとす　見おとす　読みおとす

4.1.9.7「～おとす」の多義構造

以上、「～おとす」について意味分析してきたが、その結果「～おとす」には、①対象に何らかの力を加え元の位置から離して下方へ加速度的に移動させる動作・行為、②固体の一部分を少しずつそいで取ると同時に、その一部分を加速度的に落下させる行為、③対象を元の位置から離して自分の支配できる状態へ移行させる行為、④情報を移行して別の形に書き換える行為、⑤取るのに失敗して意図せずに対象を下方へ加速度的に移動させる動作・行為、⑥意図せずに情報を脱落させること、の六つの意味があることがわかった。最後に、分析によって明らかになった下降方向を表す複合動詞の後項動詞「～おとす」の複数の意味を統括する多義構造を図 4-15 として示す。

図 4-15　「～おとす」の多義構造



4.2 中国語の下降方向を表す方向補語の意味分析

本節では、中国語の下降方向を表す方向補語のうち、「V 下」という形式で動詞と結びつく「～下」を取り上げる。まず、先行研究を紹介し、その問題点を挙げる。次に、「～下」について意味分析を行い、その意味派生のプロセス及び意味構造を明らかにする。

4.2.1 先行研究

「～下」は「～上」と同様に方向補語に属しており、先行研究として、まず『現代漢語八百詞』は「～下」の意味を次のように分析している。

(1)動詞＋下＋名詞

a.人や事物が動作と共に高い所から低い所へ向かうことを表す。

例：坐下、放下、流下、播下、掉下。

b.動作が完成することを表し、離脱の意味を持ち合わせる。

例：摘下、卸下、脱下。

結果を固定させる意味を持ち合わせる時もある。

例：發下、定下、攻下、打下、犯下、留下、寫下、拍下、拿下。

(2)動詞＋〔得(不)〕＋下〔＋数量＋名詞〕

一定の数量を収められる(収められない)ことを表す。

例：坐下、站下、睡下、躺下、停下、裝下、容下、盛下、放下、住下。

(3)動詞＋下＋名詞(場所)

人または事物が動作と共に高い所を離れ、低い所に到達する。

名詞が高い所を指す場合、動詞と「下」の間に「得」、「不」をつけることができる。

例：走下樓、滚下山坡、運下山。

名詞が低い所を指す場合、「得」、「不」をつけることはできない。

例：跳下水、沉下河底。

『現代漢語八百詞』における「～下」の分析の問題点としては、意味拡張のプロセスが述べられていないため、どのようにしてこれらの意味が生まれたのかがわからないという点が挙げられる。また、個々の意味分析も妥当とはいえない箇所がある。例えば、「犯下」、「留下」、「寫下」、「拿下」などの「～下」の意味を、「動作が完成し、その結果を固定させる」であると分析しているが、これらの「～下」の表す意味は「結果を固定させる」というよりは「結果を残す」といったほうが妥当だと思われる。なぜなら、「留下地址(住所を残す)」や「寫下名字(名前を書き残す)」などの例を見てもわかるように、ここにおける「～下」は結果を固定させるという意味ではなく、結果を残す、残留させることを表すのである。

次に、『現代中国語文法総覧(下)』は「～下」の意味を方向補語について分析した第 5 章の第 2 節の中で、次のように分類している。

基本義：高い所から低い所へ向かうこと。

派生的用法：

a.ある人または事物をある場所に固定させることを表す。

例：留下、寫下。

b ある物を(他のある物、場所から)離す、遠ざけることを表す。

例：摘下、脱下。

c.収めることを表す。

例：装下、坐下。

『現代中国語文法総覧(下)』は『現代漢語八百詞』とは違い、基本義と派生義とに分けたことにより、意味派生のプロセスを示しているが、その意味派生を可能にするメカニズムには言及していない。また、『現代漢語八百詞』の所でも述べたが、「留下」、「寫下」などにおける「～下」は「ある人または事物をある場所に固定させることを表す」というよりは「ある人または事物をある場所に残すことを表す」といったほうが妥当だと思われる。

最後に、于康(2006[78])は認知言語学的な手法を用いて、「どの成分が移動するか、またどのように移動するか」という基準により、「V 下」における「下」を分析し、「～下」の意味拡張のメカニズムは家族の類似性による意味拡張原理に基づくものであると主張した。〔上から下へ移動する〕〔元の位置から離れる〕〔移動の後、その移動後の位置または状態に置かれる〕といった三つの意味素性における、意味の傾斜度やそれぞれの具体的な意味内容の展開振りにより、新しい意味カテゴリーが拡張されてくるので、七つの意味カテゴリーはいずれもこの三つの意味素性をベースに、またはこの三つの意味素性との関係により拡張されてきたものになるという。また、「V 下」における「下」の意味は、動詞のタイプに大いに関係しており、その意味は動詞のタイプや対象のタイプの両方に制御されるとも述べた。以下が于康による「～下」の意味の分類である。

①動作主の下方移動 ── 動作主の物理的な下方移動　例：走下、跑下。
　　└ 動作主の心理的な下方移動　例：退下、敗下。
②動作主の躯体姿勢の位置が変化する　例：跪下、倒下、睡下、躺下、坐下。
③動作主の身体部位の位置が変化する　例：垂下、低下、蹲下、彎下、放下。
④対象の下方移動　例：投下、吃下、拿下、喝下、咽下、放下、扔下。
⑤対象が元の位置から離れる　例：脱下、摘下、換下、撕下、刷下。
⑥対象が移動し、移動した対象は動作主に所有される
　例：生下、收下、娶下、掙下、攻下。
⑦対象が出現して留まる　例：打下、惹下、剩下、省下、攢下、定下。

上述のこれらの意味が持つ意味特徴を于康は下の表 4-29 のようなチェックリストで表している[79]。

[78] 于康(2006)「“V 下”的語義擴展機制與結果義」　『中国語の補語』　白帝社 p.209-p.231
[79] 表の中の“±”については著者の説明がないが、両方考えられるということを表すと思われる。

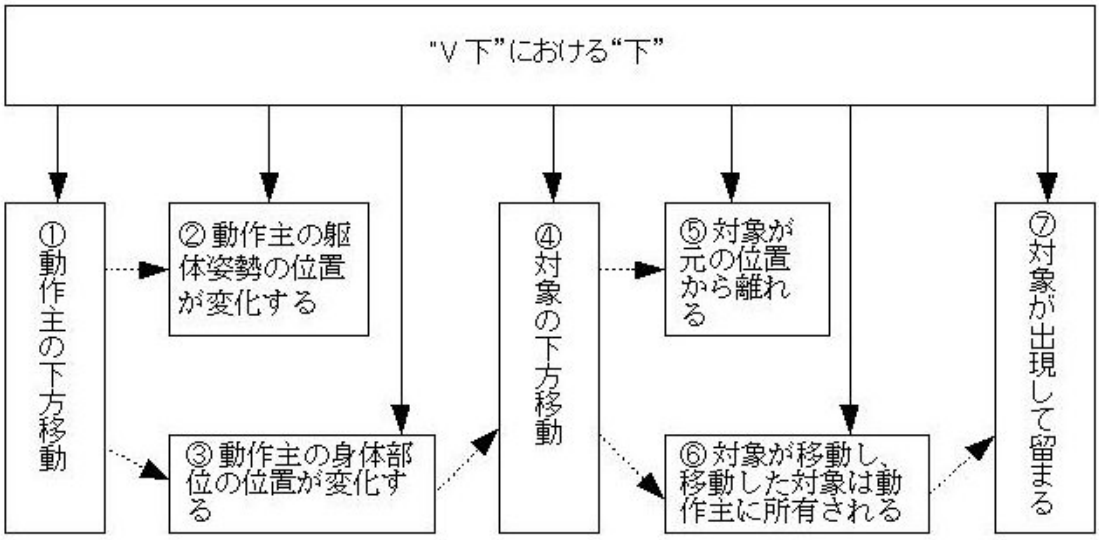
表 4-29　于康による「V 下」における「下」の意味特徴(于康 2006：227)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
〔上から下へ移動する〕	＋	＋	＋	＋	－	－	－
〔元の位置から離れる〕	＋	＋	＋	＋	＋	＋	－
〔移動した後、そのままの位置や状態にいることを保つ〕	＋	＋	＋	＋	＋	＋	－
〔動作主の全体移動〕	＋	－	－	－	－	－	－
〔動作主の身体部位の位置が変化する〕	＋	－	＋	－	－	－	－
〔動作主の躯体姿勢の位置が変化する〕	－	＋	－	－	－	－	－
〔対象の全体移動〕	－	－	－	＋	＋	＋	－
〔対象の位置変化〕	－	－	＋	＋	＋	＋	＋
〔移動した後、なにかに帰属する〕	－	－	－	＋	－	＋	－
〔対象が移動した後、動作主に所有される〕	－	－	－	±	－	＋	－
〔対象が出現する〕	－	－	－	－	－	±	＋
〔対象が出現した後、なにかに帰属する〕	－	－	－	－	－	＋	＋

また、于康はこれらの七つの意味の間の相互関係とその意味拡張のプロセスを下の図 4-16 で表している(実線の矢印は意味の従属関係を表し、点線の矢印は意味の拡張方向を表す)。

図 4-16　于康による「V 下」における「下」の意味拡張のプロセス

(于康 2006：227)



上述の分析の問題点としては、于康は「～下」の意味を「どの成分が移動するか」、つまり「動作主と対象のどちらが移動するか」によって大きく分けているが、このように区別する必要はないと思われる。なぜなら、動作主の移動か対象の移動かは結合する前項の動詞によって決定されるのであって、方向補語の「～下」によるものではないからだ。「～下」の持つ意味は「どの成分が移動するか」を指示するほどの具体的なものではなく、もっと抽象的なものであると思われる。

次に、于康の意味分析だけでなく、先行研究の全てにいえることだが、例が少ないという問題点がある。特に学習者にとっては例が少ないと結局新しい語に出会ったとき、その語が一体どの意味に属するのかがわからないということがよくある。

さらに、先行研究の中で、全く提起されていない「～下」の意味も存在する。「停下車(車を止める)」、「静下心(心を静める)」、「穏下心情(気持を落ち着かせる)」などのような「～下」は「安定させる」という概念を表し、先行研究で挙げられている意味のどれにも当てはまらないものである。

以上の先行研究とその問題点を踏まえた上で、次節より中国語の「～下」の意味分析を行うことにする。

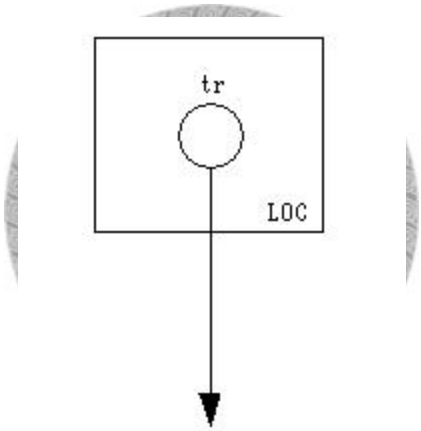
4.2.2 中国語の「V 下」における「～下」の意味分析

4.2.2.1「～下」の基本義

(117) 他面色蒼白著，步履蹣跚地走下樓梯，差點沒滑倒。(「研究院語料庫」)
(彼は顔面蒼白で、よろよろと階段を下りてきて、もう少しで滑り落ちそうになった。)

における「～下」は空間的下降を表す。このような具体的な空間概念は「～下」の基本義であり、＜現実空間における＞＜上方から離れて＞＜下方へ移動する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。イメージスキーマに表すと図 4-17 のようになる。

図 4-17　「～下」のイメージスキーマ(tr：トラジェクター、LOC：場所)



「～下」のイメージスキーマには起点となる領域が含まれているが、着点となる領域は含まれていない。これは「V 下」と結びつく場所名詞のほとんどが起点となることからでもわかる。「跳下車(車から飛び降りる)」　、「滾下山(山から転げ落ちる)」などのように普通「V 下」と結びつく場所名詞は起点である。では、着点となる場合の場所名詞は何であるのかというと、「跳下海(海に飛び降りる)」、「掉下陷阱(罠に落ちる)」などである。方(2004[80])はこのような場所名詞を「凹面名詞」と名付け、「移動主体の立地点より低い位置にあるところという共通点を持つ」という。しかし、この定義ではうまく説明できないことがある。それは移動主体の立地点が与えられていないのにもかかわらず、我々

[80] 方美麗(2004) 『「移動動詞」と空間表現—統語論的な論点から見た日本語と中国語』 白帝社

は「V 下」と接続する「海、河、水、陥阱、井」などの場所名詞を起点ではなく着点であると判断できるという問題である。「V 下」と結びつく場所名詞は普通起点となる。では、どのような場合において場所名詞が着点になるのか。それはその場所が「下」という動作の起点になれない場合、すなわち、その場所から「離脱」して、さらに「下降」することができないと認識される場合である。「陥阱」や「井」は我々の日常常識に基づいて判断すればこれ以上「下降」することができない場所である。そのため「下」と結びつくときは起点にしかなれない。一方、 「海、河、水」などはさらに「下降」することができるが、その場所から「離脱」できない。そのため、これらの場所名詞は着点を表すほかに、「潛下海」のように「経路」となるが、起点にはなれないのである。

表 4-30 「～下」の基本義を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

基本義の具体例											
跑下	跳下	掉下	走下	爬下	衝下	躍下	摔下	滾下	奔下	跌下	墜下
滴下	上下	撒下	生下	喝下	彎下	扔下	抛下	灑下	吃下	搬下	扯下
抓下	攝下	灌下	澆下	刺下	卸下	吞下	踢下	沖下	按下	服下	拿下
流下	抬下	播下	推下	擺下	投下	壓下	拉下	踏下	射下	砍下	嚥下
揮下	伸下	趕下	插下	嚐下	搖下	吹下	產下	栽下	跨下	救下	敲下
勾下	載下										

4.2.2.2「～下」の多義的別義—〔2〕

(118) 運動場地下停車場，約有七百五十個車位，由於使用執照尚未發下，所以目前僅開放校內員工試用，暫不收費。 (「研究院語料庫」)

(運動場の地下駐車場は約七百五十の収容台数があるが、使用の許可証がまだ下りていないため、現在の段階では学校の職員だけに実験的に開放している。今のところは無料である。)

における「～下」は＜社会的な支配／被支配の関係において支配力のある方から＞＜被支配者である一般人の方へ＞＜対象を移動させる行為＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜現実空間における

＞＜上方から離れて＞＜下方へ移動する＞という意味特徴との類似性により意味拡張したものである。そして、「HAVING CONTROL or FORCE IS UP; BEING SUBJECT TO CONTROL or FORCE IS DOWN<支配力や力があることは上、支配されたり力に服従することは下>[81]」という概念メタファーにより派生した多義的別義である。また、「許可」のほかに「支配者から被支配者へと移動する」ものには、「命令、予算、法令、食料」などがあり、それらは公的機関の権限や支配の下にある対象のものが多い。

この多義的別義〔2〕は基本義の＜現実空間における＞＜下方へ移動する＞という意味特徴が表す空間的な下降という具体的で理解しやすい概念を用いて、抽象的な領域のものの下降を理解するもので、具体的な空間における上下移動という根源領域から抽象的な社会的な支配／被支配関係における上下移動という目標領域へと写像したものである。

表 4-31　「～下」の別義〔2〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔2〕の具体例
發下　佈下　傳下　撥下

4.2.2.3「～下」の多義的別義—〔3〕

(119) 鄭成功在廈門操練海軍，然後帶領大軍進攻南京，但是沒有<u>攻下</u>，只好退回廈門。　(「研究院語料庫」)

(鄭成功は廈門で海軍を鍛え、そして大軍を率いて南京に攻め入った。しかし、攻め落とすことができず、仕方なく廈門に引き返した。)

における「～下」は＜対象を元の位置から離して自分の支配できる状態へ＞＜移行させる＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは多義的別義〔2〕の＜社会的な支配／被支配の関係において支配力のある方から＞＜被支配者である一般人の方へ＞＜対象を移動させる行為＞という意味特徴と類似していることにより意味拡張したもので、メタファー的関係により派生した多義的別義である。

[81] Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. 前掲書　p.21

これは 4.1.9.3 の「～おとす」の多義的別義〔3〕の項で分析したように、人間の生活経験に基づき、空間的上方にある何かを落とすことはそのものを手に入れることでもあるからである。そして、これが抽象化という過程を経て、権力を持つ他者とその支配対象である領地と人民と資源などを「支配したい」という目標の下に武力で奪って手に入れる行為を表す。これは一見、時間的隣接関係に基づくメトニミー的関係にあるようにも思われるが、具体的な概念を用いて抽象的な概念を理解しているため、二つの異なる領域の間に写像関係があり、単一領域内でのプロファイルの移行であるメトニミー的関係ではなく、メタファー的関係に基づいた意味的な拡張を示すと判断するものである。

表 4-32　「～下」の別義〔3〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔3〕の具体例
包下　奪下　買下　攻下　打下　標下　搶下

4.2.2.4「～下」の多義的別義―〔4〕

(120) 我們隨即就把銀蛇目蝶的蝶卵連同芒草一起摘下，帶回家去飼養、觀察。　(「研究院語料庫」)

(私たちはすぐにギンジャノメ蝶の卵をススキごと摘み取り、家に持ち帰って飼って観察することにした。)

における「～下」は＜対象を元の場所から離れさせる＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは「～下」の基本義である＜現実空間における＞＜上方から離れて＞＜下方へ移動する＞という意味特徴によって表される一連の動きと「全体―部分」という意味関係にあるため、メトニミー的な関係に基づいて意味拡張したものである。この「～下」の多義的別義〔4〕は一連の動きの中で元の位置から＜離れる＞という部分に焦点を当てたものである。イメージスキーマに表すと下図のようになる。なお、下図には基本義に含まれていた「上」から「下」へという方向性がなく、単にある場所から離脱するという概念を表す。

図 4-18　離脱を表す「～下」の多義的別義〔4〕のイメージスキーマ

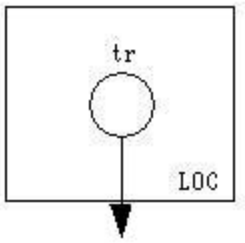


表 4-33　「～下」の別義〔4〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔4〕の具体例
擒下　割下　採下　剝下　脱下　剪下　洗下　撕下　切下　摘下　褪下　砍下 拆下　除下　拔下　退下　敗下　取下　比下　解下　換下

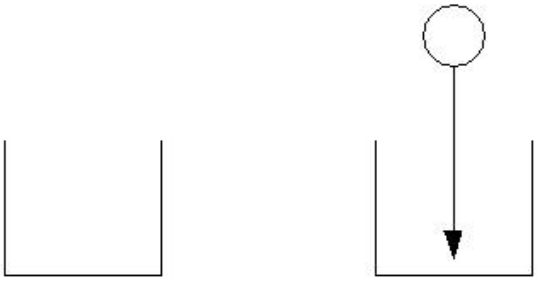
4.2.2.5「～下」の多義的別義―〔5〕

(121) 看那些人無視於垃圾的汙黑和惡臭，一包包的抬起、塞下，不久，堆積如山的垃圾就被清除乾淨了。　(「研究院語料庫」)
(見ていると、彼らはゴミの黒汚れと悪臭を無視し、一袋ずつ持ち上げて、詰め込んでいく。しばらくすると、山のように積まれていたゴミはきれいに掃除された。)

における「～下」は＜対象を＞＜境界のある空間の中に収める＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の「～下」の表す「空間的下降」がこの多義的別義〔5〕の表す何かを「収める」ことと、時間的隣接関係にあるために意味拡張したもので、メトニミー的関係によって拡張したものである。

では、なぜ「空間的下降」が「収める」ことと時間的隣接関係にあるのかというと、何かを「収める」ためには、「空間的下降」というプロセスを経る必要があるからだ。これを説明するのには、まず≪入れ物≫のプロトタイプを考える必要がある。それは下の図 4-19 の左の容器のようなものであろう。そして、その≪入れ物≫の中に何かを入れるというのは図 4-19 の右の図のように、上から下へ移動する必要がある。

図 4-19　≪入れ物≫のプロトタイプのイメージスキーマ



このように、「下降」というプロセスと「収める」という結果は時間的隣接性にあるため、メトニミー的関係である。

表 4-34　「～下」の別義〔5〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔5〕の具体例
擠下　擺下　存下　放下　收下　塞下　埋下　藏下

4.2.2.6「～下」の多義的別義—〔6〕

(122) 他從美國一家飛機製造廠退休以後，立下的另一個人生目標，就是要為中國人製造飛機。　(「研究院語料庫」)

(彼がアメリカのある飛行機製造会社から退職した後に立てたもう一つの人生の目標とは、中国人のために飛行機を作ることであった。)

における「～下」は＜動作に結果が生じ＞＜その結果が残留する＞という意味特徴によって形成される「結果の残留」という概念を表している。これは基本義の「～下」の表す「空間的下降」がこの多義的別義〔6〕の表す「結果の残留」と、時間的隣接関係にあるために意味拡張したもので、メトニミー的関係によって拡張したものである。

基本義が表す「空間的下降」という概念は空間的上方から離れて下方へ移動することを表すが、その下降の結果、下方に位置するある場所へと到達する。そして、その場所にとどまる。このような時間的に連続性のあるイベントの繋がりによって「空間的下降」から「結果の残留」へと人間の推論が働く。そして、このように時間的隣接性による推論はメトニミー的関係である。

表 4-35　「～下」の別義〔6〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔6〕の具体例											
奠下	造下	闖下	劃下	印下	花下	釘下	批下	留下	寫下	錄下	畫下
闖下	定下	記下	背下	犯下	訂下	刻下	種下	定下	結下	設下	創下
簽下	譜下	烙下	立下	撇下	丟下	捉下	紮下	許下	造下	存下	拍下
做下	鑄下	遮下	攢下	撂下	舖下	空下	轟下	扣下	挖下		

4.2.2.7「～下」の多義的別義—〔7〕

(123) 結果，兩場爆滿的觀眾，使她有信心接下舞台劇演出的挑戰。

(「研究院語料庫」)

(結果として、二回の公演の満員の観客が、彼女に舞台に出演するという挑戦を引き受ける自信を与えたのだ。)

における「～下」は＜何かを負担する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。この多義的別義〔7〕の「負担する」という概念は基本義の「～下」の表す「空間的下降」と時間的隣接関係にあるために、意味拡張したもので、メトニミー的関係によって拡張したものである。

何かを「負担する」ということは、ある重さを持ったものを受け止めることである。下降してくるものは重力によって重さを帯び、受け止める人にとっては「負担」である。基本義は「空間的下降」という概念を表し、多義的別義〔7〕の表す「負担する」という概念とは、プロセスと結果という関係であり、両者は時間的隣接関係に基づくメトニミー的関係である。

表 4-36　「～下」の別義〔7〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔7〕の具体例				
接下	攬下	擔下	扛下	頂下

4.2.2.8「～下」の多義的別義—〔8〕

(124) 我們暈頭轉向，滿身大汗，即使跳得腳都抬不動了，還是不能停下休息。

(「研究院語料庫」)

(我々は目が回り、汗だくになって、踊りすぎて足が上がらなくなっても、止まって休むことはできない。)

における「～下」は＜不安定な状態から安定した状態へ＞＜移行する＞という意味特徴によって形成される概念を表している。これは基本義の＜現実空間における＞＜下方へ移動する＞という意味特徴との類似性により、意味拡張したものである。基本義の表す「空間的下降」という概念が<地に足が着くと安定する>という概念メタファーによって拡張したものである。

<地に足が着くと安定する>ということは人間の身体的基盤によって説明できる。瀬戸(1995[82])は身体と大地の関係を分析し、その関係は足と大地との関係でもあるという。我々人間は両足で大地の上に立って生活する生物である。足元が不安定だと体も不安定になり、転ぶ危険性すらある。このような足場となる大地と安定性の関係については様々な言語表現にも現れている。例えば、日本語の「足元をすくわれる」、「地に足が着く」、「浮き足立つ」、「落ち着く」や中国語の「腳踏實地」、「站不住腳」などのように、大地にしっかりと足を下ろすことは「安定」であり、そうでないと「不安定」になる。そして、「天地無用」という言葉が「上と下を逆にしてはいけない」という意味を表すように、我々人間にとって「上」は「天」と強く結びつき、「下」は「地」と強く結びつく。「下降する」ということは「地につく」ということであり、「地につく」と「安定する」のである。以上のような類似性により、<地に足が着くと安定する>という概念メタファーが成立する。

表 4-37　「～下」の別義〔8〕を後項動詞に用いた主な複合動詞のリスト

多義的別義〔8〕の具体例
停下　攔下　定下　靜下　穩下

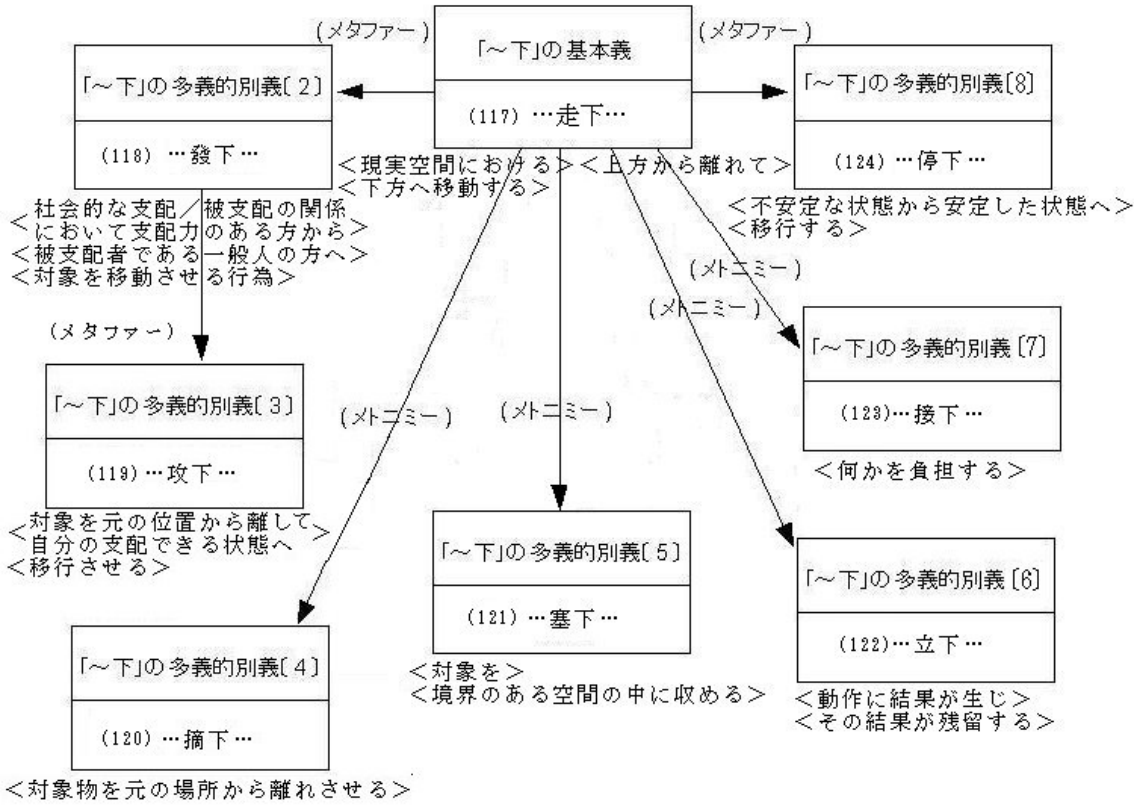
4.2.2.9「～下」の多義構造

以上、中国語の「V 下」という形式における「～下」を意味分析してきたが、その結果、「～下」には①空間的下降、 ②支配力のある方から被支配者の方へ

[82] 瀬戸賢一(1995)　『空間のレトリック』　海鳴社　p.240-p.252

対象を移動させる 、③対象を元の位置から離して自分の支配できる状態に移行させる、④対象を元の場所から離れさせる、⑤対象を収める、⑥動作に結果が生じ、その結果が残留する、⑦負担する、⑧安定する、という八つの意味があることがわかった。最後に、分析によって明らかになった下降方向を表す中国語の「V 下」における「～下」の複数の意味を統括する多義構造を図 4-20 として示す。

図 4-20　「～下」の多義構造



4.3 下降方向を表す日本語の複合動詞後項と中国語の方向補語の対照分析

下降方向を表す日本語の複合動詞後項と中国語の方向補語について、それぞれ 4.1 と 4.2 において意味分析を行った。日本語の結果は表 4-38、中国語の結果は表 4-39 にまとめた。

表 4-38　下降方向を表す日本語の複合動詞後項の意味分析結果

～さがる	①固体の一方の先端が固定され、もう一方の先端が下方へ垂れ放たれた状態・様子	基本義‐1
	②目的を変えずに離さない	基本義‐1 とのメタファー的関係により派生した別義 2
	③後退する	基本義‐2
	④序列が下方へ移動する	基本義‐2 とのメタファー的関係により派生した別義 2
	⑤中間段階において下方へ移動する	基本義‐3
	⑥地位が下方へ移動する	基本義‐3 とのメタファー的関係により派生した別義 2
～さげる	①一端が固定された状態で他の端を下方へ移動させる	基本義‐1
	②序列を下降させる	基本義‐2
	③中間段階において下降させる	基本義‐3
	④物体のある部分に形状変化を起こさせつつ下方へ移動させていく動作・行為	基本義‐3 とのメタファー的関係により派生した別義 2
	⑤所有物を社会的地位の高い方から下方へ移動させる	基本義‐3 とのメタファー的関係により派生した別義 3
	⑥地位を下降させる	基本義‐3 とのメタファー的関係により派生した別義 4
	⑦取り消す	基本義‐3 とのメタファー的関係により派生した別義 5
～おりる	下方へ位置移動する	基本義
～おろす	①下方へ位置移動させる	基本義
	②視線の位置を下降させる	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 2

	③地位を急激に下降させる	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 3
	④対象者や相手に対する評価を下降させること	別義 3 とのメタファー的関係により派生した別義 4
	⑤構想を新たに実現化する	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 5
～くだる	①過程に焦点を当てた動作主の下降	基本義
	②川の流れに従って下流へ移動する	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 2
	③自身を卑下する	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 3
～くだす	①過程に焦点を当てた対象の下降	基本義
	②過程に焦点を当てた視線の下降	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 2
	③対象を下に見たり、軽蔑したりする評価を下降させる動作	別義 2 とのメタファー的関係により派生した別義 3
～おちる	①加速度的に下方へ落下する	基本義
	②敗走行為という別の場所へ素早くひそかに移動して後退する水平移動の行為	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 2
～おとす	①対象に何らかの力を加え元の位置から離して下方へ加速度的に移動させる	基本義
	②固体の一部分を少しずつそいで取ると同時に、その一部分を加速度的に落下させる	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 2
	③対象を元の位置から離して自分の支配できる状態へ移行させる	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 3

	④情報を移行して別の形に書き換える	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 4
	⑤取るのに失敗して意図せずに対象を下方へ加速度的に移動させる	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 5
	⑥意図せずに情報を脱落させる	別義 5 とのメタファー的関係により派生した別義 6

表 4-39　下降方向を表す中国語の方向補語の意味分析結果

V 下	①空間的下降	基本義
	②支配力のある方から被支配者の方へ対象を移動させる	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 2
	③対象を元の位置から離して自分の支配できる状態に移行させる	別義 2 とのメタファー的関係により派生した別義 3
	④対象を元の場所から離れさせる	基本義とのメトニミー的関係により派生した別義 4
	⑤対象を収める	基本義とのメトニミー的関係により派生した別義 5
	⑥動作に結果が生じ、その結果が残留する	基本義とのメトニミー的関係により派生した別義 6
	⑦負担する	基本義とのメトニミー的関係により派生した別義 7
	⑧安定する	基本義とのメタファー的関係により派生した別義 8

この分析結果から導かれる結論として以下の二点が挙げられる。

(1)日本語の下降方向を表す後項動詞は異なる焦点の当て方により別々の動詞を持ち、それぞれの動詞から派生した意味も多様で、複雑な体系をな

している。一方、中国語の方は日本語のような複雑な区別はなく、「V 下」という単一の方向補語を用いる。その意味も日本語に比べると少ない。

(2)日本語の下降方向を表す複合動詞後項の中で「～さがる」は「後退」という意味に拡張する。これは中国語の V 上における上が前進という意味に拡張する際におけるメカニズムと同じ奥行きの知覚という視覚のメカニズムによるものである。しかし、中国語の V 下の意味の中には「後退」という意味は含まれていない。

結論(1)は 3.3 の結論と一致する。日本語は上昇と下降を異なる焦点の当て方により複数の動詞を持つ。中国語は日本語と違って、上昇を V 上だけで表わし、下降も V 下だけで表している。また、日本語の複合動詞後項は下降を表す方が上昇を表す方よりかなり多く、意味も多様である。それに対し、中国語の方向補語は上昇と下降をそれぞれ一つの動詞(V 上、V 下)で表わしているため、その意味は日本語ほど多様ではない。

次に、結論(2)についてだが、3.3 での結論とは正反対の結果が出ている。なぜ、結論(2)で述べてあるように、中国語の V 上には「前進」という意味が含まれているのにもかかわらず、V 下には「後退」という意味が含まれていないのだろうか。これを説明する手掛かりの一つとして、中国語のV上とV下と結びつく場所名詞の違いが考えられる。V 上と後接する場所名詞は着点にしかならないが、V下と後接する場所名詞は起点にも着点にもなれる。「走上前方」のように、上が前進という意味を表す場合、V上と後接する場所名詞は「前方」のように着点であり、上昇を表す際と同じである。だが、中国語のV下と結びつく場所名詞は「海、河、水、井、陥阱」などのような、その場所から「離脱」して、さらに「下降」することができないと認識されるものを除いて、着点ではなく、起点として判断される。そのため、後退という意味には拡張できないのである。なぜかというと、後退する意味を表すのならば、後接する場所名詞は後退した後の場所、つまり着点でなければならないが、V下に後接する場所名詞は「海、河、水、井、陥阱」などの限られた場所を除いて、起点となるため、矛盾が生じるのである。3.2.2.4 にて述べたような、上昇から前進へと意味

拡張する際の「奥行きの知覚」というメカニズムに反するのである。また、日本語の上昇を表す複合動詞後項が「前進」という意味に拡張しないのは、日本語に「～すすむ」という前進を表す複合動詞後項があるからだと考えられる。中国語にも「～進」という方向補語が存在するが、これは「入る」という意味を表わしているため、「～上」が「前進」という意味を表すようになったと考えられる。

第五章　結論と今後の課題

5.1 結論

本論文において、上下方向を表す日本語の複合動詞の後項動詞と中国語の方向補語について意味分析した。上昇方向を表す日本語の「～あがる、～あげる、～のぼる」の三種の後項動詞、および中国語の「V＋上」における方向補語である「～上」を取り上げ、また、下降方向を表す日本語複合動詞の後項を成す「～さがる、～さげる、～おりる、～おろす、～くだる、～くだす、～おちる、～おとす」の八種類の後項動詞、並びに中国語の「V＋下」における方向補語である「～下」を取り上げて意味分析を行った。その結果、従来の研究では明らかにされていなかった多義的別義が派生したプロセスと複数の意味の相互関係及びその多義構造を明らかにした。

続いて、意味分析の結果に基づいて、日本語と中国語の対応関係を明示し、その差異を指摘した。さらに、両言語の空間認知のあり方の違いを生じせしめる根拠・原因についても考察を行った。その結果が以下の二点である。

(1)日本語の上昇方向を表す後項動詞は焦点を位置変化に置いたものと、焦点を経路に置いたものに分けられる。一方、中国語にはその区別がない。対応して、日本語の下降方向を表す後項動詞は異なる焦点の当て方により別々の動詞を持ち、それぞれの動詞から派生した意味も多様で、複雑な体系をなしている。一方、中国語の方は日本語のような複雑な区別はなく、「V 下」という単一の方向補語を用いる。その意味も日本語に比べると少ない。また、日本語の複合動詞後項は下降を表す方が上昇を表す方よりかなり多く、意味も多様である。それに対し、中国語の方向補語は上昇と下降をそれぞれ一つの動詞(V 上、V 下)で表わしていて、V 上と V 下の意味の数は日本語ほどの大きな差はなく、V 上の意味は九つで V 下の意味は八つである。

(2)中国語のＶ上における上は、「上昇」という基本義から、「前進」という派生義に拡張する。これは人間の視覚のメカニズムの一つである奥行きの知覚によるものである。しかし、日本語の上昇を表す複合動詞後項の中に「前進」という意味は含まれていない。これは、日本語に「進む」という前進を表す動

詞が存在するためだと思われる。日本語の下降方向を表す複合動詞後項の中で「～さがる」は「後退」という意味に拡張する。これは中国語のＶ上における上が前進という意味に拡張する際におけるメカニズムと同じ奥行きの知覚という視覚のメカニズムによるものである。しかし、中国語のＶ下の意味の中には「後退」という意味は含まれていない。

結論(2)のような日本語と中国語の空間認知のあり方の違いについては、以下のような原因によるものだと思われる。中国語のＶ上には「前進」という意味が含まれているのにもかかわらず、Ｖ下には「後退」という意味は含まれていない。これは中国語のＶ上とＶ下と結びつく場所名詞の違いにその原因を見出すことができる。Ｖ上と後接する場所名詞は着点としかならないが、Ｖ下と後接する場所名詞は起点にも着点にもなれるからである。「走上前方」のように、上が前進という意味を表す場合、Ｖ上に後接する場所名詞は「前方」のように着点であり、上昇を表す際と同じである。しかし、中国語のＶ下と結びつく場所名詞は「海、河、水、井、陥阱」などのような、その場所から「離脱」して、さらに「下降」することができないと認識されるものを除いて、着点ではなく、起点として判断される。このために、Ｖ下は後退という意味には拡張できないのだと思われる。後退する意味を表すのならば、後接する場所名詞は後退した後の場所、つまり着点でなければならない。けれども、Ｖ下に後接する場所名詞は「海、河、水、井、陥阱」などの限られた場所を除いて、起点となるため、上昇から前進へと意味拡張する際の「奥行きの知覚」というメカニズムに反し、矛盾が生じるのだと思われる。このような中国語のＶ下に後接する場所名詞の性質によって、Ｖ下は後退という意味に拡張しないのだと思われる。また、日本語の上昇を表す複合動詞後項が「前進」という意味に拡張しないのは、日本語に「～すすむ」という前進を表す複合動詞後項があるからだと考えられる。中国語にも「～進」という方向補語が存在するが、これは「入る」という意味を表わし、「前進」という意味ではないため、「～上」が「前進」という意味を表すようになったと考えられる。

5.2 今後の課題

本論文では後項動詞を対象に意味分析を行ったが、複合動詞の場合、前項動詞との意味的相互関係も大変重要であり、前項動詞と後項動詞の結合条件などは更なる考察が必要である。また、本論文において、垂直方向から水平方向へと意味が拡張するのを確認したが、水平方向から垂直方向へと意味が拡張することはないのか、もしなかったら、その原因は何であろうか、という疑問も残る。以上の問題点は今後の課題として、引き続き考察を進めていきたい。

参考文献

日本語の文献(五十音順)

池上嘉彦（1975）『意味論―意味構造の分析と記述―』大修館書店

池上嘉彦(1981)　『「する」と「なる」の言語学』　大修館書店

池上嘉彦(2000)　『「日本語論」への招待』　講談社

石井正彦(1983)　「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」　『日本語学』2-8　明治書院　p.79-p.90

石井正彦（1984）「複合動詞の成立――V＋Vタイプの複合名詞との比較――」『日本語学』3-11　明治書院

石井正彦（1987）『複合動詞資料集』特定研究「言語データの収集と処理の研究」成果報告書

石井正彦（1988）『造語モデルの構築とその問題点』『日本語日本文学』14　輔仁大学

石井正彦（2001）「複合動詞の語構造分類」『国語語彙史の研究』20　和泉書院

石井正彦（2007）『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房

石綿敏雄、高田誠(1990)　『対照言語学』　桜楓社

今井忍（1993）「複合動詞後項の多義性に対する認知意味論によるアプローチ――『出す』の起動の意味を中心にして――」『言語学研究』2　京都大学

上野誠司（2007）『日本語における空間表現と移動表現の概念意味論的研究』ひつじ書房

上野義和、森山智浩、入学直哉、李潤玉(2002)　『認知意味論の諸相―身体性と空間の認知』　上野義和編　松柏社

大堀壽夫(2002)　『認知言語学』　東京大学出版会

影山太郎(1993)　『文法と語形成』　ひつじ書房

影山太郎(1996)　『動詞意味論―言語と認知の接点―』くろしお出版

影山太郎、由本陽子(1997)　『語形成と概念構造』　研究社

国広哲弥（1970）『意味の諸相』　三省堂

国広哲弥(1992)　『意味論の方法』　大修館書店

国広哲弥(2006)　『日本語の多義動詞―理想の国語辞典 II』　大修館書店

呉麗君(2005)　『中国語の誤用分析—日本人学習者の場合—』　西川和男編訳　関西大学出版部

斉藤倫明（1984）「複合動詞構成要素の意味—単独用法との比較を通して—」『国語語彙史の研究』5　和泉書院

斉藤倫明(1992)　『現代日本語の語構成的研究—語における形と意味—』　ひつじ書房

柴田武、長嶋善郎、国広哲弥、山田進(1976)　『ことばの意味　辞書に書いてないこと』　平凡社

柴田武、長嶋善郎、浅野百合子、国広哲弥、山田進(2003)　『ことばの意味〈3〉辞書に書いてないこと』　平凡社

謝豊地正枝(2004)　『「X は Y が＋述語形容詞」構文の認知論的意味分析—「花は桜がいい」構文の意味分析を中心に』　慧文社

謝豊地正枝(2007)　『多義語に対する認知論的意味分析論考』　凱侖出版社

杉村泰(2005)「コーパスを利用した日本語の複合動詞「－忘れる」、「－落とす」、「－漏らす」の意味分析」『日語教育』第 34 輯　韓国日本語教育学会

杉村泰(2006)「複合動詞「－忘れる」、「－落とす」、「－漏らす」の用法」『日語学習与研究』2006 年第4期（総第 127 期）　中国日語教学研究会、対外経済貿易大学

瀬戸賢一(1995)　『メタファー思考』　講談社

瀬戸賢一(1995)　『空間のレトリック』　海鳴社

瀬戸賢一(2005)　『よくわかる比喩』　研究社

田辺和子（1983）「複合動詞の意味と構成——『～ダス』・『～アゲル』を中心に」『日本語と日本文学』3　筑波大学

谷口一美(2003)　『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』　研究社

藤堂明保・相原茂(1985)　『中国語概論』　大修館書店

長嶋善郎(1997)　「複合動詞の構造」　斉藤倫明、石井正彦編　『語構成』　ひつじ書房　p.213-p.231

仲本康一郎(2003)　「空間認知と言語理解—生態心理学のアプローチ」　『人工知能学会ことば工学研究会発表資料』　No.14　p.55-p.64

仲本康一郎、深田智(2008)　『概念化と意味の世界』　山梨正明編　研究社

南場尚子（1991）「複合動詞後項の位置づけ」『同志社国文学』34 同志社大学国文学会
野村益寛(2002) 「＜液体＞としての言葉：日本語におけるコミュニケーションのメタファー化をめぐって」 『認知言語学 II：カテゴリー化』 東京大学出版会 p.37-p.57
姫野昌子（1978） 「複合動詞『～こむ』および内部移動を表す複合動詞類」 『日本語学校論集』5 東京外国語大学
姫野昌子（1980） 「複合動詞『～きる』と『～ぬく』、『～とおす』」 『日本語学校論集』7 東京外国語大学
姫野昌子（1982） 「対象関係を表す複合動詞」――『～あう』と『～あわせる』をめぐって――」 『日本語学校論集』9 東京外国語大学
姫野昌子(1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房
姫野昌子(2001) 「複合動詞の性質」 『日本語学』20-9 明治書院 p.6-p.15
方美麗(2004) 『「移動動詞」と空間表現―統語論的な論点から見た日本語と中国語』 白帝社
松田文子（2001）「コア図式を用いた複合動詞後項『～こむ』の認知意味論的説明」『日本語教育』111 日本語教育学会
松田文子（2002）「複合動詞研究の概観とその展望――日本語教育の視点からの考察」『言語文化と日本語教育』5 月増刊特集号 日本言語文化学研究会
松田文子(2004) 『日本語複合動詞の習得研究―認知意味論による意味分析を通して』 ひつじ書房
松本曜、田中茂範(1997) 『日英語比較選書 6：空間と移動の表現』 研究社
松本曜(1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」 『言語研究』114 日本言語学会 p.37-p.83
松本曜(2003) 『認知意味論』 大修館書店
丸尾誠(2005) 『現代中国語の空間移動表現に関する研究』 白帝社
望月圭子（1990）「日･中両語の結果を表す複合動詞」『東京外国語大学論集』40 東京外国語大学

籾山洋介(2001)　「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」　山梨正明他編　『認知言語学論考』No.1　ひつじ書房　p.29-p.58
籾山洋介(2002)　『認知意味論のしくみ』　町田健編　研究社
森田良行(1979)　『基礎日本語—意味と使い方』　角川書店
森田良行(1980)　『基礎日本語 2—意味と使い方』　角川書店
山梨正明(1988)　『比喩と理解』　東京大学出版会
山梨正明(1992)　『推論と照応』　くろしお出版
山梨正明(2000)　『認知言語学原理』　くろしお出版
山梨正明(2004)　『ことばの認知空間』　開拓社
ラマール・クリスティン(2002)　「助詞への道—漢語の“了”, “得”, “倒”の諸機能をめぐって」　大堀壽夫編　『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』　東京大学出版会　p.185-p.215
ラマール・クリスティン(2004)「中国語における方向詞のカテゴリー化」　『言語』　vol.33 no.4　大修館書店　p.66-p.74
林慧君(1999)　「複合動詞の自他対応についての一考察－語形と意味的構造との関わりを通して－」　『台湾日本語学報』第 14 号　中華民国日本語文学会　p.171－p.196
林翠芳（1993）「日本語複合動詞研究の現在」『同志社国文学』37　同志社大学国文学会

英語の文献及び翻訳文献(アルファベット順)

Gibbs, Raymond W., 1994. *The Poetics of Mind: figurative thought, language, and. understanding.* Cambridge: Cambridge University Press.　(辻幸夫、井上逸兵監訳　小野滋、出原健一、八木健太郎訳(2008)　『比喩と認知 —心とことばの認知科学—』　研究社)
Huang, Shuanfan. 1994. “Chinese as a metonymic language.” *In honor of William S-Y Wang: Interdisciplinary studies of language and language change.* Pyramid Press.
Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By.* Univ. of Chicago Press.（渡部昇一、楠瀬淳三、下谷和幸訳（1986）『レトリックと人生』　大修館書店）

Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things—What Categories Reveal about the Mind* : The University of Chicago Press. (池上嘉彦・川上誓作他訳 (1993)『認知意味論――言語から見た人間の心』紀伊国屋書店)

Langacker, Ronald W.1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. vol. 1. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 2000.「動的使用依拠モデル」坪井栄次郎訳　坂原茂編　『認知言語学の発展』　ひつじ書房　p.61-p.143

Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction.* New York: Oxford University Press.

Leonard Talmy.2000.「イベント統合の類型論」 高尾享幸訳　坂原茂編　『認知言語学の発展』　ひつじ書房　p.347-p.451

Levinson,S. 2003. *Space in language and Cognition. Explorations in Cognitive Diversity.* Cambridge: Cambridge. University Press.

Reddy, M.J. 1979. "The conduit metaphor: a case of frame conflict in our language about language." In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and Thought.* p.284-p.324. London: Cambridge University Press. [second edition in 1993 p.164-p.201].

中国語の文献(アルファベット順)

邱廣君(2007)　「談"V 下＋賓語"中賓語的類、動詞的類和"下"的意義」　馬慶株主編　『漢語動詞和動詞性結構・二編』　北京大学　p.275-p.290

劉月華他(1991)『現代中国語文法総覧(下)』相原茂監訳 くろしお出版

呂叔湘主編(1983)　『現代漢語八百詞』　商務印書館

沈家煊(2004)　「"有界"與"無界"」　束定芳主編　『語言的認知研究－認知語言學論文精選』　上海外語教育出版社　p.334-p.355

鵜殿倫次(1993)「漢語趨向複合動詞與處所賓語」 大河内康憲主編　『日本近、現代漢語研究論文選』　北京語言学院出版社 p.197-p.217

于康(2006)　「"V 上"中"上"的語義分類與語義擴展機制」　『言語と文化』9　関西学院大学　p.19-p.35

于康(2006)　「"V 下"的語義擴展機制與結果義」　『中国語の補語』　白帝社　p.209-p.231

用例出典

中央研究院現代漢語標記語料庫 (Academia Sinica Balanced Corpus of Modern Chinese)〈http://www.sinica.edu.tw/SinicaCorpus/index.html〉

『新潮文庫の 100 冊 CD-ROM 版』(1995)　新潮社

青空文庫〈http://www.aozora.gr.jp/〉

『CD-HIASK 2003 朝日新聞記事データベース』(2004)　紀伊国屋書店

『CD-HIASK 2004 朝日新聞記事データベース』(2005)　紀伊国屋書店

MSN 産経ニュース〈http://sankei.jp.msn.com/〉

日本経済新聞〈http://www.nikkei.co.jp/〉

辞書

『広辞苑　第 5 版　CD-ROM 版』(2000)　岩波書店

『三省堂　スーパー大辞林』〈http://www.sanseido.net/〉

『心理学辞典　CD-ROM 版』中島義明他編 (1999)

『大辞泉(デジタル大辞泉)』〈http://www.japanknowledge.com/〉